

津軽海峡域における縄文時代中期後半から 後期中葉の配石墓の展開とその背景

高屋 昂平

要旨

縄文時代中期後半から後期中葉における、津軽海峡域（渡島半島南部－秋田県・岩手県北部）には、土坑墓内ないし土坑墓直上に礫が配される配石墓が多く存在する。配石墓には厚い研究史がある一方で、津軽海峡域においては、配石墓の分類や数的動態、地域性に関する基礎的な分析が不足しているため、石棺墓や環状配石墓の位置づけが明らかになっていないという問題がある。そこで本稿では、縄文時代中期後半から後期中葉における、津軽海峡域の配石墓の形態分類・長軸方向・出土遺物の分析を行い、以上の問題点の克服を試みた。分析結果から、津軽海峡域の配石墓は、時期によって配石墓が多い地域・主体となる形態が変化し、特に、後期前葉における増加、後期中葉における減少が著しいこと、配石墓は、大型配石遺構を伴う遺跡において多く検出されていること、土坑の長軸方向は、中期後半～後期初頭に、特に石棺墓の長軸が揃う傾向が強いが、後期前葉には揃う傾向が弱くなること、遺物の出土割合は後期前葉以降に高くなり、特に、土製品・石製品は後期前葉、装身具類は後期中葉の渡島半島南部において出土例が多いことを明らかにした。分析結果から、土坑直上配石の大きさにより性格が異なる2種類に分類できること、石棺墓は、土坑の壁に沿って板状の木材を立てて並べる「木柵墓」を母体に、岩木山麓で出現したこと、配石墓と土製品・石製品が、環状列石・大型配石遺構を中心とする埋葬行為とそれに伴う行動様式において重要な役割を果たしたこと、環状列石出現以前の津軽海峡域において、大規模遺構を造営することができる組織がすでに存在し、環状列石・大型配石遺構を中心とした埋葬行為とそれに伴う行動様式は、環状列石出現以前から成立していた可能性があることを指摘した。以上のことから、縄文時代中期後半から後期前半の津軽海峡域における配石墓・環状列石は、在地の要素をベースに、他地域の影響を受けつつ変容したことを示し、津軽海峡域における縄文時代中期後半から後期中葉の社会変動が、伝統を活かした穏やかな変化であった可能性を提示した。

はじめに

縄文時代中期後半から後期前半における、津軽海峡域（渡島半島南部－秋田県・岩手県北部）には、土坑内ないし土坑直上に礫が配される配石墓が多く存在する。土坑の壁に沿って板状の礫が配される組石石棺墓（以下、石棺墓）や、土坑直上に環状に礫を配する環状配石墓といった、津軽海峡域に特徴的な配石墓の存在や、配石墓と環状列石との関係に関する議論は、古くから注目を集めてきた。一方で、石棺墓や環状配石墓以外の配石墓に関する研究は少なく、石棺墓や環状配石墓の特徴を相対的に捉えなおす試みや、配石墓と環状列石との地域性を比較する試みは乏しい。

そこで本稿では、配石墓の形態分類・長軸方向・出土遺物の分析を通し、環状配石墓の特徴・石棺墓の成立・配石墓と環状列石との関係について考察したい。

1. 研究史と問題の所在

1-1. 研究史

1-1-1. 配石墓の研究史

礫が土坑内、あるいは土坑直上に配される配石墓

は、縄文時代の日本列島全域に分布し、縄文時代中期後半以降に多数造営されるようになる（谷口2019ほか）。

配石墓研究の端緒のひとつは、北海道道央部における、ストーンサークルの発見である。音江ストーンサークル（北海道深川市）を報告した渡瀬荘三郎は、北海道のストーンサークルが墓としての機能を持つことを指摘した（渡瀬1886）。渡瀬に続いて北海道のストーンサークルに注目した阿部正巳は、大陸のツングース系の遺構と北海道のストーンサークルの類似を指摘した（阿部1919, 1920）。一方本州との関連については、上の山貝塚（岩手県大船渡市）の環状列石を報告した長谷部言人が、本州の環状列石と同じ括りでは捉えられない可能性を指摘している（長谷部1919）。

北海道のストーンサークルを、日本列島の配石遺構の中に位置づけたのは、忍路（北海道小樽市）や音江や西崎山（同余市町）、札地（青森県東通村）や巫女地塚（同）のストーンサークル、配石遺構の調査を行った駒井和愛である。氏は、北海道のストーンサークルに類似する遺構が、東日本の縄文文化に普遍的に存在

することを指摘し、東日本を「環状列石墓文化圏」、西日本を「ドルメン（支石墓）文化圏」と区分した（駒井 1952, 1959）。氏は他にも、日本列島の配石墓を、東北アジア大陸部の配石遺構と同様の流れにあることを予察している（駒井 1973 ほか）。阿部や駒井の指摘は、現在とは異なる年代観に基づく部分があり、そのまま適用することはできない。しかし、日本列島全体を視野に入れた配石墓研究の必要性を提起したという点、配石行為が世界的に普遍的行為であることを明らかにしたという点で、重要な意味を持つ。一方大山柏は、日本列島の各地の配石遺構を世界各地の配石遺構と比較し、独自性が目立つことを指摘している（大山 1941）。阿部・駒井らの議論を継承した阿部義平や上野佳也は、ストーンサークルと大陸の事例との形態的類似を認める一方、配石遺構が本州を起源とする可能性が高いことを指摘した（阿部 1968；上野 1984）。縄文時代早期～前期頃の中中部地方で、形の整った配石遺構がみられるためである。

駒井や上野の研究を経て、日本列島を俯瞰して、配石墓の類型化、起源や変遷を検討する研究が現れる。配石墓の類型化について大きな役割を果たしたのは鈴木保彦である。氏は、関東地方・中央高地を中心に、本州の配石墓を集成し、形態・出土遺物・立地についての分析を行った（鈴木 1980, 1986, 2015, 2016）。形態については、まず土坑の壁に沿って礫を並べているか否か、次に土坑の壁に沿った礫がどのように配置されているか、最後に土坑直上の礫がどのように配置されているかにより分類されている。氏は、配石墓の下部土坑は長方形を呈すものが多いこと、多くの場合複数の配石墓が集中して検出され、墓域を形成していること、副葬品と土坑上部配石出土遺物には明確な差があることなどを指摘している。氏の研究は、配石墓の構造を土坑内配石、土坑外配石に分けて分類したことで、多種多様な配石墓を包括的に扱えるようにしたという点で評価できる。一方、石棺墓以外に土坑内に礫が配置される事例については、副葬品的意味合いを重視した「抱石墓」としてその存在を指摘するに留まっており（鈴木 1986, 2016）、礫が多数埋納される事例には触れていない。

列島東半部の配石遺構を集成・分析した塚原正典は、縄文時代中期には葬墓制との関連が薄い配石遺構が多いが、後期には葬墓制と関連する配石遺構が増加する傾向を指摘している（塚原 1987）。氏の指摘は、配石行為と埋葬行為の結びつきが強まるのが後期以降であることを明らかにした一方、大まかな時期区分での分析にとまっておき、詳細な画期については再検討を要する。

鈴木や塚原以後は、氏らの研究をベースにした、地域研究が盛んになった。特に、関東地方北部・中央高地では、縄文時代後期中葉以降に出現する石棺墓に関する研究が多い。天神原遺跡（群馬県安中市）の事例に注目した大工原豊・林克彦は、配石墓群の変遷過程を明らかにし、石棺墓の構成単位、埋葬頭位の規制等を明らかにしている（大工原 2017；大工原・林 1995）。さらに大工原は、群馬県域の石棺墓の分類を行い、形態が階層差を表すことを指摘している（大工原 2022）。また、千葉豊は、樋口五反田遺跡（長野県辰野町）の分析から、再葬と関連する可能性を指摘している（千葉 1993a・b）。

渡辺清志は、東北地方北半の配石墓の変遷を議論した（渡辺 1997a・b）。氏は、津軽に分布する石棺墓、岩手県に分布する「立石型（花卉状に礫が配されるもの）」、秋田県に分布する「大湯型（いわゆる「日時計形」配石）」が、相互に関連しあいながら変遷したと指摘した。氏の研究は、東北地方北半の配石墓を系統立てて説明した点で重要な意味を持つ。

北海道においては、矢吹俊男が配石墓の類型化を行っている（矢吹 1988）。氏は配石が雑然とした配石墓から、整然と礫が配されるものに変遷したと指摘した。その画期は縄文時代後期中葉頃であるとしている。また、渡島半島南部の配石墓について、福田裕二・藤原秀樹が集成・分析を行っている。福田裕二は、渡島半島では後期に入ると配石墓が顕著に増加することを指摘している（福田 1999）。藤原秀樹は、縄文時代中期後半から後期にかけて、直上から覆土にかけて礫が配置される事例が増加することを指摘している（藤原 2014）。また氏は、東北地方北部と渡島半島南部との共通点として、副葬品が不明瞭であることと、「廃屋墓」が存在することを挙げている（藤原 2019）。

津軽海峡域では、古くから石棺墓や環状配石墓といった、特徴的な配石墓が注目されてきた。最初に報告された石棺墓は、山野峠遺跡（青森県青森市）の事例である（喜田 1934）。山野峠遺跡の事例は当初、土器棺墓に注目が集まり、石棺墓の構造には深く触れられなかった。石棺墓の構造が明らかになった最初の事例が、矢石館遺跡（秋田県大館市）の事例である（奥山 1954）。矢石館遺跡では5基の石棺墓が検出されたが、いずれも縄文時代晩期の事例であった。

1960年代以降は堀合遺跡群（青森県平川市）の発見や（葛西編 1974, 1981）、山野峠遺跡の再調査により（江坂 1967；葛西編 1983）、基礎的な分析が進んだ。津軽地方における多くの発掘に関わった葛西励は、石棺墓の分類と埋葬方法に関する検討を行った。氏は、山野峠遺跡に特徴的な、土坑底部に敷石がある事例を

「山野峠式」、敷石がない事例を「堀合式」に分類している¹⁾(葛西 2002; 葛西編 1981)。さらに、「堀合式」は土坑の長軸の長さや形状により1～3類に細分している。また、土坑の長軸が一番長い1類は、壁石と蓋石の間に地面と水平に扁平礫を配するBと、配さないAに細分される。堀合遺跡群の事例について、1類は一次埋葬施設、2・3類は二次埋葬施設としての役割を想定している²⁾。また、分布の中心が津軽であること、主体となる時期が縄文時代中期末から後期初頭であることを明らかにした(葛西 1986)。石棺墓の集成を行った滝本学は、石棺墓が見晴らしの良い土地に造営される傾向があること、1～3列に配置され、長軸が列に平行に揃えられる事例が多いことを指摘している(滝本 2005)。塚原正典は、堀合I遺跡において、石棺墓群、土器棺墓群、土坑墓群がそれぞれまとまって配置されることから、リネージにより埋葬行為に差異があった可能性を指摘している(塚原 1987)。

1990年代以降には、石棺墓の起源を議論する研究が増加する。葛西勲は、中期の三内丸山遺跡(青森県青森市)や富ノ沢(2)遺跡(青森県六ヶ所村)で検出されている、底部に周溝を持つ土坑が、木材で土坑の壁を囲った「木柵墓」である可能性を示し、石棺墓の原型となった可能性を示唆した(葛西 2002)。配石遺構の集成・分析を行った鈴木克彦は、石棺墓の起源を北上川中流域に求め(鈴木 2008, 2010)、「大木系文化」の成立とともに、石棺墓は分布を拡大しながら、他の配石墓と複合的に発展し、最終的に環状列石に収斂するとした³⁾。また氏は、縄文時代中期後半から後期前半を、葬墓制が飛躍的に発展する画期と捉えた。水上(2)遺跡の石棺墓を分析した永瀬史人は、津軽の石棺墓が南方の影響を受けて成立したことを示唆した(永瀬 2017)。氏は、水上(2)遺跡の集落構造について、時期が下るにつれ中央広場を指向するものに変化する点が、関東地方の環状集落の変容と類似することや(永瀬 2025)、「大木系土器」の北上など、中期後半以降の変化における、南方からの影響を重要視している。鈴木や永瀬の議論は、土器や集落構造、環状列石などの北上と関連づけて、石棺墓の起源を南方に求めるといった点が共通する。氏らの指摘は、石棺墓が南方の影響を受けている可能性については賛成できるものの、地域性が大きい土器や集落構造、環状列石が、津軽に分布が偏る石棺墓にどう影響を与えているのかという点については言及がない。

また、東北地方北半の配石墓の変遷を議論した渡辺清志は、石棺墓の成立については具体的に言及していないが、「大湯型」の原型になった可能性があることを指摘している(渡辺 1997a・b)。

環状配石墓が初めて検出されたのは、1976年の三内丸山遺跡の調査においてであるが(三浦ほか編 1977)、土坑墓と配石の同時期性に関しては、2010年代まで議論が続いた。調査担当者の成田滋彦は、配石が土坑を囲んでいることから、下部土坑と土坑直上配石に大きな時期差はないと判断した(三浦ほか編 1977)。一方鈴木克彦は、発掘調査で得られた情報のみでは、土坑墓と配石の同時期性を担保できないとして、土坑墓と配石に時期差がある可能性を指摘している(鈴木 2010)。鈴木以後に土坑墓と配石の時期差が指摘されることはなく、概ね土坑墓と配石は同時期のもので捉えてよいようである。

環状配石墓の帰属時期については、出土遺物が少ないため、中期中葉～後葉と広く捉えられることが多かった。國木田大らは、三内丸山遺跡第11・13・31・38・39号環状配石墓から出土した炭化物の放射性炭素年代測定を行い、年代値からは主に榎林式・最花式期の遺構である可能性が高いことを指摘した(國木田・吉田 2011; 國木田・吉田・辻 2008)。また、年代値は遺構によりばらつきがあり、造営が段階的に行われた可能性も指摘している。

近年には、岡田康博と鈴木保彦が、環状配石墓に言及している。岡田は、三内丸山遺跡において、すべての土坑墓に配石が伴うわけではないことから、環状配石墓が首長墓である可能性を指摘している(岡田 2014)。鈴木は近年の論考で、環状配石墓を配石墓の類型に追加しているが、具体的な分析には踏み込んでいない(鈴木 2015, 2016)。

以上のように、配石墓研究は、世界規模での比較研究を端緒に、日本列島における俯瞰的な分析を経て、各地域において詳細な様相をつかむ段階に入っているといえる。本稿で対象とする津軽海峡域においては、環状配石墓と石棺墓が注目され、その系譜や性格に関する議論が多くなされてきたが、これらの特徴的な配石墓の位置づけには不明な点が多い。したがって、環状配石墓と石棺墓といった特徴的な配石墓以外の配石墓の分布や時期ごとの動態を明らかにし、これらを相対的に捉えなおす必要がある。

1-1-2. 配石墓と環状列石の関係

津軽海峡域(本州北緯40度以北～渡島半島南部)における、縄文時代中期後半～後期前半の配石墓研究は、環状列石研究と一体となって発展してきた。津軽海峡域における環状列石研究は、戦後まもなく行われた大湯環状列石の発掘をきっかけに活発化した(齋藤編 1953)。墓か否かという機能論に焦点があてられ、齋藤忠や江坂輝弥により議論が交わされた。齋藤は、

大湯環状列石の下部土坑における土壌残存脂質分析の結果、一部の土坑から、高等動物に特徴的な脂肪酸とコレステロールが検出されたことから、少なくとも一部は埋葬に用いられたと考えるのが妥当であると指摘し、環状列石が墓域であることは疑いないと主張した(齋藤1971, 1985)。

齋藤と同様の考えを持っていたのは水野正好である。氏は、大湯環状列石を配石墓群であると捉え、配石墓の配置に、社会組織を表す分節構造があると指摘した(水野1968)。水野の議論は環状集落と環状列石の構造に共通点を見出す議論に継承されている(阿部2008; 佐々木2002; 谷口2017ほか)。

一方江坂輝弥は、環状列石を墓であると断定するのは時期尚早であるとした。氏は周囲の遺構との関係性を重視し、生活の場としての機能を強調している(江坂1971, 1985)。江坂と同様、環状列石を墓と捉えるのに慎重であったのは大場磐雄である。氏は、上原遺跡(長野県大町市)のストーンサークルについて、信仰関係の遺構であるとしている(平林ほか編1957)。墓としての痕跡が乏しく、当時として認定されていた、北海道の環状列石とは時期が離れているためである。

1990年代に入ると、集落との関係性や、東日本全体からみた、環状列石の成立と広がり環状列石研究の主な論点となった。特に集落との関係性に注目したのは佐々木藤雄と阿部昭典である。

佐々木藤雄は、配石遺構の内側に墓域がある長野県大野遺跡(縄文時代中期後葉)を、環状列石の初源モデルとしている(佐々木2002ほか)。氏は、環状列石そのものを墓とは捉えなかったが、墓域を生活の場と区別する役割があったと指摘している。東北地方北部の、集落を伴う大湯環状列石(秋田県鹿角市)や伊勢堂岱遺跡(秋田県北秋田市)も同様に捉え、「葬祭型環状列石」に分類している(佐々木2007)。さらに、鷲ノ木遺跡(北海道森町)の事例を挙げ、列石内に土坑墓を伴わない環状列石を「葬祭分離型環状列石」に分類し、環状列石が持っていた、墓域を他の場所と区別する役割が失われた事例であると捉えている。

阿部昭典は、環状列石と集落の関係性に着目したほか、環状列石の東日本全体への広がりについて検討した(阿部2008)。東北地方北部の環状列石については、北関東・中央高地起源の環状列石が、在地の集落構造に受容され成立したと述べている(阿部2021a)。一方、両地域の環状列石には時期差があり、明確な系統、系譜関係については立証できていないことから、「北関東系環状列石」と「北東北系環状列石」に分けて捉えている(阿部2024)。氏は、配石墓と環状列石の関係

について明確な意見を述べているわけではない。一方で、東北地方北部における環状列石成立期に、岩手県北部において配石墓群が出現することを、「環状列石造営につながる大きな変化」(阿部2021b: 4頁)と捉えており、一定の関係性があることを示唆している。

一方、小林克は、掘削して墓域を構築し、その土もって墓域を囲った周堤墓と、環状列石とを一連の流れで捉える立場から、環状列石と北海道・東北地方北部の葬制との関連を重要視する(小林2007)。氏は、モンガクB遺跡(北海道仁木町)や才の神遺跡(秋田県由利本荘市)における事例が、環状列石・周堤墓の原型である可能性を指摘している。これらの遺跡では、環状配石を伴う土坑墓が、居住域から離れた位置に数基かたまっている。

また筆者は、青森県域の環状列石の成立について、「列状配置」をはじめとした在地の要素の影響を重視する(高屋2024)。青森県域の環状列石には、南方からの影響のみでは説明しきれない地域性があるためである。

小杉康は、環状列石をはじめとした大規模記念物の成立について、「葬祭制」の観点から分析している(小杉1995, 2014)。氏は、大規模記念物の成立について、各地の集団の死生観が重要だと指摘する。葬祭制には、死者を埋葬するという側面(葬制)と、死者を詣でるという側面(墓制)の2つの側面がある。これら2つの側面が、再葬をはじめとした諸制度により統合されることで、集団を維持するための死生観が生み出される(祭制)。氏は、祭制が著しく発達した結果として、大規模記念物を位置づけている。

以上のようにこれまでは、中期後半から後期前半に、埋葬行為が複雑化する過程の中で、配石墓と環状列石が関連づけられている。一方で、配石墓自体の分析から、環状列石との関係にアプローチする試みが少ないことがわかる。

1-2. 問題の所在

以上の研究史を踏まえると、津軽海峡域の配石墓研究の問題点は以下の三点である。

- ①津軽海峡域における配石墓の動態が明らかになっていない
- ②他の配石墓と比較し、環状配石墓・石棺墓の特徴を捉えなおす必要がある
- ③配石墓の分析を通し、環状列石との関連を捉えなおす必要がある

①について、津軽海峡域では、石棺墓などの特徴的な配石墓に関する研究が多くなされてきた。しかし一方で、石棺墓以外の配石墓の動態について議論されることは少ない。基礎的分析を行い、石棺墓以外の配石墓の動態を明らかにする必要がある。また、福田裕二や藤原秀樹の研究を発展させ、渡島半島南部と青森県域における配石墓の共通性と差異をより明らかにする必要がある。

②について、環状配石墓は、これまでは首長墓であると指摘されてきた（岡田 2014）。岡田の見解は、配石墓の構築には通常の土坑墓よりも労力がかかるため、賛成できる見方である。他の配石墓との比較を通し、配石墓の中にも階層性が見いだせるかどうかを明らかにし、議論を発展させる必要がある。石棺墓については、鈴木克彦や永瀬史人が南方からの影響を指摘している。鈴木は、集落構造や土器に関して、南方の要素が北上したという観点から、石棺墓の起源を北上川流域に求めている（鈴木 2010）。永瀬は、津軽海峡域における環状列石の出現との関連や、中期後半以降に大木式土器に類似する土器が、津軽海峡域でも検出されるようになることを根拠に、津軽の石棺墓が南方の影響を受けて成立したことを示唆した（永瀬

2017）。しかし、石棺墓の分布の中心は津軽であり（葛西 1986）、鈴木や永瀬の議論の根拠である、集落構造や土器、環状列石といった要素は、地域による差異が大きい。したがって、配石墓の地域性を整理し、石棺墓の分布が持つ意味をより詳らかにする必要がある。

③について、これまでに大湯環状列石が配石墓群であることや（水野 1968）、配石墓が環状列石の出現に関係していることが指摘されている（阿部 2021；鈴木 2010；高屋 2024）。しかし、配石墓自体の分析を通して環状列石との関係を探る試みは少ない。したがって、配石墓の地域性と、形態や集落との関係、墓域との関係が多様な環状列石を比較し、埋葬行為が複雑化する縄文時代中期後半から後期前半における（小杉 2014；鈴木 2010）、配石墓と環状列石の関連を捉えなおす必要がある。

2. 研究の方法

2-1. 研究の方法

本稿では、配石墓の形態分類・下部土坑の長軸方向・出土遺物について分析を行う。これまでの研究では、石棺墓と環状配石墓以外の配石墓に関する研究が多くないためである。配石墓の動態を整理すること

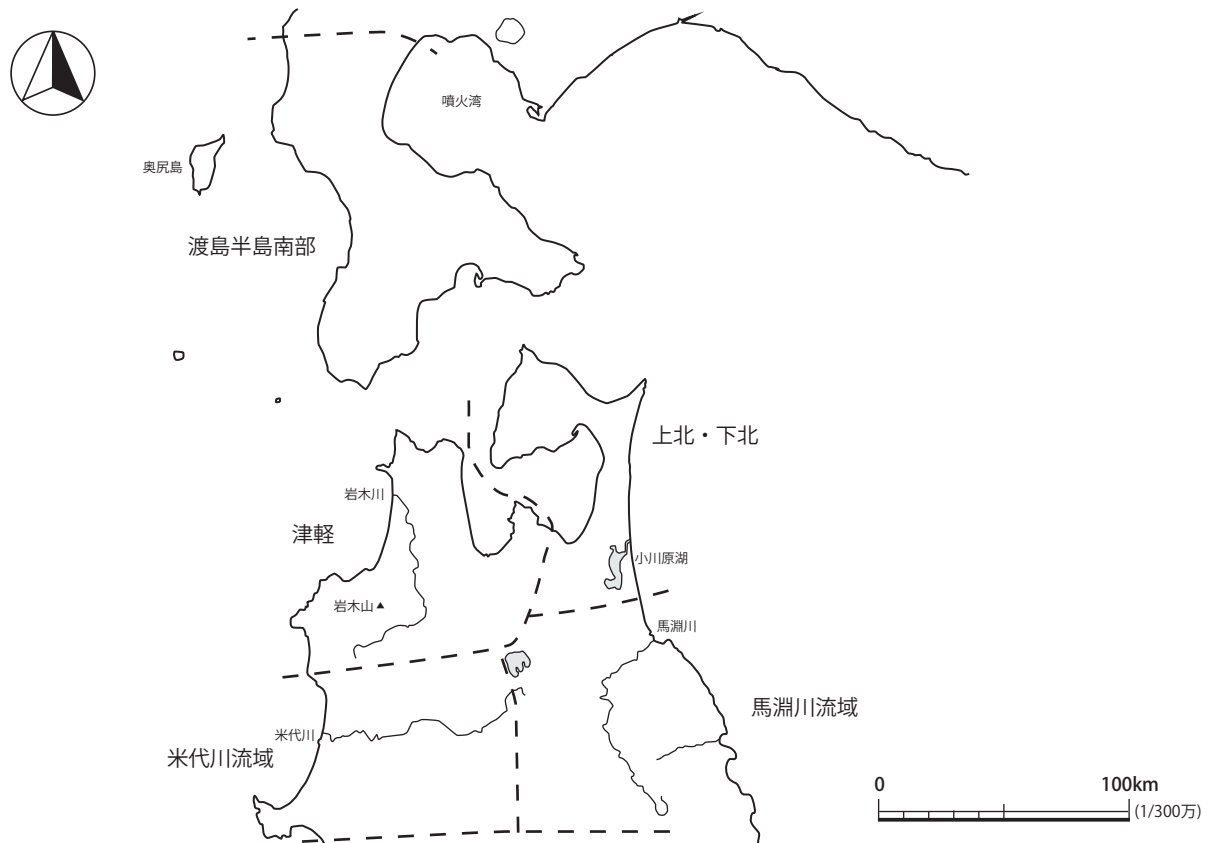


図1 本稿における地域区分

で、環状配石墓の性格と、石棺墓の成立についてのこれまでの議論を相対的に捉えなおす必要があるためである。また、環状列石との関係について、地域性を重視して、より踏み込んだ議論をする必要がある。

2-2. 対象地域・時期区分

2-2-1. 対象地域と地域区分

本稿では、十腰内Ⅰ式期前後に起こる、環状列石の出現、土製品や石製品の増加などの現象に代表される、狭義の「十腰内文化」の中心域で（成田 2007, 2019）、特に環状列石がまとまって分布する地域である、岩手県・秋田県北部（概ね北緯 40 度以北）から渡島半島南部（黒松内低地帯）を分析対象とする。分析にあたっては、これを 5 地域に分け（図 1）、地域性を明らかにする。津軽は、津軽平野・青森平野を中心とした青森県西部を指す。米代川流域は、能代平野から鷹巣盆地・大館盆地・鹿角盆地に至る秋田県北部を指す。馬淵川流域は、青森県三八地域から北上盆地以北の岩手県北部を指す。上北・下北は夏泊半島以東から小川原湖周辺、下北半島を指す。渡島半島南部は、黒松内低地帯以南の渡島・檜山地域を指す。

2-2-2. 時期区分

本稿では、縄文時代中期後半から後期前半をⅠ～Ⅳ期に大分し、各時期を 2～4 期に細分する（表 1）。Ⅰ期は、大規模集落が衰退するとともに、南方との関係が深まる時期である。土器型式では榎林式・最花式期にあたる。米代川流域・馬淵川流域では、榎林式と大木 8b 式、最花式と・大木 9 式が併存する（小保内 2008）。特に、岩手県北部においては、縄文時代中期中葉には円筒上層 e 式が分布するのに対し、榎林式期になると、大木 8b 式が数的に優越するようになることが指摘されている（小保内 2008；高田編 1993）。これは大木式土器の北上を示す現象と評価でき、配石墓の文化動態を議論する上でも重要な情報である。また、渡島半島南部では、榎林式に大安在 B 式・ノダップⅡ式が後続する（熊谷 2008）。ノダップⅡ式是最花式と共伴する事例がある。

Ⅱ期は、環状列石出現直前の過渡的な時期である。土器型式では、大木 10 式併行期から青森県史編年後期 1・2 期前半にあたる（児玉・関根 2013；三宅ほか 2017）。大木 10 式併行期には、津軽・上北・下北を中心に地文縄文に沈線で施文する「A 種」と磨消縄文を用いる「B 種」が併存する大曲 1 式が分布するが、馬淵川流域では、地文縄文に沈線文で施文する土器群がみられない（鈴木 2000）。東北地方北部では大木 10 式も出土し（森 2008）、渡島半島南部では大木 10

表 1 本稿における時期区分

時期区分	渡島半島南部	青森県域- 秋田県・岩手県北部
Ⅰ期	(見晴町式)、 榎林式	円筒上層 e 式、 榎林式/大木 8b 式
	大安在 B 式、 ノダップⅡ式	最花式
Ⅱ期	煉瓦台式	大曲 1 式、大木 10 式 併行/大木 10 式
	涌元Ⅰ式	後期 1 期
	矢不來Ⅱ式、 涌元Ⅱ式	後期 2 期前半
Ⅲ期	涌元Ⅱ式、 トリサキ式	後期 2 期後半
	トリサキ式	十腰内Ⅰ式古段階
	大津式	十腰内Ⅰ式新段階
	白坂 3 式	
Ⅳ期	N30-10 式	十腰内Ⅱ式
	手稲式、 鯨潤式古段階	丹後平式
	鯨潤式新段階	十腰内Ⅲ式

式の特徴を有する土器と煉瓦台式が共存する（熊谷 2008）。青森県史後期 1・2 期前半は、十腰内Ⅰ式に至る過渡的な時期である。後期 1 期は牛ヶ沢式、あるいは上村式と葦窪式が分布する（児玉・関根 2013；千葉・高山 2014）。渡島半島南部では、涌元Ⅰ式が併行する（大泰司 2025）。後期 2 期前半には蛭沢式、あるいは沖附（2）式、弥栄平（2）式、あるいは馬立式が分布する（児玉・関根 2013）。渡島半島南部では涌元Ⅱ式が併行する（大泰司 2025）。

Ⅲ期は、環状列石が盛行した時期であり、青森県史後期 2 期後半から十腰内Ⅰ式期にあたる。後期 2 期後半は小牧野 3 期土器群が分布する⁴⁾。十腰内Ⅰ式は、古・新段階に細分できる（児玉・関根 2013）。渡島半島南部では小牧野 3 期から十腰内Ⅰ式古段階にトリサキ式、十腰内Ⅰ式新段階に大津式が併行し、大津式に白坂 3 式が後続する（大泰司 2025；熊谷 2008）。

Ⅳ期は、環状列石が衰退する時期である。青森県史編年後期 4・5 期にあたり、青森県域には十腰内Ⅱ式、丹後平式、十腰内Ⅲ式が分布する（児玉・関根 2013；西村 2018）。渡島半島南部では、十腰内Ⅱ式と N 30 - 10 式、丹後平式と手稲式、鯨潤式古段階、十腰内Ⅲ式と鯨潤式の新段階が併存する（西村 2018, 2021）。

分析は、必要に応じて細分した時期を用いるが、基本的にはⅠ～Ⅳ期に大分した時期に基づいて分析す

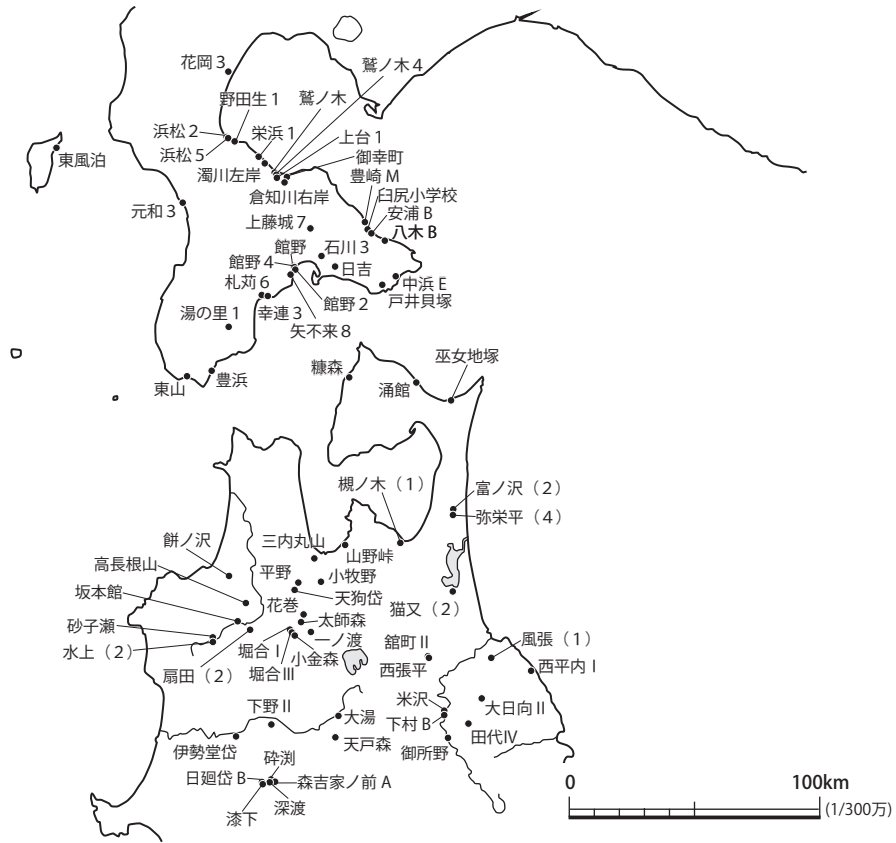


図2 配石墓検出遺跡

	1：土坑直上に礫を密に配置	2：土坑直上・近辺に礫を列状に配置	3：土坑直上に礫をまばらに配置	4：土坑直上に礫を配置しない
A：土坑の壁に沿って礫を並べる	 A1：水上（2）遺跡3号墓	 A2：白尻小学校遺跡ストーン・サークル	 A3：太師森遺跡第2号石棺墓	 A4：堀合I遺跡第1号石棺墓
B：土坑内に礫を集積する	 B1：漆下遺跡 SKQ231	 B2：浜松5遺跡2号配石遺構	 B3：栄浜1遺跡7号配石	 B4：上台1遺跡 UP-21
C：土坑内に少数の礫を入れる	 C1：鷺ノ木4遺跡配石墓2	 C2：天戸森遺跡第5号配石遺構	 C3：平野遺跡 SK91	 C4：米沢遺跡第33号土坑
D：土坑内に礫を入れない	 D1：御所野遺跡 FD52 配石	 D2：三内丸山遺跡第13号環状配石墓	 D3：日廻岱B遺跡 SK2227	

土坑内配石
方角・縮尺不同

図3 配石墓の分類

る。帰属時期を1型式に絞り切れない配石墓が多いためである。

2-3. 配石墓の認定・分類と出土遺物の認定

墓は、以下の基準で認定する⁵⁾。

- 墓の認定基準 (①～③のうちいずれかを満たす)
- ①短期間に埋め戻しが行われた形跡がある
- ②人骨、副葬品と判断できる遺物が出土している
- ③墓としての機能が想定される施設が附帯する

本稿では、以上の基準を満たす墓のうち、土坑内ないし土坑直上に礫が配されているものを、配石墓として扱う。なお、環状列石に組み込まれている事例については集成から除外した⁶⁾。この基準を満たす配石墓は、72遺跡753基ある(図2)。

配石墓は、土坑内配石・土坑直上配石の2要素から以下のように分類する(図3)。

○土坑内配石

- A類：土坑の壁に沿って礫を並べる
- B類：土坑内に礫を集積する
- C類：土坑内に少数の礫を入れる
- D類：土坑内に礫を入れない

○土坑直上配石

- 1類：土坑直上に礫を密に配置
- 2類：土坑直上、あるいは近辺に礫を列状に配置
- 3類：土坑直上に礫をまばらに配置
- 4類：土坑直上に礫を配置しない

以上の分類は、鈴木保彦の分類方法を発展的に継承したものである(鈴木1980, 1986, 2015, 2016)。氏の分類方法は、石棺墓と土坑直上配石のみを持つ配石墓という二大別を軸とし、関東地方の石棺墓を構造的に理解するのに優れている。しかし、津軽海峡域の配石墓には、石棺墓以外にも、土坑内に多量の礫を集積する事例がある。こういった事例は、氏の分類にはない。本稿の配石墓の分類では、石棺墓以外の事例で、土坑内に礫を配するB・C類を設け、津軽海峡域の配石墓により適した分類とした。なお、いわゆる環状配石墓はB2・C2・D2類のうち、土坑直上配石が環状を呈すものが該当する。石棺墓はA1～A4類が該当する。

また、長軸については、土坑の長軸が判別できる配石墓が3基以上存在する遺跡について分析する。附表1においては、長軸が西-東方向を向くものが、0°・180°、北東-南西方向を向くものが45°、北-南方向

を向くものが90°、北西-南東方向を向くものが135°となるように記載した。

出土遺物については、配石下部土坑の底部・埋土の出土遺物・土坑直上の配石付近の出土遺物を配石墓出土遺物として扱う⁷⁾。

3. 分析

3-1. 分析①：数的動態と形態

配石墓は、津軽海峡域全体では、I～II期にかけて数が増える。III期には大きく増大し、IV期にはI・II期と同水準に減少する(図4)。また、渡島半島南部では、配石墓検出遺跡が噴火湾-津軽海峡沿岸に偏る。檜山地域では、東風泊遺跡(奥尻町)・元和3遺跡(乙部町)の計4基のみ確認できた。したがって、檜山地域には配石墓があまり分布しないと評価できる。したがって、以降の分析において渡島半島南部に触れる際には、基本的に噴火湾沿岸から津軽海峡沿岸地域を指す。形態ごとに分析すると、I期にはD2・D3類の割合が高く、それ以外の形態の割合は低い。II期にはD2・3類の割合が低くなり、A類が7割近くを占めるようになる。III期にはA類の割合が激減する。一方でB類・C類・D類の割合が高くなる。特に、B1類・C3類・C4類・D3類の増加が特徴的である。IV期にはB類の割合が低くなり、C4類・D3類の割合が高くなる。

次に、時期ごとの様相を詳しく述べる。I期には、津軽での検出例が多く、米代川流域・馬淵川流域・渡島半島南部にも少数分布する(図5)。津軽では、三内丸山遺跡にD2・D3類が集中するほか、水上(2)遺跡でA4類が出現する。米代川流域では天戸森遺跡でのみ配石墓がみられ、D2・D3類が主体である。馬淵川流域では田代IV遺跡にD3類が集中するほか、西張平遺跡でC2類がみられる。上北・下北には、富ノ沢(2)遺跡のD2類1基のみ分布する。渡島半島南部では、半数弱が栄浜1遺跡に集中し、各類型がみられる。森町近辺から亀田半島では、各遺跡に少数ずつ分布し、ほとんどがC4類である。I期は、三内丸山遺跡・天戸森遺跡を中心に、D2・D3類が多くみられるのが特徴的である。

II期には、津軽で数が増加し、そのほとんどはA類である(図5)。特に岩木山麓(砂子瀨遺跡・水上(2)遺跡・餅ノ沢遺跡)、津軽平野東南部の南黒地域(堀合I遺跡・堀合III遺跡・太師森遺跡・花巻遺跡)、青森平野(山野峠遺跡)の3地域に集中する。岩木山麓ではA1類が中心で、ついでA2・A4類が多い。南黒地域も同様にA1類が中心である。太師森遺跡ではA3類も1基検出されている。青森平野ではA1類と

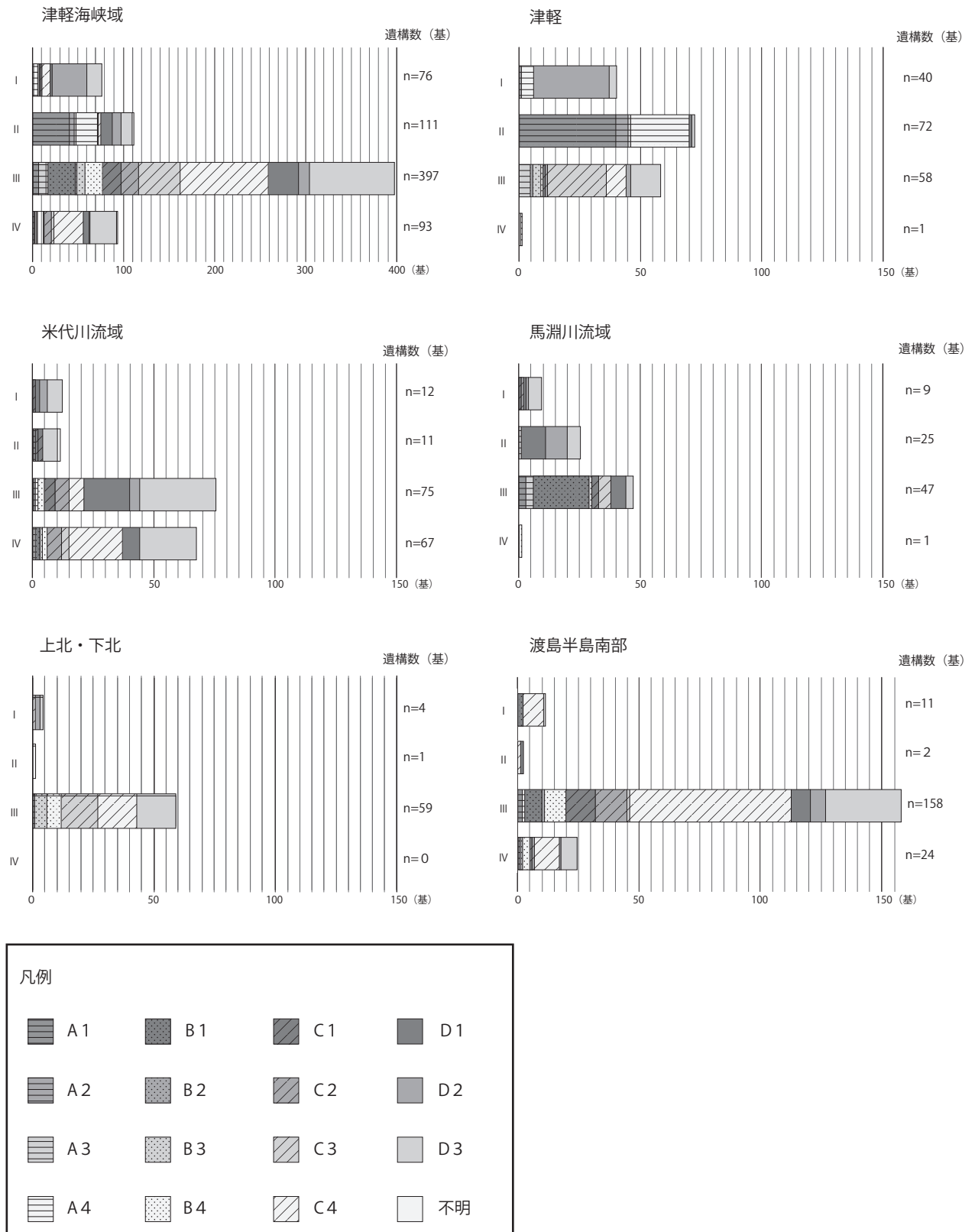


図4 配石墓検出数・形態ごとの割合

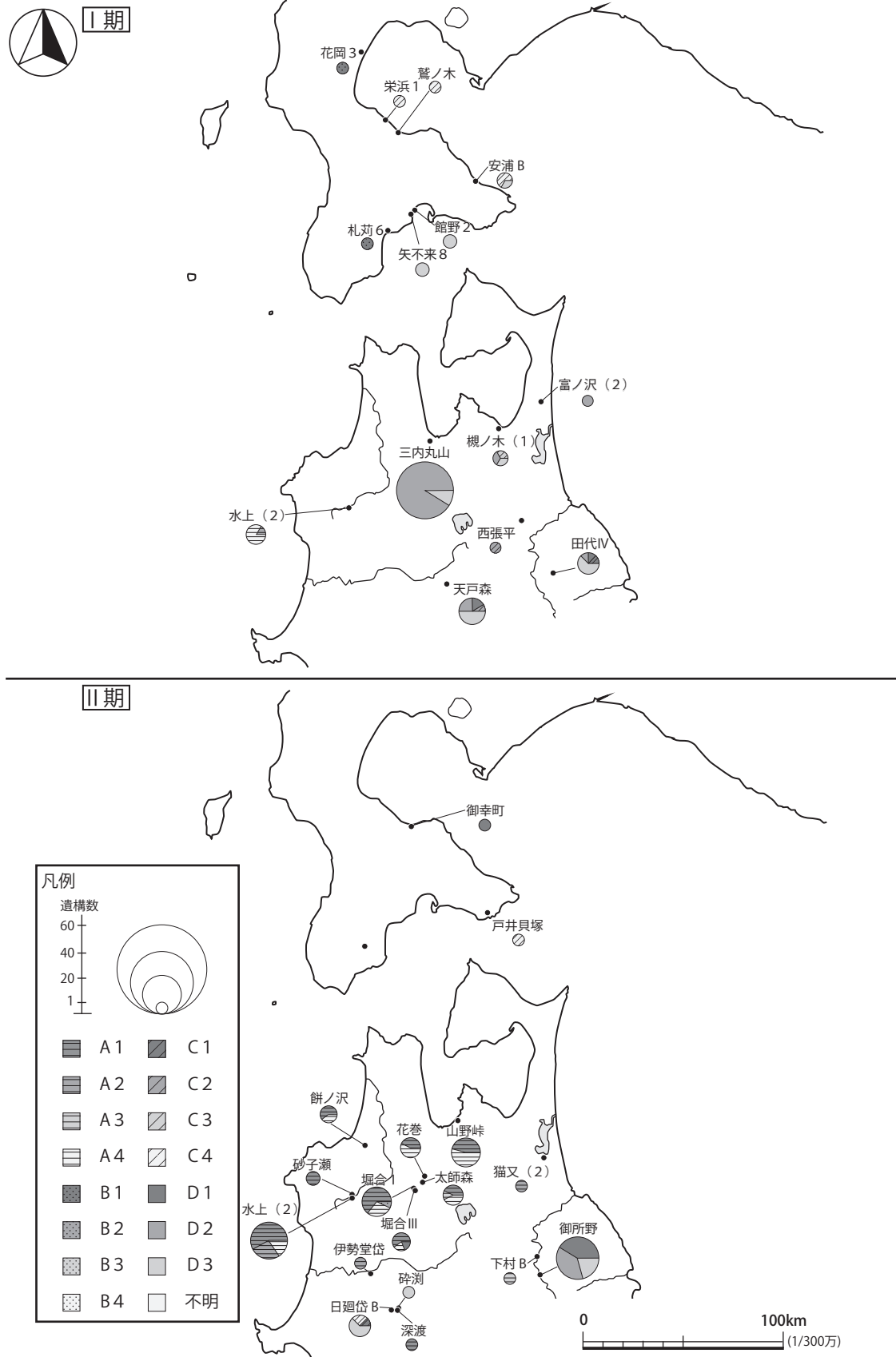


図5 I、II期の配石墓

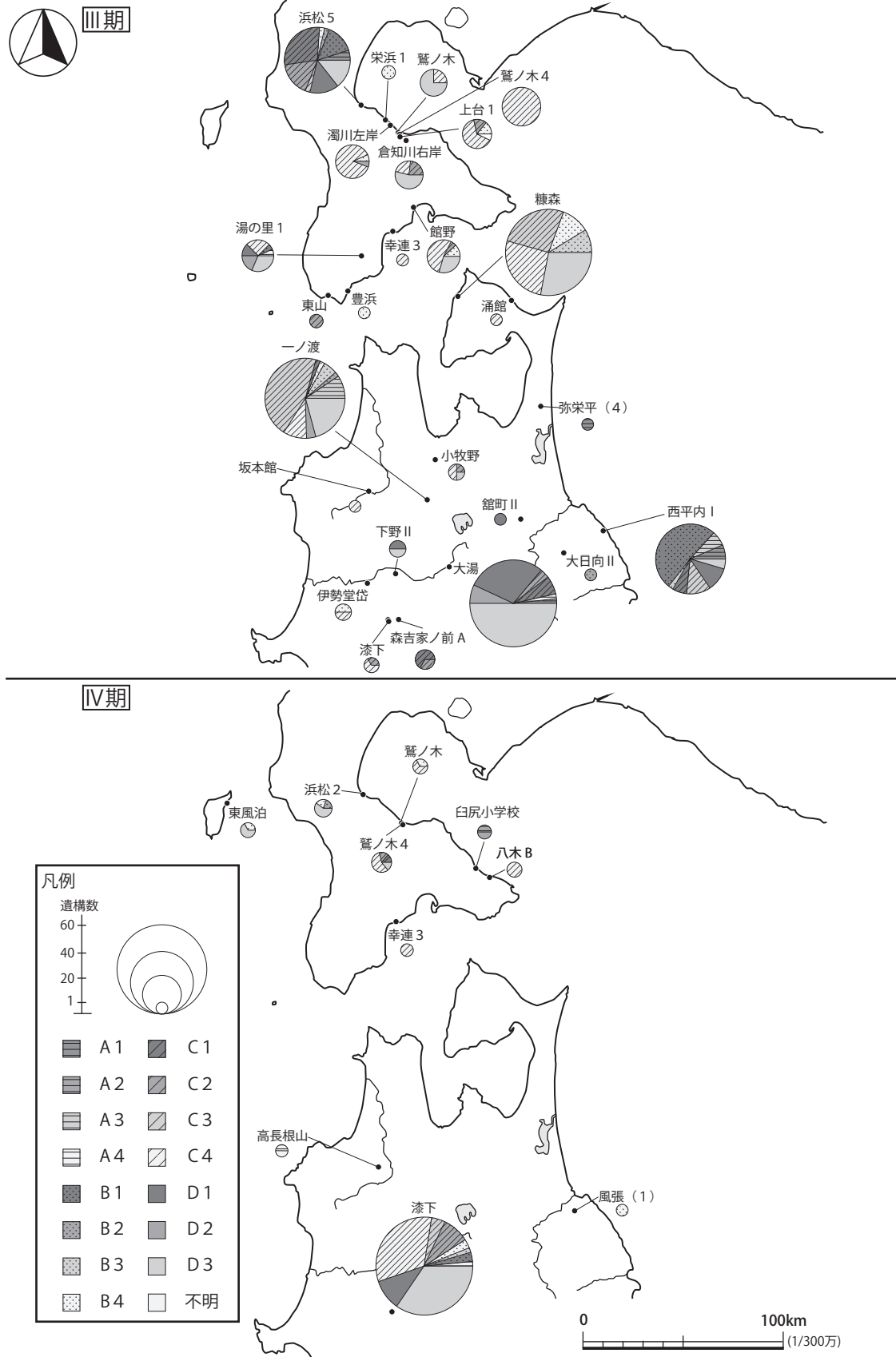


図6 III、IV期の配石墓

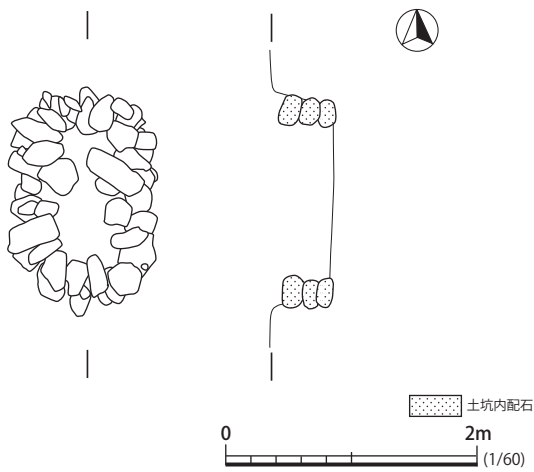


図7 下村B遺跡Cf09配石遺構・ピット

A 4類が同数程度分布する。山野峠遺跡のA類は、土坑底部に敷石があるのが特徴的である。山野峠遺跡以外で敷石があるA類は、水上(2)遺跡1号墓のみである。米代川流域でも検出例があり、D 3類が中心である。特に日廻岱B遺跡に集中して分布する。馬淵川流域では数が増加する。そのほとんどが御所野遺跡で検出されており、D類が中心である。下村B遺跡ではA類が検出されている。下村B遺跡Cf09配石遺構・ピットは、壁石が礫を積み上げる方式で構築されているのが特徴的である(図7)。津軽海峡域ではほかに、扇田(2)遺跡や一ノ渡遺跡で壁石が礫を2段に積み上げて構築されている。しかし、これらとは時期と、土坑の形態に差がある可能性が高い。したがって、以上2例の関係性は不明である。上北・下北では猫又(2)遺跡の1基のみであるが、詳細は不明である。渡島半島南部では数が激減する。御幸町遺跡・戸井貝

塚で1例ずつ検出されており、前者がD 1類、後者がC 4類である。Ⅱ期は、津軽でD 2・3類に代わってA類が盛行すること、馬淵川流域でD類が多くみられることが特徴的である。

Ⅲ期には、津軽での検出例が減少する(図6)。検出例のほとんどは一ノ渡遺跡で、C 3・D 3類が主体である。坂本館遺跡では、壁に自然礫が埋め込まれた事例が検出されているが、詳細は不明である。小牧野遺跡でも4基検出されており、C類が主体である。米代川流域では数が増加し、特に大湯環状列石に集中する。大湯環状列石ではD 1・D 3類が主体で、A 4SX(S)1のみA 4類である。伊勢堂岱遺跡ではB 4・C 4類が2基ずつみられる。漆下遺跡ではC 4類が主体で、下野Ⅱ遺跡ではD 1・D 3類が2基ずつ検出されている。馬淵川流域ではⅡ期よりも増え、そのほとんどが西平内Ⅰ遺跡の事例である。西平内Ⅰ遺跡はB 1類を主体とし、ついでC 3類・D 1類が多い。また、館町Ⅱ遺跡では土器棺に伴うD 1類が検出されている。土器棺に配石が伴う事例は、Ⅱ期の山野峠遺跡(A類)にみられるほか、小牧野遺跡環状列石に組み込まれた事例がある(図8)。上北・下北ではⅢ期のみ、配石墓が多く検出される。糠森遺跡では、C 3・4類とD 3類を中心に57基が検出されており、上北・下北においては唯一、1遺跡から複数の配石墓が検出されている。また、弥栄平(4)遺跡でA 1類が1基検出されている。渡島半島南部でも数が増加する。特に森町近辺に非常に集中しており、C 4類・D 3類が多い。湯の里1遺跡・浜松5遺跡・濁川左岸遺跡・鷲ノ木遺跡・鷲ノ木4遺跡・上台1遺跡・倉知川右岸遺跡・館野遺跡で、多くの配石墓が検出されている。湯の里1遺跡ではC 4・D 3類を中心に各

第4号土器棺墓

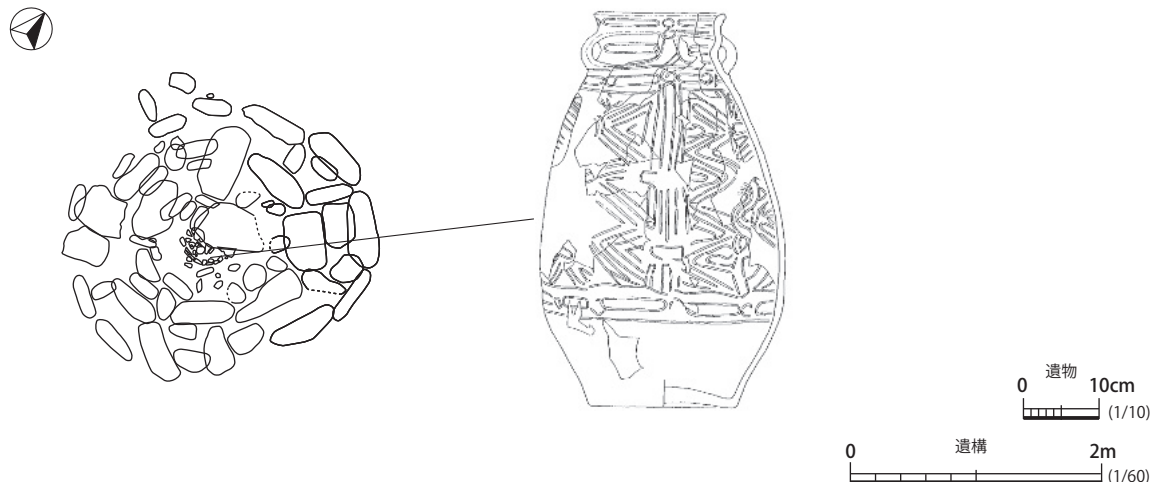


図8 小牧野遺跡の環状列石に組み込まれた土器棺墓

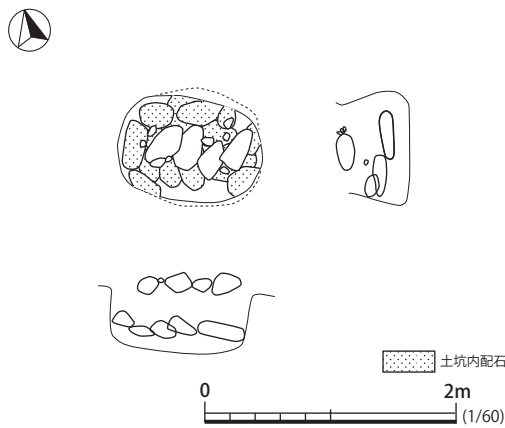


図9 浜松5遺跡2号配石遺構

類型が分布する。浜松5遺跡はC類が主体である。特に特徴的な事例はC1類の2号配石遺構である。2号配石遺構は、土坑底部付近に礫を敷きつめ、土坑直上の中央付近に、礫を土坑長軸に直交するように並べている(図9)。壁石は検出されていないものの、A類の配石方法に類似する事例である。濁川左岸遺跡ではほとんどがC4類である。鷺ノ木遺跡はD3類、鷺ノ木4遺跡C4類のみ検出されている。上台1遺跡はC4類が主体である。倉知川右岸遺跡はC・D類のみであるが、土坑直上配石にはばらつきがある。館野遺跡はC4・D3類が主体である。また、Ⅲ期の渡島半島南部には、C2類が複数検出されているのが特徴的である。特に、東山遺跡の2基は、掘り込みが土坑に対し非常に大きいため、「家屋墓」・「廃屋墓」に類する事例と位置付けることができる。竪穴様の円形の掘り込みの壁に沿って礫が配置され、その内部に土坑墓が配置されているためである(図10-1・2)。Ⅲ期は、津軽以外の地域において配石墓が大幅に増加し、馬淵川流域でB1類、それ以外の地域ではC・D類が主体的である。配石墓の数的動態、主体となる形態について、Ⅱ期とは大きく変化が生じたと評価できる。

Ⅳ期は、津軽の事例が高長根山遺跡の2例のみとなる(図6)。いずれもA類である。米代川流域では数が維持されるが、森吉家ノ前A遺跡の1基以外は漆下遺跡に集中する。漆下遺跡の主体はC2・C4・D3類である。馬淵川流域では、風張(1)遺跡でB4類が1基のみ検出されている。上北・下北では配石墓が検出されない。渡島半島南部では数が激減する。鷺ノ木遺跡・鷺ノ木4遺跡・八木B遺跡ではC4類がほとんどを占める。浜松2遺跡はD3類が主体である。東風泊遺跡では、B4類1基・D3類2基が検出されている。Ⅰ～Ⅳ期を通し、奥尻島で検出された配石墓は、東風泊遺跡の3基のみである。また、白尻小学校

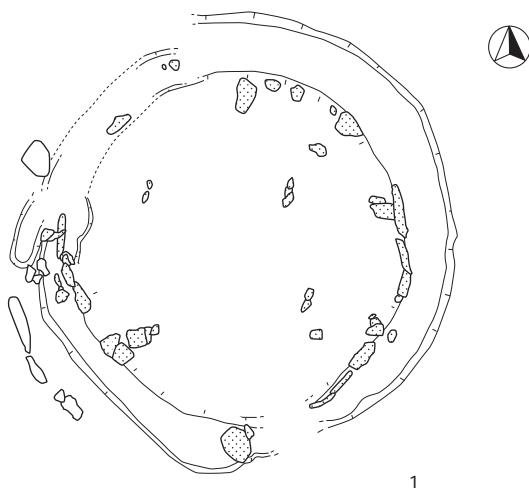
遺跡で、土坑直上に列状の配石を持つ事例が2基検出されている。ストーン・サークルは、土坑の壁の一部に沿って礫が配されていることと、小礫を土坑底部に敷きつめていることが特徴的である(図11-1)。GP-13・14は土坑を囲うように列状に配石がなされている(図11-2)。小礫を土坑底部に敷きつめた事例は、浜松2遺跡4号配石遺構でもみられる(図12-1)。また、坑底の一部に小礫を敷きつめる事例は、八木B遺跡(Ⅳ期)でもみられる(図12-2～4)。Ⅳ期は、配石墓が津軽・馬淵川流域・上北・下北ではほとんどみられない一方、米代川流域の漆下遺跡には集中的に分布するのが特徴的である。渡島半島南部では、複数の遺跡から配石墓が検出されているが、Ⅲ期以前には見られなかった事例が出現する。

最後に、時期は特定できないものの、特徴的な事例を紹介する。時期を特定できない配石墓のうち、扇田(2)遺跡SK49・小金森遺跡Pit No. 8・平野遺跡SX04・深渡遺跡SQS12はA類に分類される。扇田(2)遺跡・小金森遺跡・平野遺跡はA類が多い津軽に位置することから、Ⅱ期の遺構である可能性が高い。米代川流域に位置する深渡遺跡SQS12は、発掘調査報告書では、出土遺物と周囲の状況からⅡ期の遺構だと推測されている(杉淵編1999)。ただ、同じ米代川流域の矢石館遺跡では形態が類似する晩期の石棺墓が検出されており(奥山1954)、Ⅱ期の遺構であると断定できない(図13)。栄浜1遺跡では、14基の配石墓が縄文時代中期から後期初頭に位置づけられており、これらの多くはD2・D4類である。Ⅰ期の栄浜1遺跡では、検出された類型にばらつきがあったが、これら14基はⅠ期に帰属する可能性もあるため、実際にはD2・D4類に偏っていた可能性がある。上藤城7遺跡では、6基が縄文時代中期中葉から後期前半に位置づけられている。これら6基はいずれもC4類であり、遺跡内で類型に偏りがある事例だと評価できる。日吉遺跡ストーン・サークルは、縄文時代後期に位置づけられ、土坑底部に小型の礫を敷きつめ、土坑の外周に複数の集礫を環状に配置したものである(千代編1971)。土坑底部に小礫を敷きつめる配石方法は、白尻小学校ストーン・サークル・浜松2遺跡4号配石遺構(いずれもⅣ期)に類似する(図11-1, 図12-1)。したがって、土坑底部に小礫を敷きつめる配石方法は、Ⅳ期の渡島半島南部において特徴的であると評価できる。以上のことから、日吉遺跡ストーン・サークルもⅣ期の遺構である可能性がある。

3-2. 分析②：土坑の長軸方向

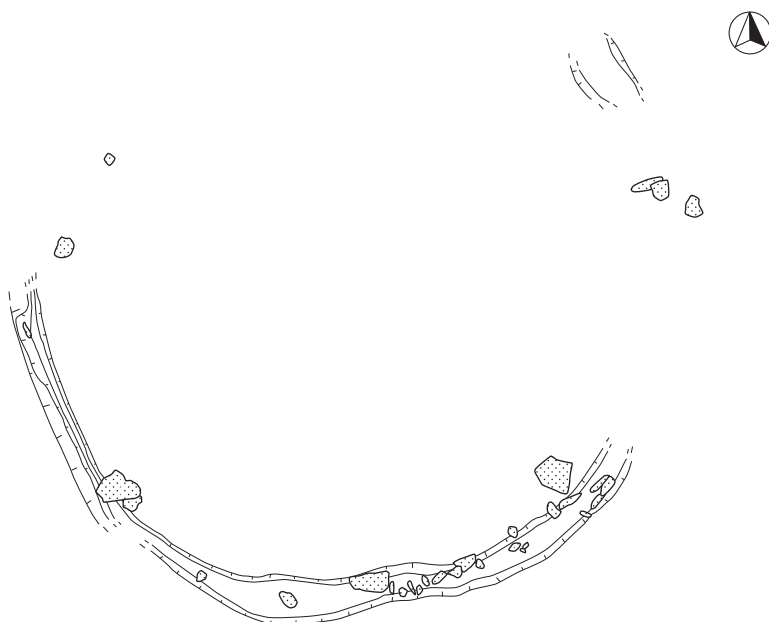
土坑の長軸が判別できる配石墓が3基以上存在する

環状列石 1



1

環状列石 2



2

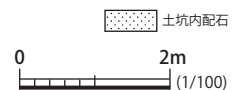
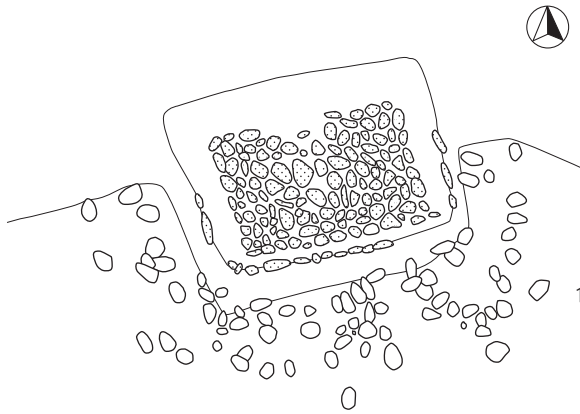


図10 東山遺跡の「家屋墓」「廃屋墓」

ストーン・サークル



GP-13・14



図11 白尻小学校遺跡の配石墓

遺跡を対象に、遺跡ごとの長軸方向の傾向を分析する。

津軽では9遺跡が分析対象である(図14)。三内丸山遺跡(I期)では21基の長軸が判別でき、大きく2つのまとまりがある。北-南~北北西-南南東方向の約10°にD2類9基が集中する。北西-南東~東北東-西南西の約30°にはD2類8基・D3類1基が集中する。この傾向は、墓域が道路跡に沿って構築されることを反映している(図17)。水上(2)遺跡(I~II期)では、22基の配石墓の長軸が判別でき、大

きく2つのまとまりがある。北東-南西~東北東-西南西の約30°にA1類9基・A2類3基・A4類2基が集中する。北北西-南南東~北西-南東の約25°にはA1類2基・A4類5基が集中する。水上(2)遺跡では、特に石棺墓A群において、東北東-西南西方向に長軸が揃う傾向が強い(図18)。餅ノ沢遺跡(II期)では、5基の長軸が判別できる。北西-南東~北北西-南南東方向の約25°にA1類2基・A4類2基が集中する。特に、一体の配石遺構としても捉えることができる第1~3号石棺墓は、長軸が揃う傾向が強

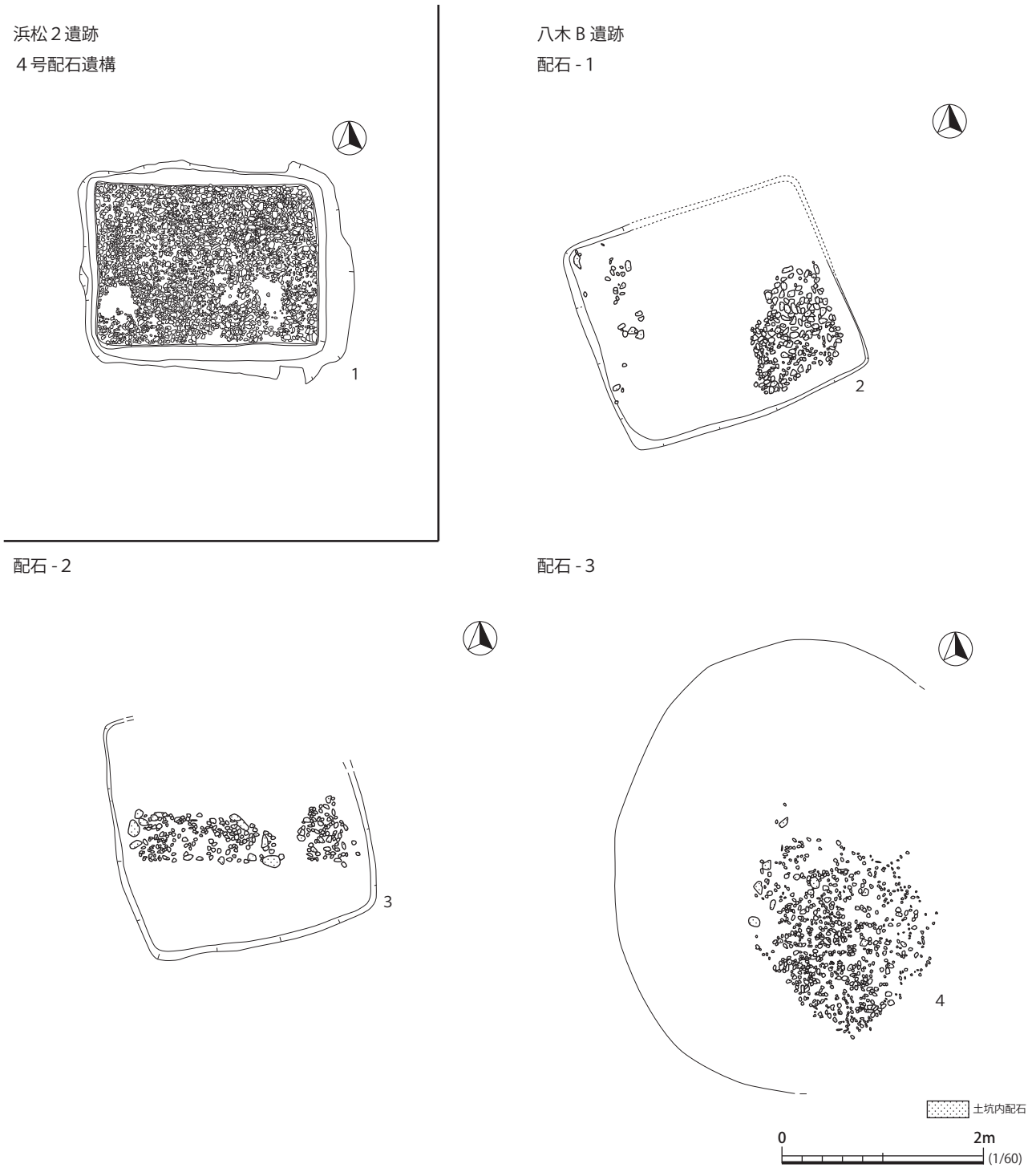


図12 坑底に小礫を敷きつめた配石墓

い (図19-1)。堀合I遺跡 (Ⅱ期) では、10基の配石墓の長軸が判別できる。そのうちA1類7基・A4類2基は北-南～北北西-南南東の約30°に集中する (図19-2)。堀合Ⅲ遺跡 (Ⅱ期) ではA1類2基・A4類1基の長軸が判別でき、北北東-南南東～西北西-東南東の約25°に集中する。太師森遺跡 (Ⅱ期) では、6基の長軸が判別でき、大きく二つにまとまる。北-南～北北西-南南東方向の25°にはA1類2基・

A4類1基、西北西-東南東～西-東方向の20°にはA1・A3・A4類各1基がまとまる。花巻遺跡 (Ⅱ期) では6基 (A1・A4類各3基) の長軸が判別でき、すべてが西北西-東南東～東北東-西南西方向の約25°に集中する。山野峠遺跡 (Ⅱ期) では11基 (A1類6基・A4類5基) の長軸が判別でき、すべてが北東-南西～東北東-西南西方向の約10°に集中する。山野峠遺跡では、複数回の発掘により、配石墓が

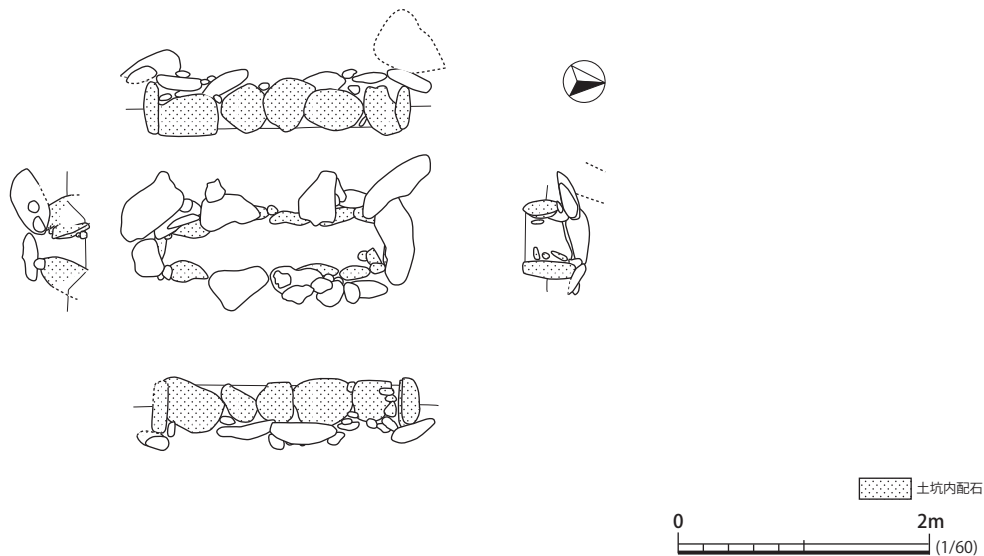


図13 矢石館遺跡第1号組石棺

長軸を揃えられて2列に並んでいることがわかっている。一ノ渡遺跡（Ⅲ期）では、20基の長軸が判別できる。長軸は明確なまとまりを持たず、形態ごとに長軸が揃う傾向もない。津軽では、Ⅰ期からⅡ期にかけて長軸が1～2方向の約30°以内にまとまる傾向がある。主体となる形態はD2類・A類である。Ⅲ期には長軸が揃う傾向がなくなる。Ⅳ期は分析できる事例が少なく、長軸方向の傾向はつかめない。

米代川流域では、3遺跡が分析対象である（図14）。天戸森遺跡（Ⅰ期）では、7基の長軸が判別できる。C2・D1類各1基・D2類2基・D3類3基の長軸が、北北西-南南東～西-東方向の約80°にある。大湯環状列石（Ⅲ期）では、28基が判別できる。長軸が揃う傾向は顕著ではないが、北北東-南南西～東北東-西南西方向の約45°に長軸がある配石墓が大半である。ついで西北西-東南東の約30°に長軸があるものが多い。形態ごとに長軸が偏る傾向もない。漆下遺跡（Ⅳ期）では、6基の長軸が判別でき、西-東方向と北-南方向にまとまりがある。西-東方向の約15°に長軸があるのはD1類1基・D3類2基、北-南方向の約35°に長軸があるのはD1・D3類各1基である。米代川流域では、Ⅰ～Ⅲ期には、長軸が揃う傾向は強くない。Ⅳ期には、漆下遺跡で2方向の30°以内にまとまるが、長軸を判別できない配石墓が主体的である。むしろ、土坑の形態に特徴がある可能性が高い。

馬淵川流域では、2遺跡が分析対象である（図15）。田代Ⅳ遺跡（Ⅰ期）では3基の長軸が判別でき、北東-南西方向の約10°にC1類・D3類各1基が集中する。D3類1基は北西-南東方向に長軸がある。

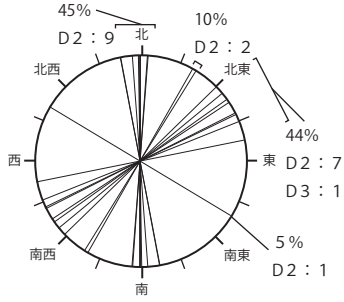
西平内Ⅰ遺跡では、顕著に長軸が集中する傾向はない。ただ、長軸を判別できるすべての配石墓が、北東-南西～西北西-東南東方向の約120°以内に長軸があり、それ以外に長軸がある配石墓は存在しない（図20）。西平内Ⅰ遺跡では、形態ごとに長軸が揃う傾向もない。馬淵川流域では、Ⅰ期には、北東-南西方向に長軸がまとまる傾向がある。ただ、事例が少なく、今後の資料の増加によっては傾向が変わる可能性がある。Ⅲ期には、長軸が顕著に集中する事例はない。

上北、下北地域では、糠森遺跡（Ⅲ期）のみ分析対象で、31基の長軸が判別できる（図15）。長軸は明確なまとまりを持たず、形態ごとに長軸が揃う傾向もない。

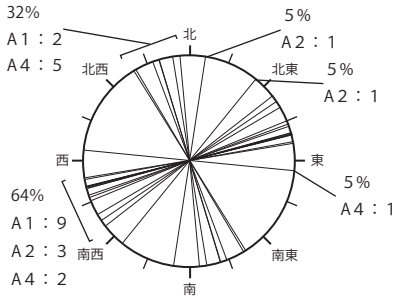
渡島半島南部では、12遺跡が分析対象である（図15、図16）。栄浜1遺跡（Ⅰ期；中～後期）では、14基の長軸が判別できる。6割以上が北東-南西～東北東-西南西方向の約30°に長軸がある。内訳はB4・C2・D1類各1基・D2・D3類各3基である。安浦B遺跡ではC4類2基・D3類2基の長軸が判別でき、すべてが北東-南西方向の5°以内に揃えられている。湯の里1遺跡（Ⅲ期）では、7基の長軸が判別でき、2つのまとまりがある。A4・D1・D2類各1基・C4類2基は北東-南西～東北東-西南西の約20°にまとまる。D2・D3類各1基は北西-南東の約10°にまとまる。浜松5遺跡（Ⅲ期）では、25基の長軸が判別できる。長軸が顕著にまとまる傾向はないが、北北東-南南西～北北西-南南東の約45°以内に長軸がある配石墓は存在しない（図21）。濁川左岸遺跡（Ⅲ期）では、6基の長軸が判別できる。顕著ではないが、すべてが東北東-西南西～東南東～西南西の

津軽

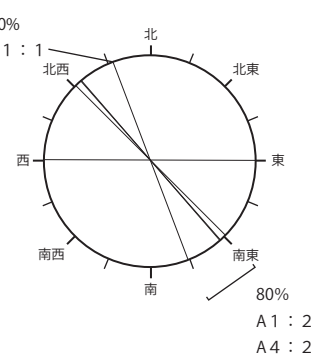
三内丸山 (I期、n=20)



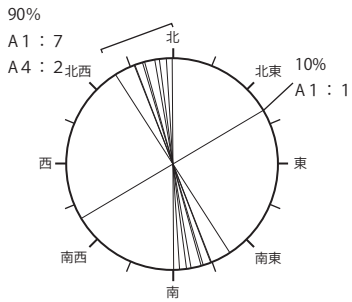
水上 (2) (I~II期、n=22)



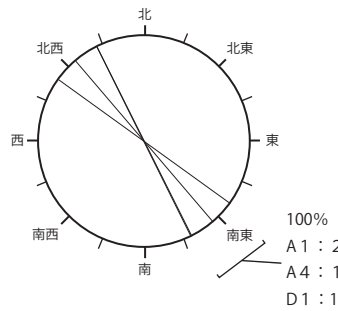
餅ノ沢 (II期、n=5)



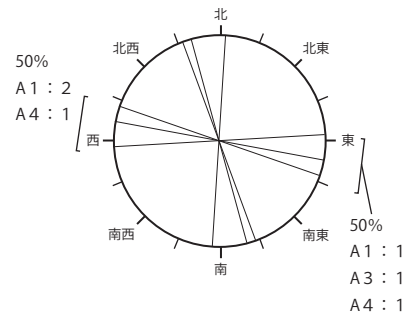
堀合 I (II期、n=10)



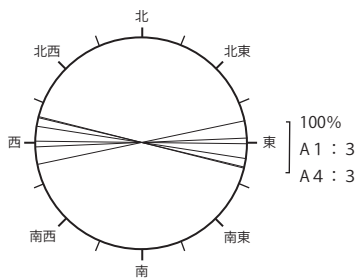
堀合 III (II期、n=4)



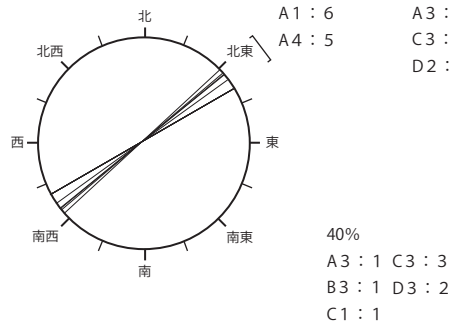
太師森 (II期、n=6)



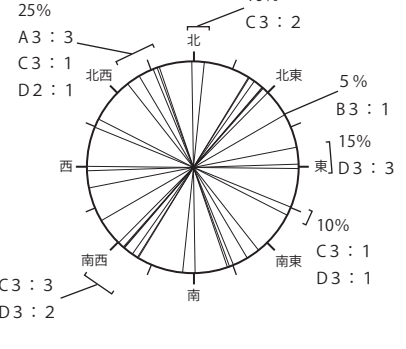
花巻 (II期、n=6)



山野峠 (II期、n=11)

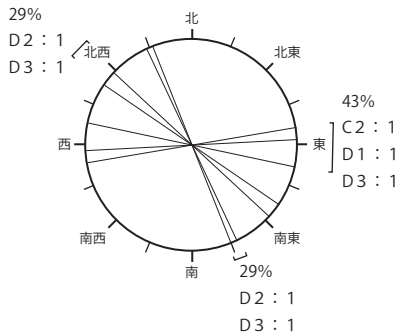


一ノ渡 (III期、n=20)

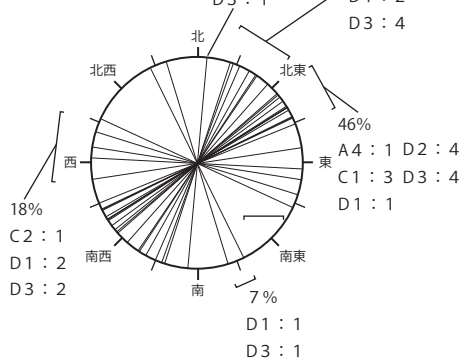


米代川流域

天戸森 (I期、n=7)



大湯 (III期、n=28)



漆下 (IV期、n=6)

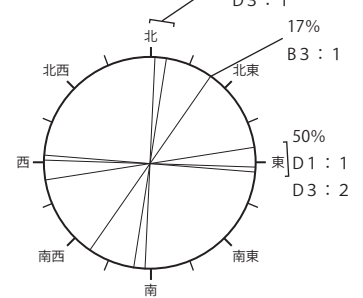
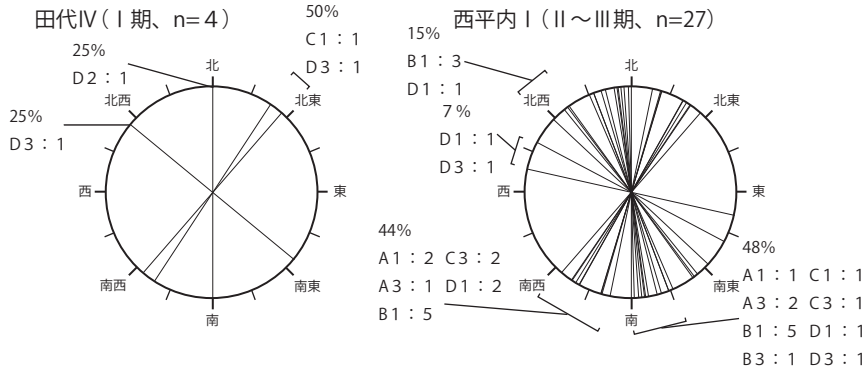
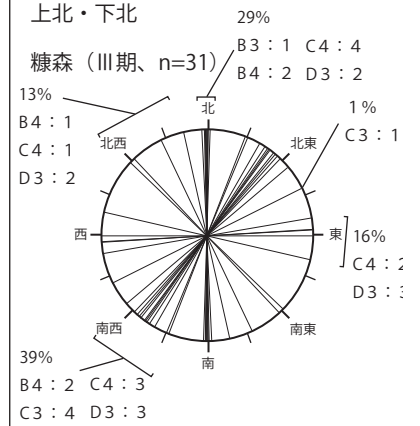


図 14 配石墓の長軸方向 1

馬淵川流域

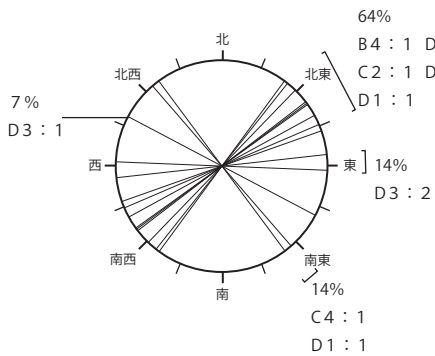


上北・下北

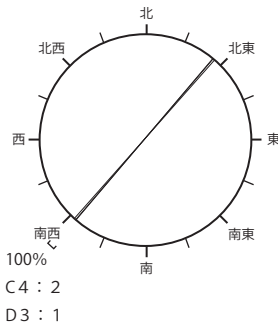


渡島半島南部

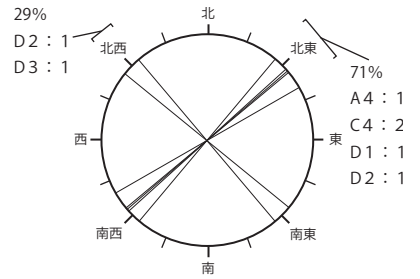
栄浜1 (Ⅰ・中~後期, n=14)



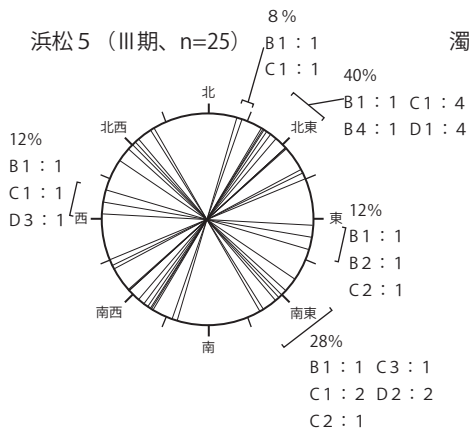
安浦B (Ⅰ期, n=3)



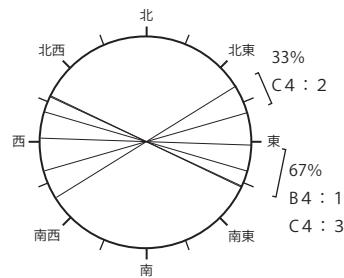
湯の里1 (Ⅲ期, n=7)



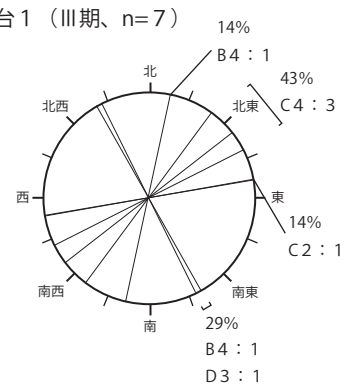
浜松5 (Ⅲ期, n=25)



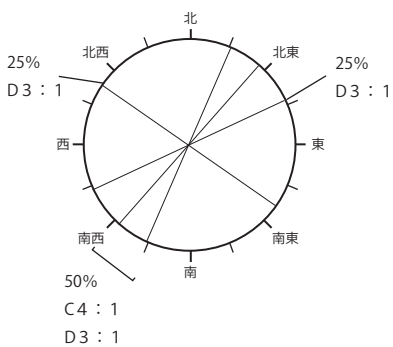
濁川左岸 (Ⅲ期, n=6)



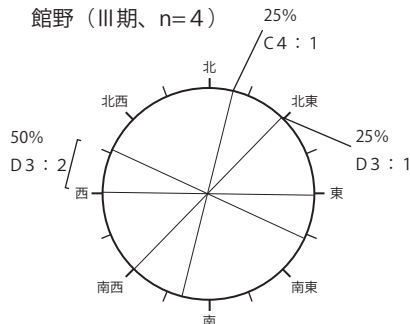
上台1 (Ⅲ期, n=7)



倉知川右岸 (Ⅲ期・後期, n=4)



館野 (Ⅲ期, n=4)



鷺ノ木 (Ⅲ~Ⅳ期, n=5)

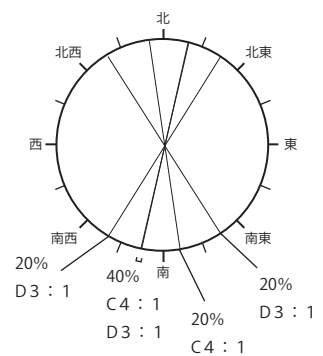
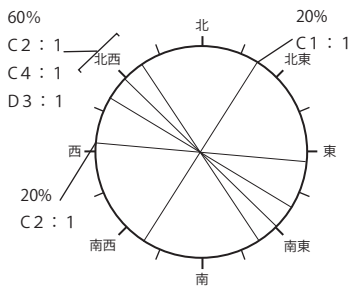


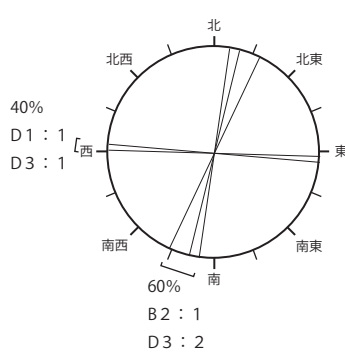
図15 配石墓の長軸方向2

渡島半島南部

鷲ノ木Ⅳ(Ⅲ～Ⅳ期、n=5)



浜松2 (Ⅳ期、n=5)



野田生1 (中～後期、n=4)

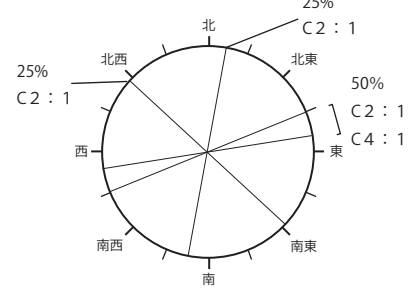


図16 配石墓の長軸方向3

約55°にまとまる。内訳はB4類1基・C4類5基である。上台1遺跡(Ⅲ期)では、7基の長軸が判別できる。北北西-南南東方向の5°以内にB4類1基・D3類1基が集中する。残りの5基の長軸は北北東-南南西~東北東-西南西の約70°にまとまる。内訳はB4・C2類各1基・C4類3基である。倉知川右岸遺跡(Ⅲ期・後期)では、4基の長軸が判別できる。C4類1基・D3類2基は北北東-南南西~東北東-西南西の約40°に長軸がある。館野遺跡(Ⅲ期)では、4基の長軸が判別できる。C4・D3類各1基は北北東-南南西~北東-南西の約30°に長軸がある。D3類2基は西-東~西北西-東南東の約25°に長軸がある。鷲ノ木遺跡(Ⅲ～Ⅳ期)では5基の長軸が判別できる。長軸のまとまりは顕著ではないが、4基すべてが北北東-南南西~北北西-南南東の約60°に長軸がある。鷲ノ木Ⅳ遺跡(Ⅲ～Ⅳ期)では、5基の長軸が判別できる。C2・C4・D3類各1基が北北西-南南東~西北西-東南東の約25°に長軸がまとまる。浜松2遺跡では、5基の長軸が判別でき、2つのまとまりがある。北北東-南南西~北-南方向の約25°にB2類1基・D3類1基がまとまる。西-東方向の約5°にD1・D3類各1基が集中する。野田生1遺跡(中～後期)では、4基の長軸が判別できる。C2・C4類各1基は東-西~東北東-西南西方向の約10°にまとまる。渡島半島南部では、Ⅰ期には長軸が30°以内にまとまる傾向がある。Ⅲ期には、長軸が30°以内の2方向にまとまる遺跡がある一方、まとまりが顕著ではない遺跡もある。

3-3. 分析③：出土遺物

3-3-1. 出土遺物の概観

完形土器は、正立、倒立、横倒しの出土例がある。土器片は、埋土から出土する事例が多数ある。しかし、

意図的に投棄されたものか、埋め戻しの際に偶然混入したものか判断できない。したがって、具体的な分析には踏み込まない。

石器類は、石鏃、石槍、扁平打製石器、石鋸、石錐、ナイフ、筒状石器、スクレイパー類(削器・搔器など)、楔形石器、磨製石斧、たたき石、擦石、北海道式石冠、砥石、台石、石皿、凹石、磨石などが出土している。

非日常的な遺物は、土製耳飾り、管玉、穿孔のある玉類、有孔石製品、垂飾り、勾玉といった装身具類や、異形石器、土偶、土器片加工土製品、鐸形土製品、キノコ形土製品、「刀剣形石製品」、各種石製品(板状・三角形・環状・石冠など)、コハク、漆塗木製品、動物骨、赤色顔料、ベンガラなどが出土している。

その他、フレイク、チップ、石核、不明石器、加工痕のある礫、原石、粘土塊、焼成粘土塊・炭化物などが出土している。

出土遺物の検出割合は、Ⅰ期には特に津軽で高い(表2)。Ⅱ期には、津軽における出土割合がほぼ横ばいであり、米代川流域では高くなる。馬淵川流域では出土例がない。配石墓が集中する御所野遺跡において、下部土坑が未調査されていないことの影響を受けている可能性が高い。Ⅲ期の津軽では、Ⅰ～Ⅱ期に引き続き出土割合がほぼ横ばいである。それ以外の地域では出土割合が高くなる。Ⅳ期には、米代川流域・渡島半島南部で出土割合がさらに高くなる。

非日常的な遺物の出土割合は、Ⅰ期には特に津軽・馬淵川流域で高い。Ⅱ期には津軽のみで出土例がある。Ⅲ期にはすべての地域で出土割合が高くなる。Ⅳ期には渡島半島南部で出土割合がさらに高くなり、それ以外の地域では低くなる。次項以降において、出土遺物の詳細を分析する。



図17 三内丸山遺跡の墓配置

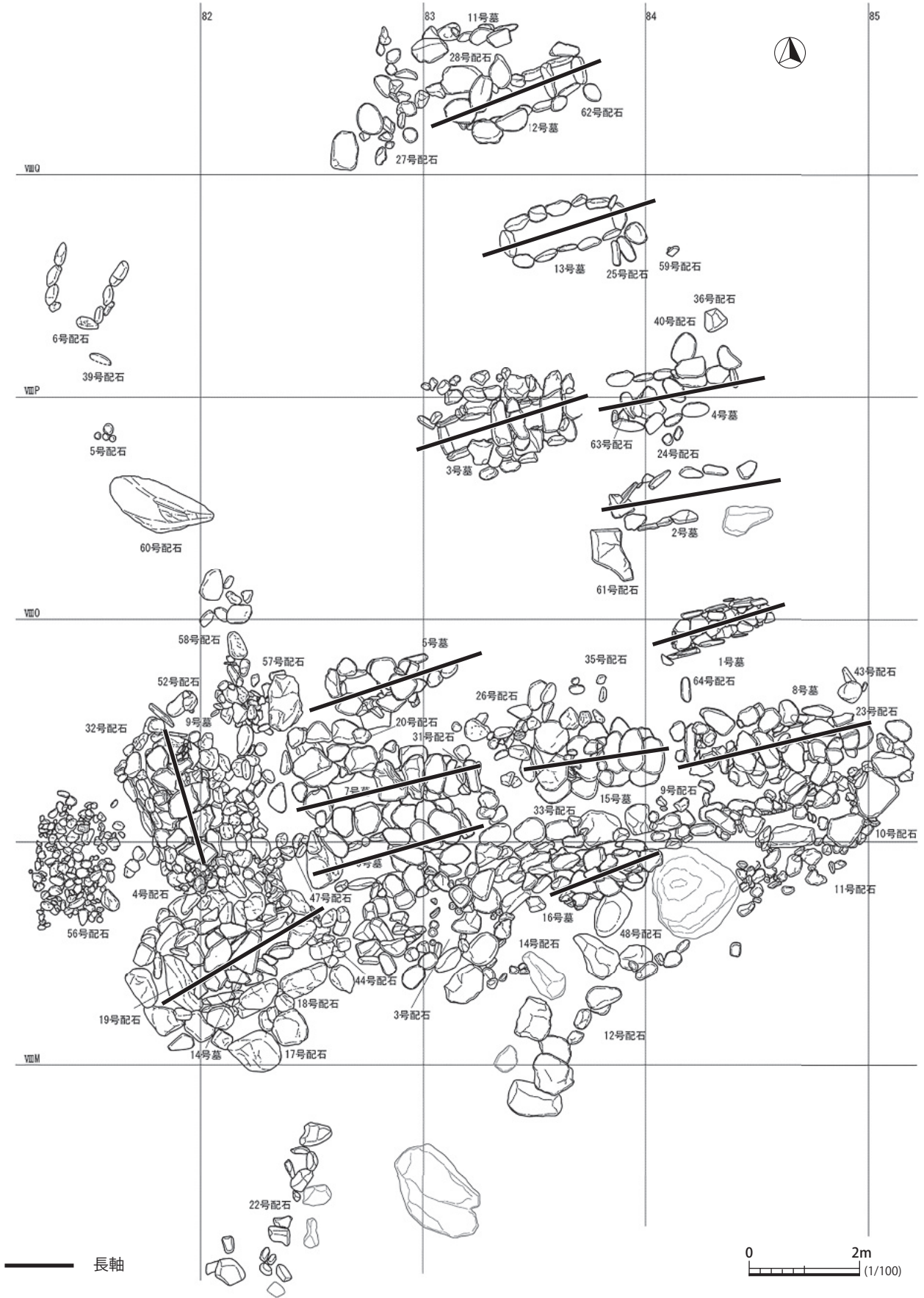


図18 水上(2)遺跡石棺墓A群

餅ノ沢遺跡
第11号配石
(第1~3号石棺墓)

堀合I遺跡
石棺墓群



図19 餅ノ沢遺跡・堀合I遺跡の配石墓配置



図21 浜松5遺跡の配石墓配置

3-3-2. 完形土器

出土状況がわかる完形土器は合計約20基である⁸⁾。I期には、西張平遺跡・館野2遺跡の2例が確認できた。西張平遺跡第55号土坑(C2類)では、深鉢形土器が、長方形土坑底部の北西端に正立で埋設されている(図22-1)。土坑内には、土器付近の坑底に礫が配置されている。館野2遺跡CP-31(C4類)では、深鉢形土器が、円形土坑の上部に倒立で埋設していた(図22-2)。坑底付近に大型の礫が配されており、その上には1層が堆積する。土器はその横に堆積する2層から出土しており、配石と土器の埋設は一体の行為でない可能性がある。土坑の検出面において、土器の底部は露出しているが、底部が当時露出していたかどうかは不明である。CF-27と切り合っており土坑の上場が判断できないためである。

II期には、堀合I遺跡・山野峠遺跡で確認されている。堀合I遺跡第2号配石遺構(D3類)では、配石の下部に壺形土器が正立で埋設されている(図22-3)。山野峠遺跡では、1933年の調査でA類6基から、各1~3個体ずつ、完形の壺形土器棺や浅鉢形土器が検出されたと報告されている(喜田1934)。出土状況を示す写真からは、土坑内に壺形土器が正立で置かれた状態であったと考えられる(図22-4;鹿又ほか2024)。ただ、現状報告されている資料では詳細を確認することは難しく、断定はできない(葛西2002;葛西編1983;鹿又ほか2024)。いずれも土器棺として用いられた可能性がある。

III期には、渡島半島南部を中心に7例が確認できた。一ノ渡遺跡では、C3類2基から完形土器が出土した。L11立石遺構では、深鉢形土器が、円形土坑

表2 遺物検出率

土器片・フレイク・チップ以外の遺物の検出率

	津軽 海峡域	津軽	米代川 流域	馬淵川 流域	上北・ 下北	渡島半島 南部
I期	35.5% (27/76)	37.5% (15/40)	16.7% (2/12)	33.3% (3/9)	75.0% (3/4)	36.4% (4/11)
II期	30.6% (34/111)	41.7% (30/72)	36.4% (4/11)	0% (0/25)	0% (0/1)	0% (0/2)
III期	50.6% (201/397)	41.4% (24/58)	52.0% (39/75)	46.8% (22/47)	72.9% (43/59)	46.2% (73/158)
IV期	53.8% (50/93)	0% (0/1)	46.3% (31/67)	100% (1/1)	- (0/0)	75.0% (18/24)

*下段：(土器片・フレイク・チップ以外の遺物が出土した遺構数) / (遺構数)

非日常的な遺物の検出率

	津軽 海峡域	津軽	米代川 流域	馬淵川 流域	上北・ 下北	渡島半島 南部
I期	17.1% (13/76)	20.0% (8/40)	0% (0/12)	22.2% (2/9)	50% (2/4)	9.1% (1/11)
II期	7.2% (8/111)	11.1% (8/72)	0% (0/11)	0% (0/25)	- (0/1)	0% (0/2)
III期	18.9% (75/397)	29.3% (17/58)	38.7% (29/75)	27.7% (13/47)	10.2% (6/59)	6.3% (10/158)
IV期	8.6% (8/93)	0% (0/1)	4.5% (3/67)	100% (1/1)	- (0/0)	16.7% (4/24)

*下段：(非日常的な遺物が出土した遺構数) / (遺構数)

の埋土上部から横倒しで出土した。立石に隣接した位置であることが特徴的である(図23-1)。S・T15土坑では、深鉢形土器が、長方形に近い不整形土坑の底部付近から倒立で出土した(図23-2)。大湯環状列石A2SX(S)12(C1類)では、壺形土器が、円形土坑上部に同心円状に配された礫の下部から正立で出土した(図23-3)。肩部より上は欠損しているが、直上に礫がある状況から、埋められた当時から同じ状態であり、土器棺として用いられた可能性がある。土器の横からは赤色顔料が検出されている。馬淵川流域の館町II遺跡土器棺墓(D1類)では、円形土坑底部から、壺形土器が正立で出土している。礫は土器棺とその横の長方形土坑の周囲に配されている(図24-1)。館町II遺跡土器棺墓からは、深鉢形土器も出土している(図24-2)。渡島半島南部では、豊浜遺跡・浜松5遺跡・濁川左岸遺跡で完形土器が出土している。豊浜遺跡2号土坑(B4類)では、深鉢形土器が円形土坑底部から倒立で出土している(図25-1)。浜松5遺跡29号配石遺構(D3類)では、配石下部に深鉢形土器が正立で埋設されている(図25-2)。礫の一部は、土器内に入り込んだ状態である。濁川

左岸遺跡P-10(C4類)では、円形土坑の底部に、深鉢形土器が埋設されている。礫は土器とは離れた位置の坑底に置かれている(図25-3)。

IV期には、渡島半島南部の東風泊遺跡・浜松2遺跡で完形土器が出土している。東風泊遺跡2号土坑(D3類)では、小ぶりの深鉢形土器1個体が坑底に埋設され、深鉢形土器・壺形土器が横倒しで出土している(図25-4)。出土土器の詳細は未報告だが、土器棺の可能性はある。浜松2遺跡4号配石遺構(D1類)では、浅鉢形土器が、長方形土坑底部の南西隅から横倒しで出土しており、土器副葬の可能性はある(図25-5)。小礫が坑底に敷きつめられており、その端に土器が置かれている。7号配石遺構(D3類)では、浅鉢形土器が不整形土坑の底部から横倒しで出土している。

詳細な時期が不明である事例は、小金森遺跡・天狗岱遺跡・元和3遺跡に1例ずつある。小金森遺跡Pit No.7(後期;C4類)では、深鉢形土器が横位の状態でつぶれて出土している(図26-2)。また、配石下部から浅鉢土器が出土している(図26-1)。それ以外にも、複数個体が集中して出土している(図26-3~5)。天狗岱遺跡第1号墳墓(後期;D1類)では、深鉢形と思われる土器が、配石下部に正立で埋設されており、土器棺の可能性はある。配石は、土器の直上に蓋と考えられる板状の礫を配し、その上に礫を積み上げている(図26-6)。元和3遺跡A地区墓壙(後期;D3類)では、深鉢形土器が楕円形土坑の底部から正立で出土している。配石は土坑直上にあるが、土器に被らない位置に配されている(図26-7)。

総じて、器形に拘わらず、正立で検出される事例が多いといえる。また、配石の種類と完形土器の出土状況には特に相関性はない。時期・地域ごとに分析すると、II期に津軽で、III・IV期に渡島半島南部で検出例が多いといえる。

3-3-3. 石器類

石器類の出土状況を、種類毎にまとめる。石鏃は、I・II期においては津軽で検出例が多い。I期には、水上(2)遺跡の22号墓・25号墓(A4類)のほか、三内丸山遺跡のD2・3類からの出土例がある(図27-6・7・15~18)。II期には、A類からの出土が多く、岩木山麓では有茎、南黒地域(津軽平野東南部)では無茎が多い。南黒地域ではIII期でも無茎石鏃が出土している。南黒地域の堀合I遺跡では、3基から出土している(図27-8~10)。第3・6号石棺墓(A1類)の坑底より石鏃が出土しており、副葬品の可能性がある。津軽以外では、天戸森遺跡で1例出土して

西張平遺跡第55号土坑

堀合I遺跡第2号配石遺構

館野2遺跡CP-31

山野峠遺跡

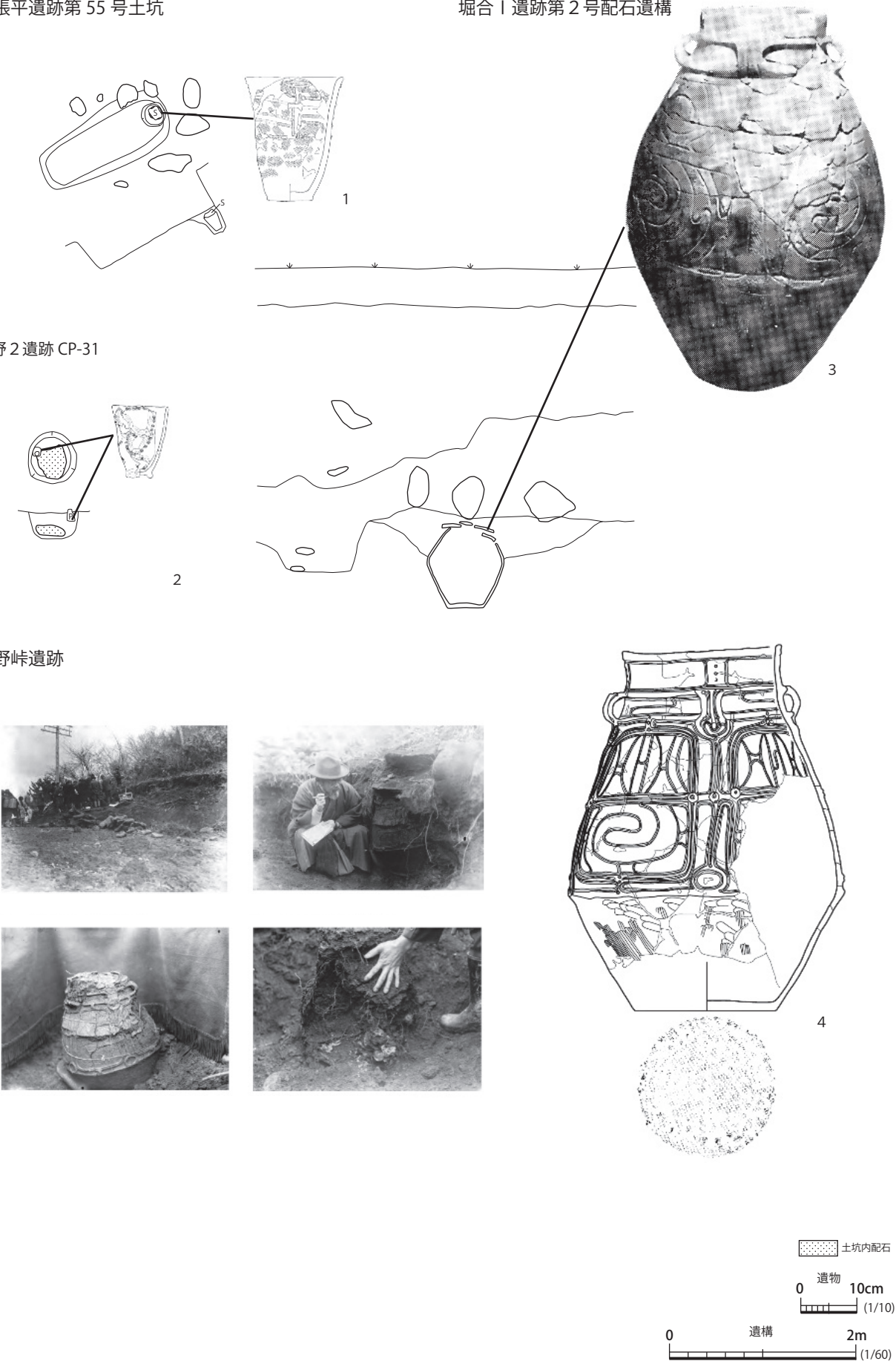


図22 完形土器出土状況1

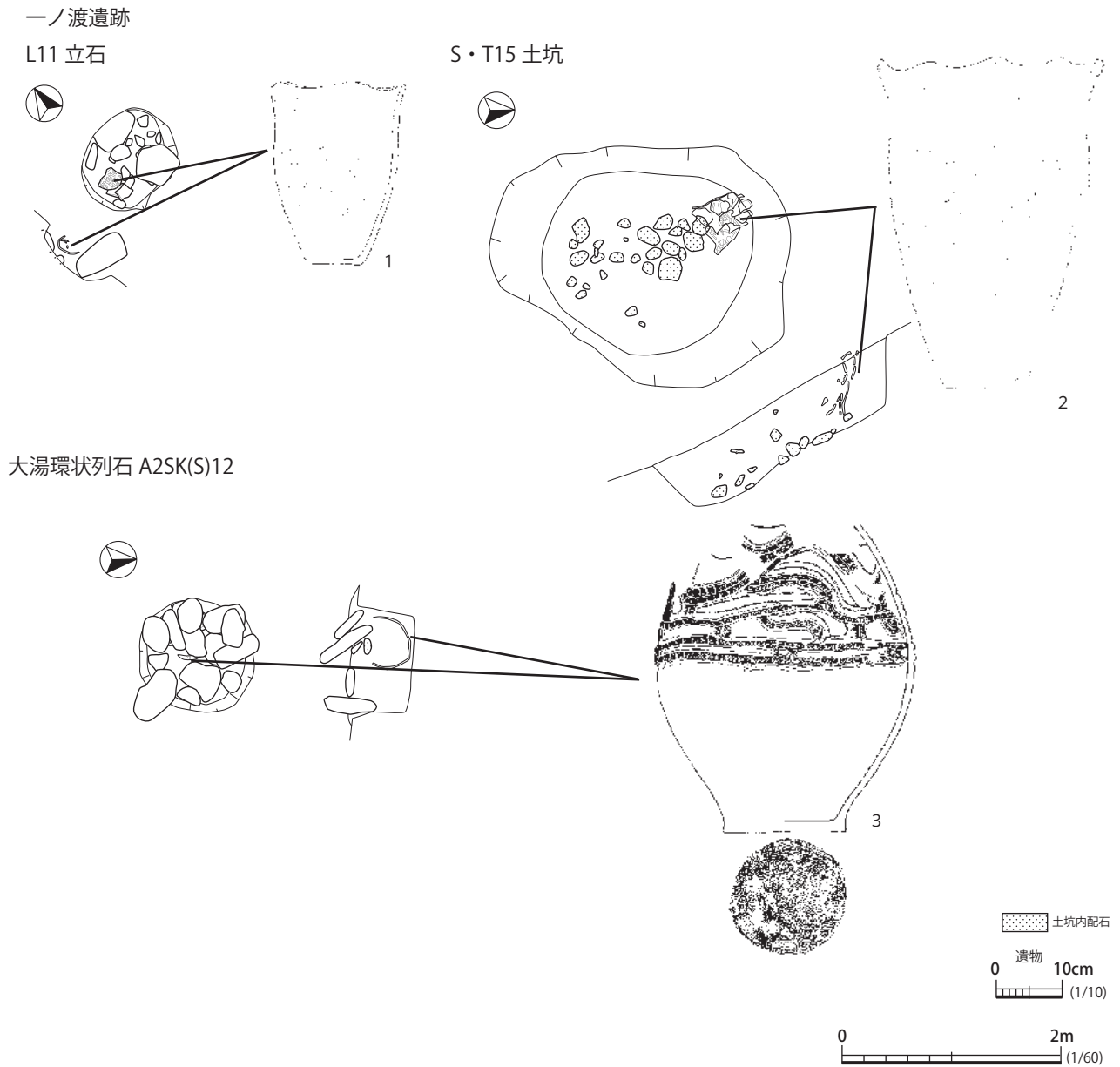


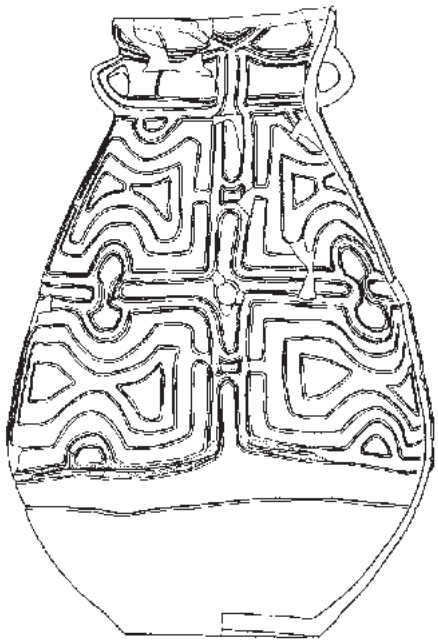
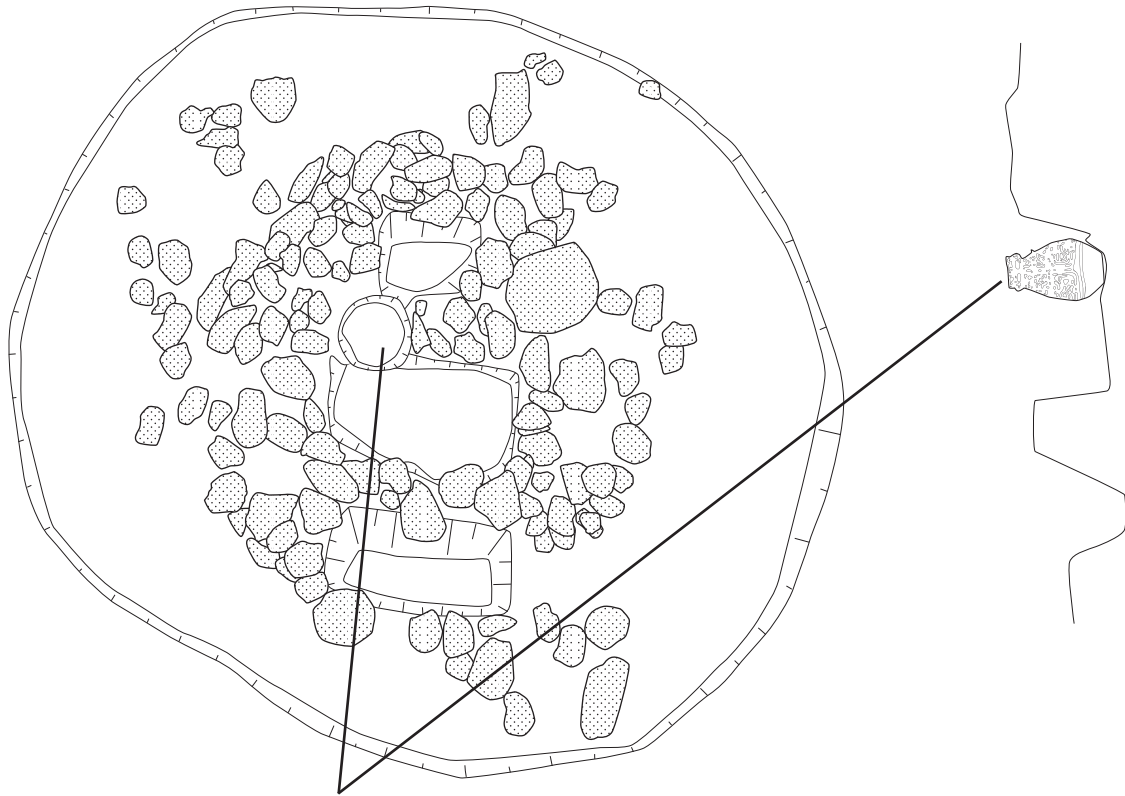
図23 完形土器出土状況2

いる（図27-35）。Ⅲ・Ⅳ期には、津軽では一ノ渡遺跡の1例のみである（図27-14）。一方で、渡島半島南部・米代川流域での検出例が多い（図27-19～34、図28-1～11・15～27、図32-1～25）。Ⅲ期は渡島半島南部で無茎石鏃、Ⅳ期は米代川流域（漆下遺跡）で有茎石鏃が多い。多くの場合、ひとつの配石墓からは有茎・無茎のいずれかしか出土しない。有茎・無茎が同時に検出されたのは漆下遺跡SKQ215と白尻小学校遺跡GP-13・14の2例である（図28-1～3、図29-10～25）。また、糠森遺跡（Ⅲ期；上北・下北）においては、3基の配石墓から1点ずつ石鏃が出土しており、有茎石鏃2点、無茎石鏃1点である。

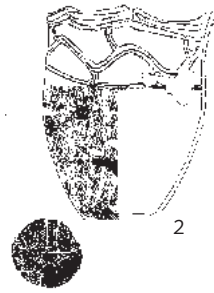
石槍は、上台1遺跡（Ⅲ期）で1例のみ出土してい

る。扁平打製石器は、漆下遺跡（米代川流域）以外は渡島半島南部で出土している。石鋸は浜松5遺跡（Ⅲ期）の1例のみである。石錘は、水上（2）遺跡・山野峠遺跡（いずれもⅡ期）で1例ずつ検出されている。伊勢堂岱遺跡（Ⅱ～Ⅲ期）では3例、糠森遺跡では5例検出されている。湯の里遺跡（Ⅲ期）では1例、鷲の木4遺跡（Ⅲ期）では5例である。時期ごとにみるとⅢ期、地域ごとにみると渡島半島南部の検出例が多い。ナイフ形石器・石匙（つまみ付きナイフ）は、漆下遺跡（Ⅲ～Ⅳ期）で6例、糠森遺跡（Ⅲ期）で7例検出されているほか、Ⅲ期以降の渡島半島南部で検出例が多い。西平内I遺跡（Ⅲ期）の1例以外に単体での出土がなく、他の石器と同時に出土する場合が多

館町II遺跡
土器棺墓



1



2



土坑内配石

遺物 10cm

0 10cm (1/10)

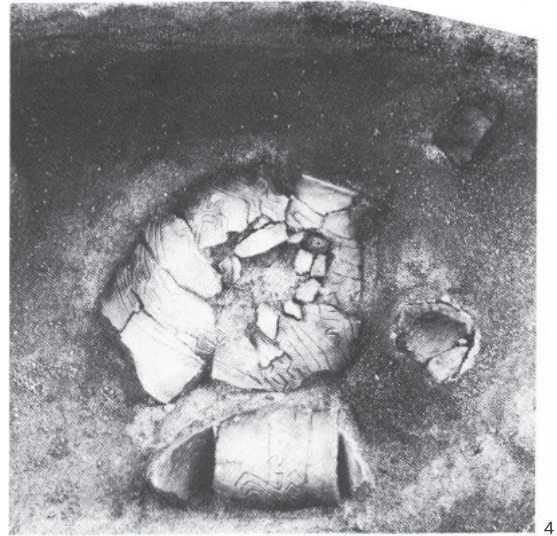
遺構 0 2m (1/60)

図24 完形土器出土状況3

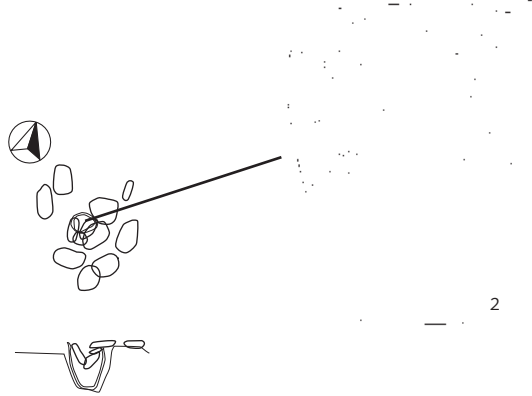
豊浜遺跡 2号土坑



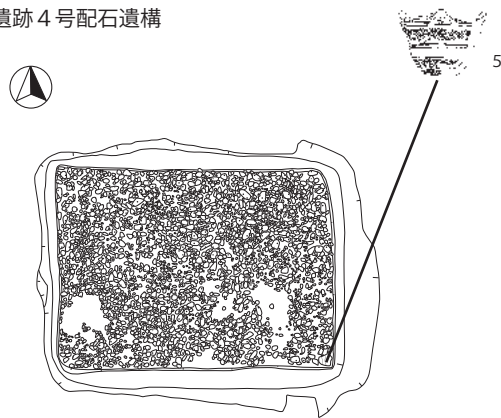
東風泊遺跡 2号土坑



浜松5遺跡 29号配石遺構



浜松5遺跡 4号配石遺構



濁川左岸遺跡 P-10

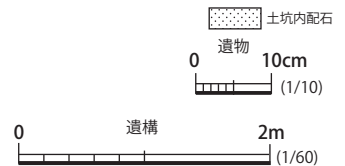
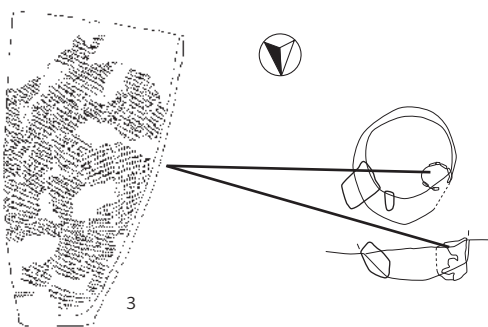


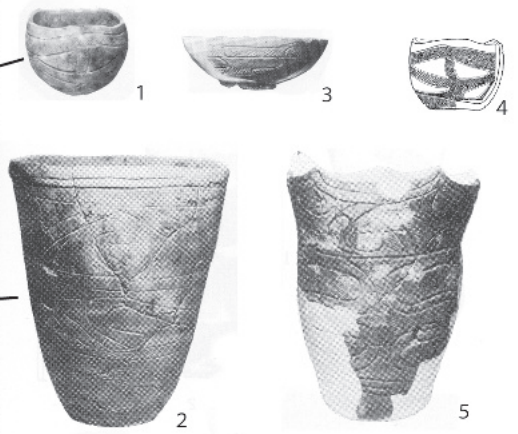
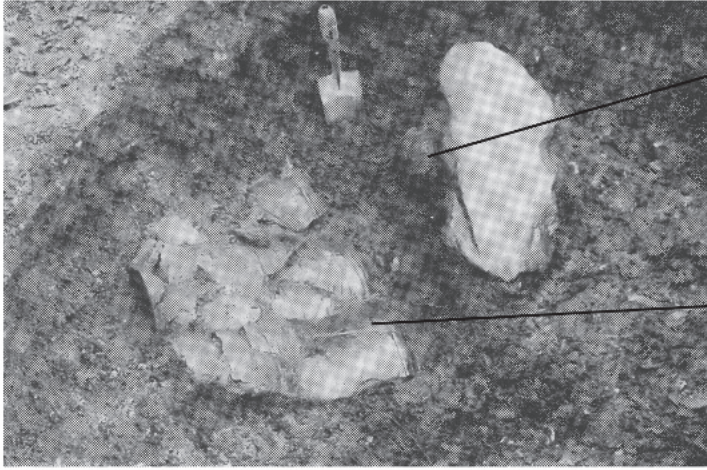
図25 完形土器出土状況 4

い。石錐はⅢ期以降の渡島半島南部での検出例が主体である。石錘同様、他の石器と同時出土している。篋状石器は、堀合Ⅰ遺跡で1例（Ⅱ期）、漆下遺跡で3例（Ⅳ期）出土している。両遺跡で1例ずつ、石鏃が出土した配石墓からの出土がある。スクレイパー類（削器・搔器など）は、Ⅲ期の米代川流域、上北・下北、渡島半島南部で出土例が多い。楔形石器は幸連3遺跡（Ⅳ期）の1例のみである。

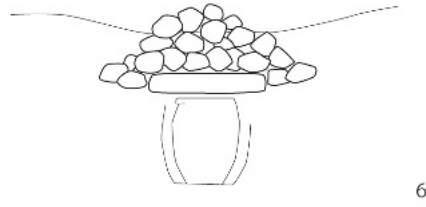
石斧は、Ⅲ期の検出例が多い。西平内Ⅰ遺跡の7例は打製の未製品が多く、副葬品の可能性がある（図31-1~5）。覆土や配石からの出土が多いが、検出

例が多いためである。一ノ渡遺跡・浜松5遺跡・糠森遺跡・鷺ノ木遺跡・鷺ノ木4遺跡・館野遺跡では、磨製石斧が出土している（図30-2・3・5・6，図32-1・3・4）。Ⅲ期以外は出土例が少ない。三内丸山遺跡1例・富ノ沢（2）遺跡1例（いずれもⅠ期）・堀合Ⅰ遺跡1例（Ⅱ期）・鷺ノ木遺跡1例（Ⅳ期）の出土例のみである（図30-1・4，図31-2）。たたき石は、Ⅲ期の渡島半島南部を中心に出土例が多い。擦石・北海道式石冠は、Ⅲ期の上北・下北と渡島半島南部で出土例が多い。Ⅰ・Ⅳ期にも少数出土例がある。砥石は、深渡遺跡（米代川流域；中期～後期）・

小金森遺跡 Pit No.7



天狗岱遺跡
第1号墳墓



元和3遺跡 A 地区墓塚

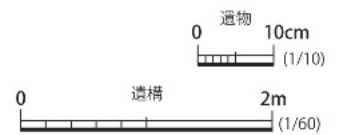
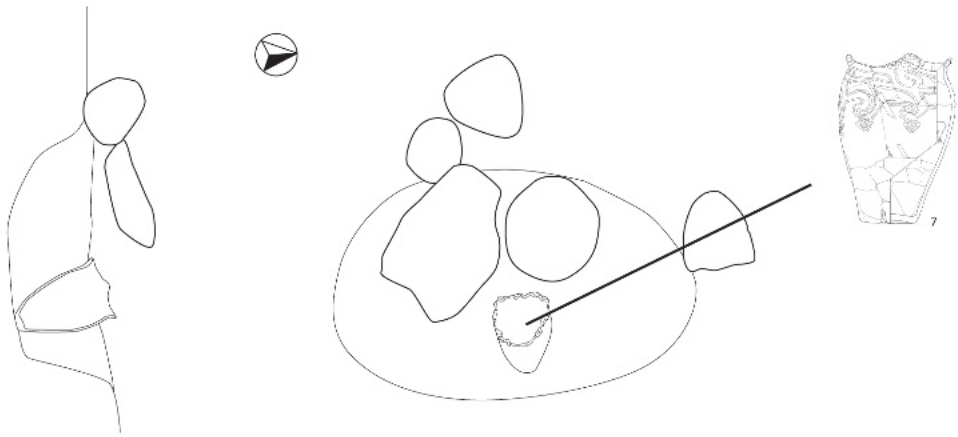


図26 完形土器出土状況5

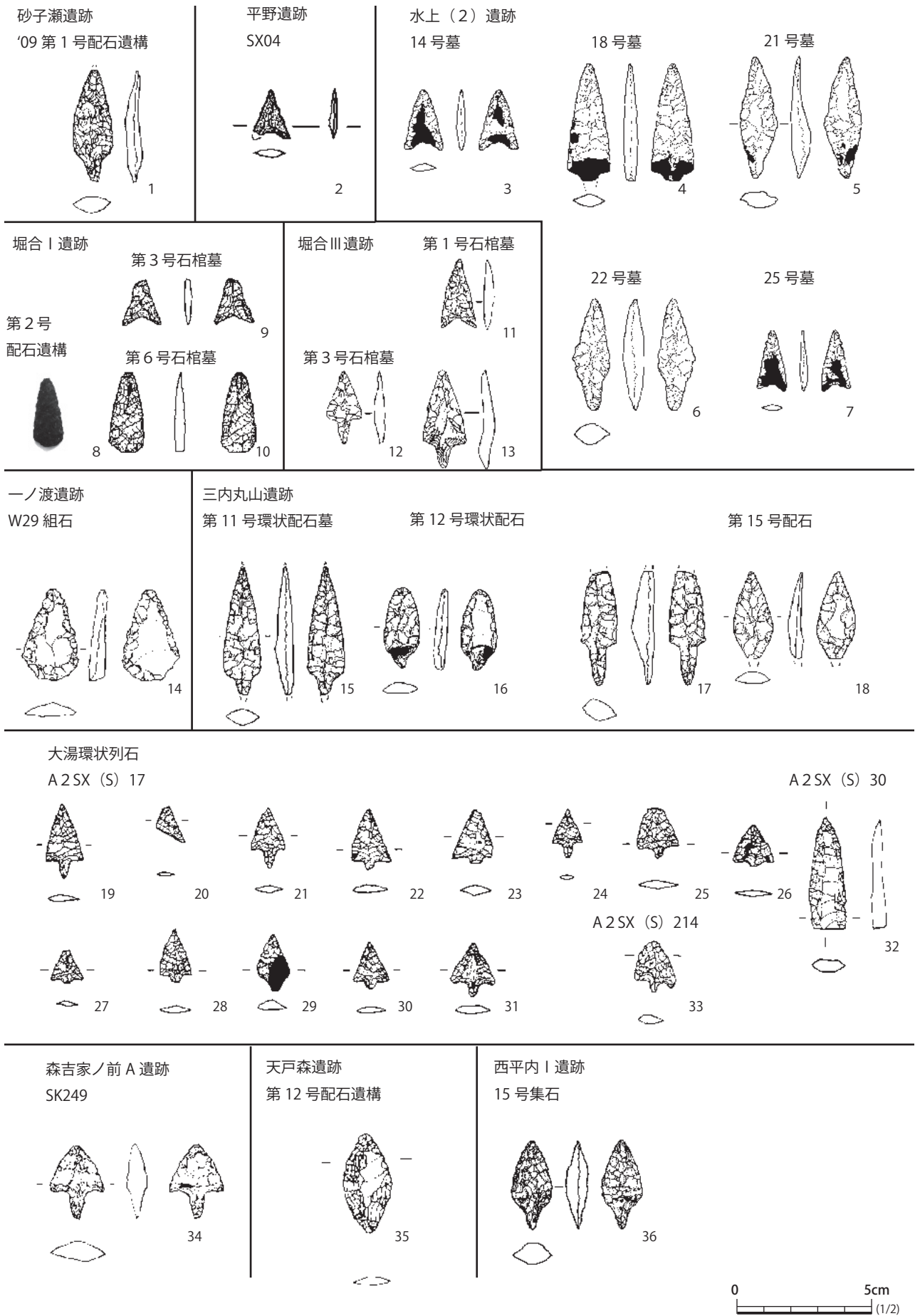
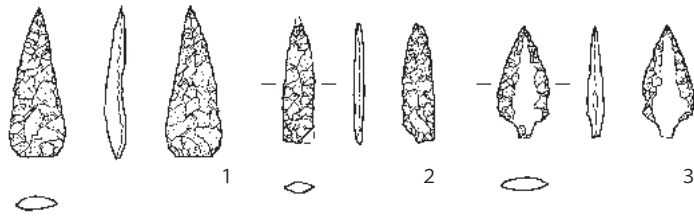


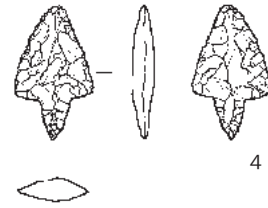
図27 配石墓出土の石鏃1

漆下遺跡

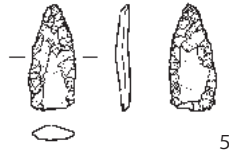
SKQ215



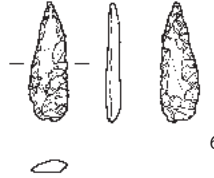
SKQ232



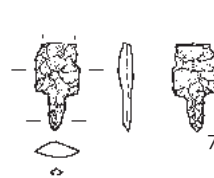
SKQ269



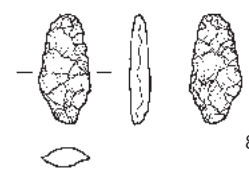
SKQ276



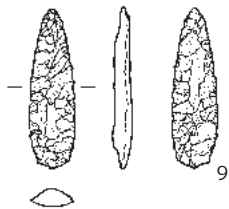
SKQ1076



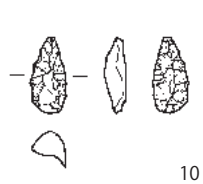
SKQ10031・10040



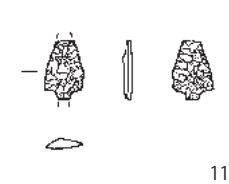
SKQ10089



SKQ10050



SQ225



糠森遺跡

3号土坑



10号土坑



69号土坑

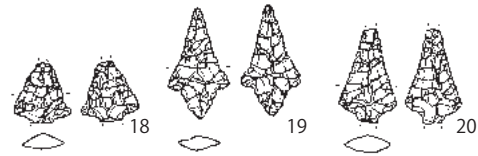


浜松2遺跡

3号配石遺構



6号配石遺構



7号配石遺構

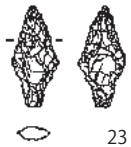


8号配石遺構



豊浜遺跡

2号土坑



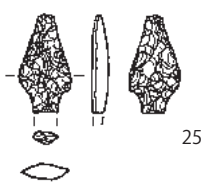
浜松5遺跡

22号配石遺構



野田生1遺跡

CP98



幸連3遺跡

P-1



鷺ノ木遺跡

33号土坑

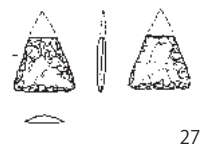


図28 配石墓出土の石鏃2

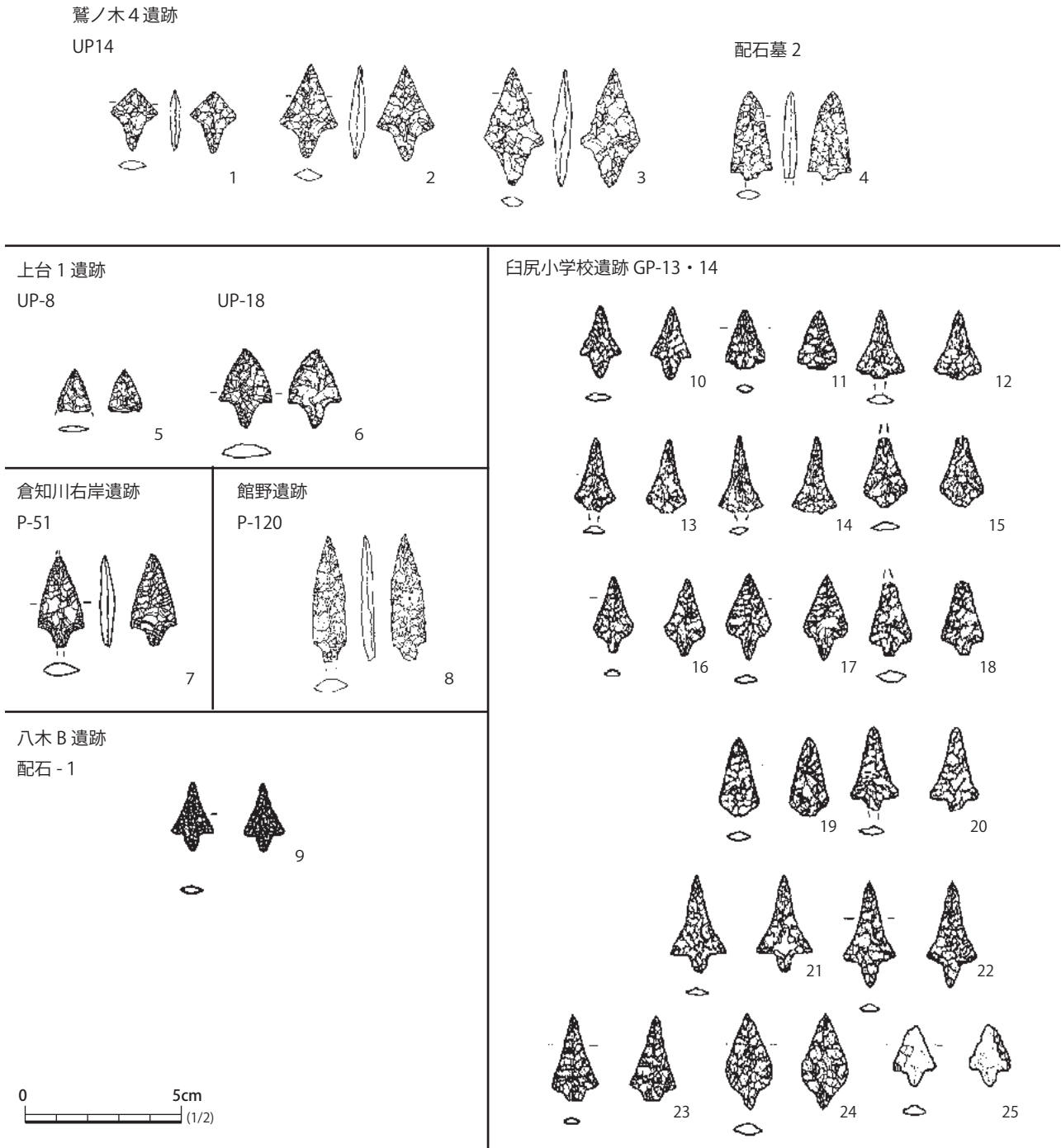


図29 陪石墓出土の石鏃3

西平内 I 遺跡（馬淵川流域；Ⅲ期）・糠森遺跡（Ⅲ期）以外は渡島半島南部で出土している。鷺ノ木遺跡の 1 例以外はⅢ・Ⅳ期である。石皿・台石はⅠ・Ⅱ期の津軽、Ⅲ期の渡島半島南部で多い。Ⅳ期は漆下遺跡 1 例・鷺ノ木遺跡 1 例のみである。凹み石はⅢ期の津軽、Ⅲ・Ⅳ期の米代川流域で検出例が多い。津軽ではⅠ・Ⅱ期にも検出例がある。渡島半島南部では、東山遺跡（Ⅲ期）の 1 例のみである。磨石はⅢ・Ⅳ期の米代川流域で出土例が多い。そのほとんどは漆下遺跡の

陪石墓で、特にⅣ期の出土例が多い。三内丸山遺跡（Ⅰ期）・一ノ渡遺跡（Ⅲ期）・西平内 I 遺跡（Ⅲ期）でも出土例がある。

石器類は、多くの種類でⅢ期の出土例が多い。ただ、埋土・陪石周辺からの出土も多く、明確に副葬品であると判断できる事例は少ない。

3-3-4. 非日常的な遺物⁹⁾

装身具類は、津軽では餅ノ沢遺跡・一ノ渡遺跡・三

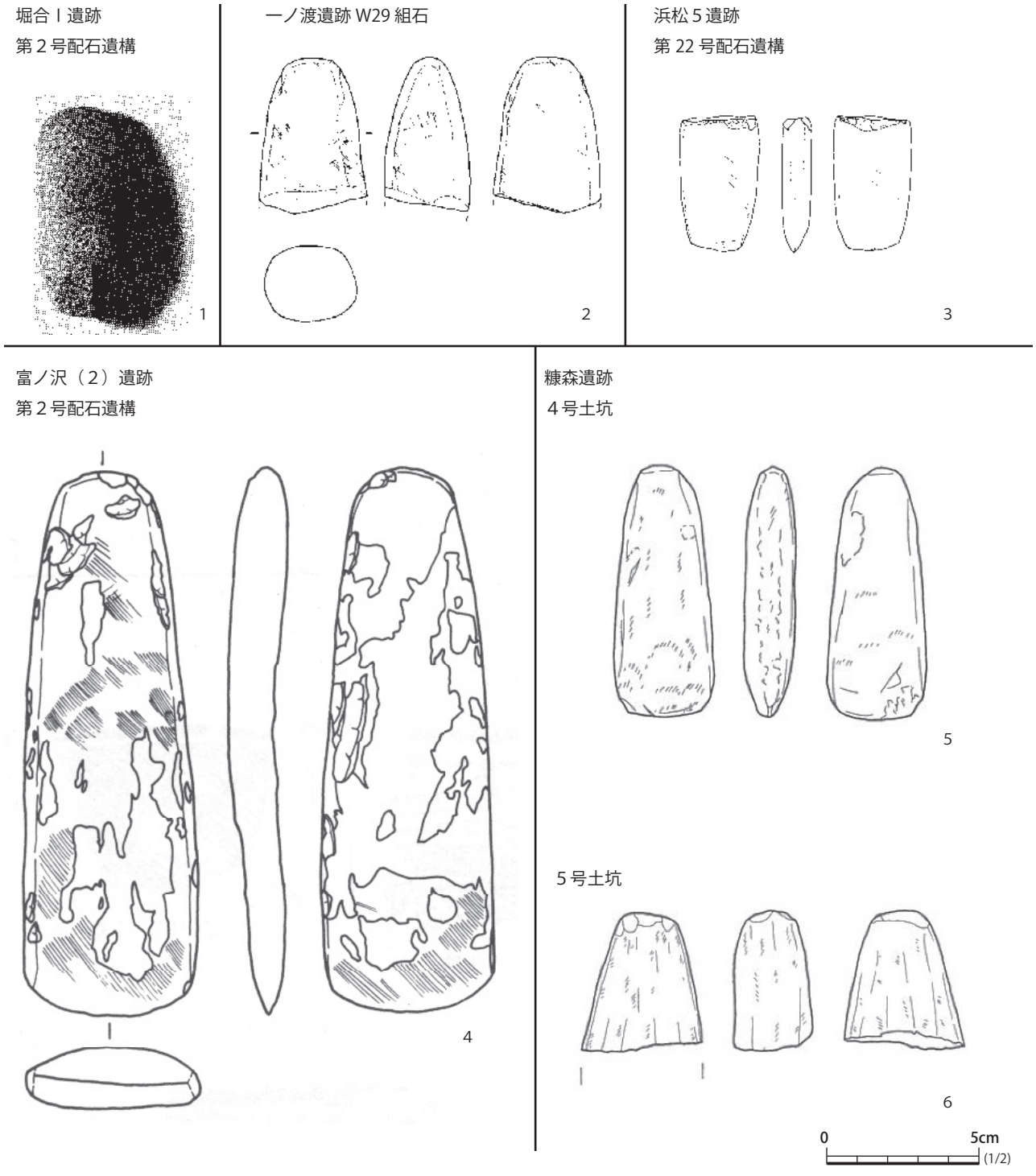
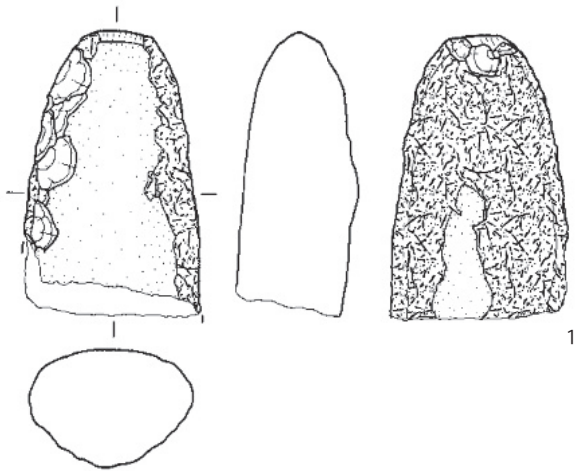


図30 配石墓出土の石斧 1

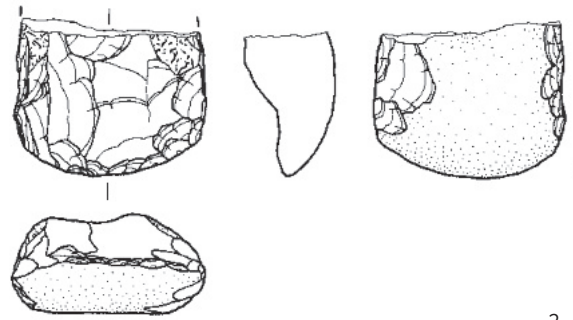
内丸山遺跡で出土例がある (図33, 図34)。餅ノ沢遺跡'00第1号石棺墓 (A1類; II期) では管玉状石製品が出土している (図33-1)。一ノ渡遺跡 (III期) では、J・K13・14組石 (C3類)・V・W27土拵 (D3類) から土製耳飾りが出土している (図33-2・3)。三内丸山遺跡 (I期) では環状石製品が1点出土している (図33-4)。米代川流域では、漆下遺跡 SKQ269 (C2類)・SKQ305 (D3類; いずれもIV

期) から垂飾りが出土している (図33-5~7・9)。SKQ269からは有孔石製品が出土している (図33-8)。馬淵川流域では4例出土例がある。田代IV遺跡配石7号 (D1類, I期) では、土製耳飾りが出土している (図33-10)。風張 (1) 遺跡第122号土坑墓 (B4類, IV期) では、石製の穿孔のある玉が出土している (図33-12・13)。西平内I遺跡13号集石 (C1類)・59号集石 (B1類; いずれもIII期) では、有

西平内I遺跡
11号集石

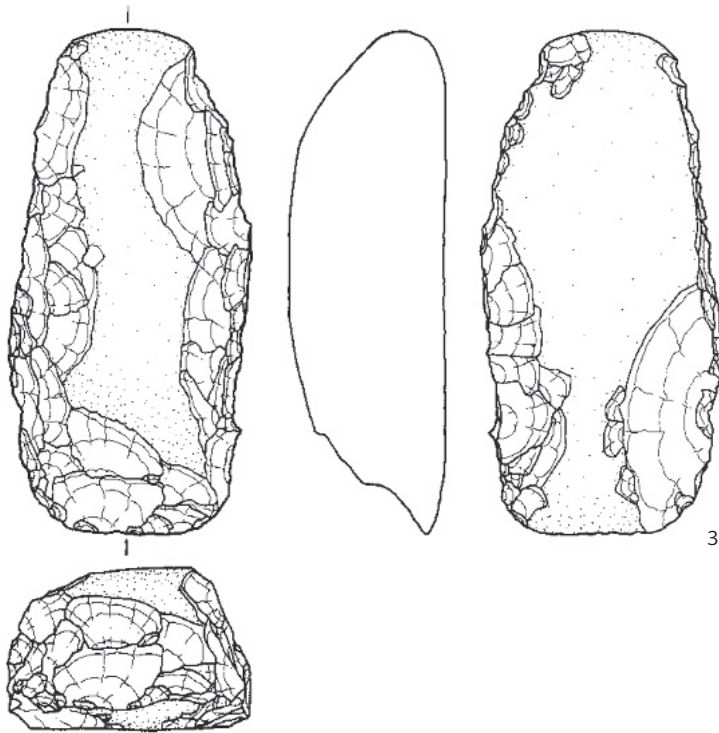


20号集石



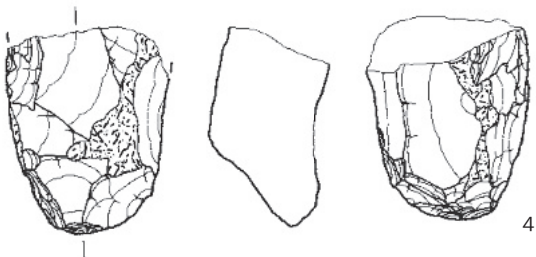
2

39号集石



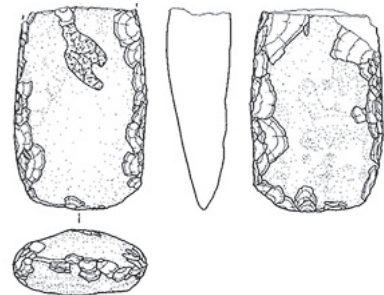
3

45号集石



4

54号集石



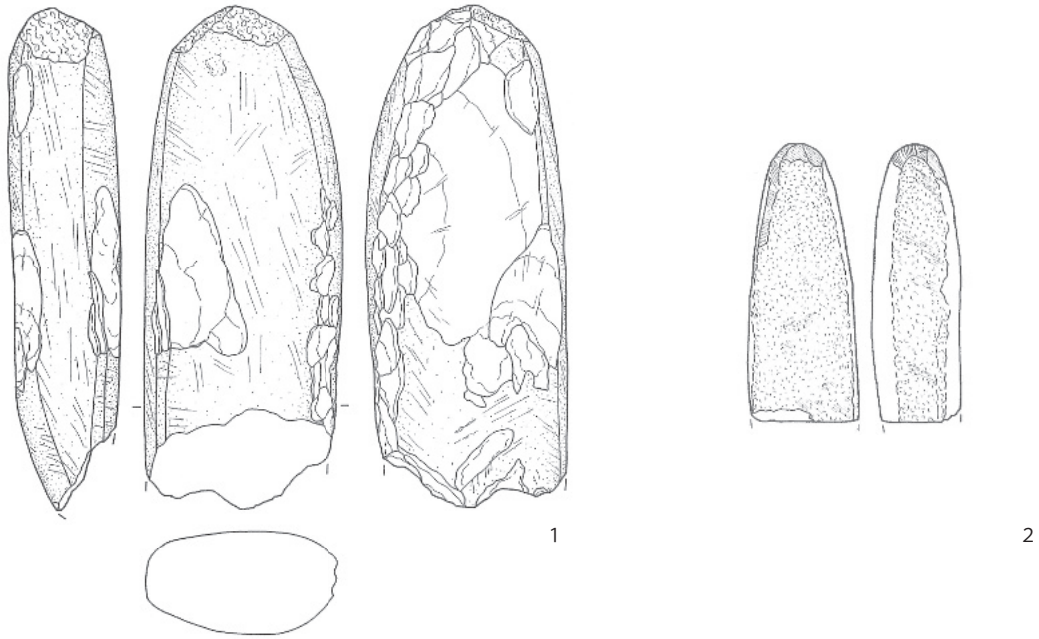
5



図31 配石墓出土の石斧2

鷲ノ木遺跡
12号土坑

UP-68



鷲ノ木4遺跡
UP-48

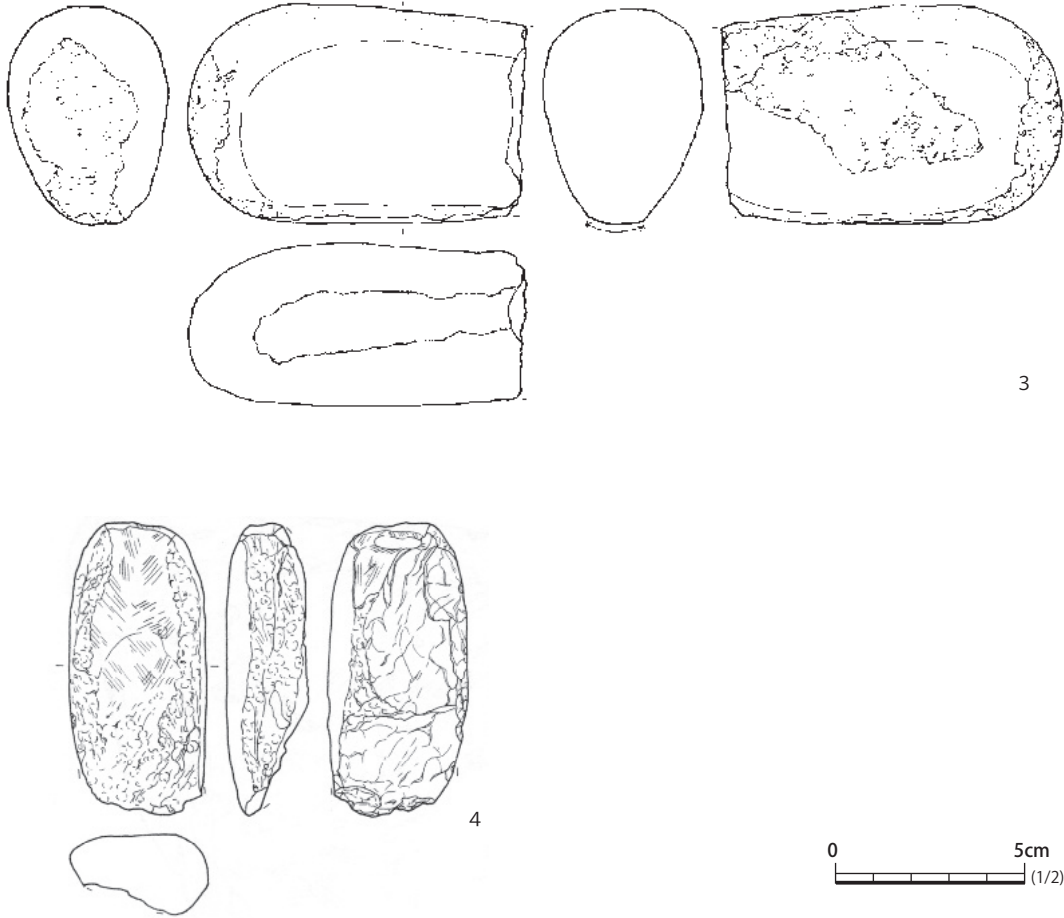
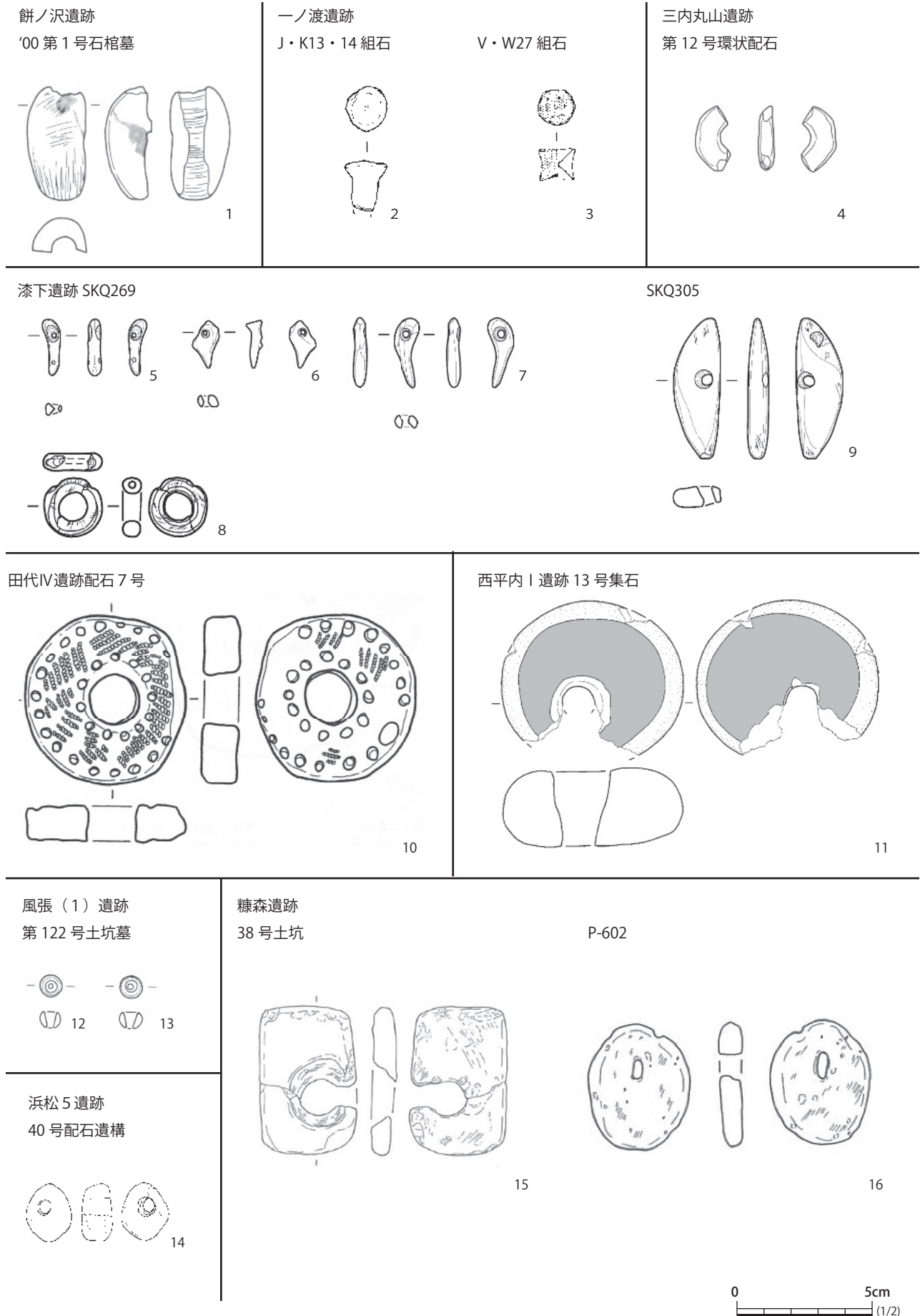


図32 配石墓出土の石斧3

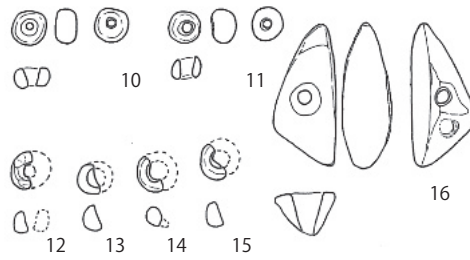
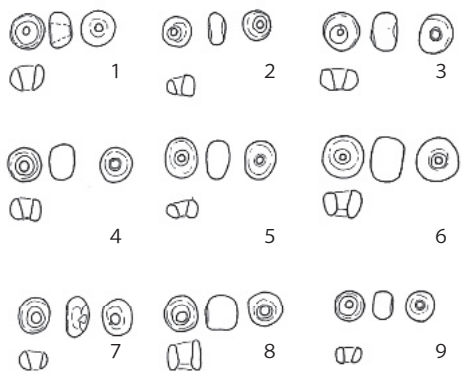


0 5cm (1/2)

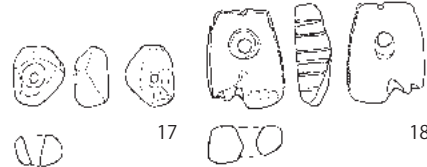
図33 配石墓出土の装身具類 1

浜松2遺跡

6号配石遺構

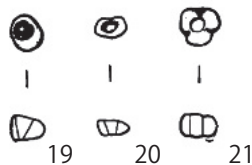


7号配石遺構



日吉遺跡

ストーン・サークル



八木B遺跡

配石-3

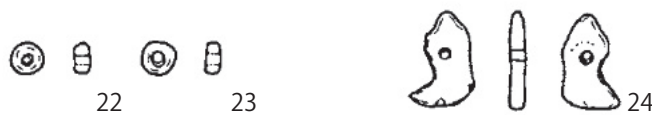


図34 配石墓出土の装身具類2

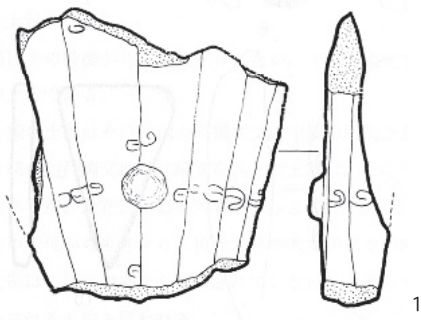
孔石製品が出土している（図33-11）。上北・下北では、糠森遺跡（Ⅲ期）で泥岩製垂飾り1点、安山岩製有孔石製品1点が出土している（図33-15・16）。渡島半島南部の浜松2遺跡6号配石遺構（B2類）では穿孔のある玉が、7号配石遺構（D3類）からは垂飾りが出土している（いずれもⅣ期；図34-1~18）。浜松5遺跡40号配石遺構（C2類；Ⅲ期）からはヒスイ製垂飾りが出土している（図33-14）。日吉遺跡ストーン・サークル（D2類、後期）からは飾玉（図34-19~21）、八木B遺跡配石-3（C4類；Ⅳ期）からはヒスイ製子持勾玉・蛇紋岩製の玉が出土している（図34-22~24）。装身具類はⅢ・Ⅳ期の出土例が多い。特に、Ⅳ期の渡島半島南部が目立つ。

土偶は、津軽を中心に5例検出されており、いずれも破片である。津軽では小金森遺跡 Pit No. 8（A4類；Ⅱ期）・三内丸山遺跡第39号環状配石墓（D2類；Ⅰ期）・一ノ渡遺跡H18・19組石・J・K13・14組石（Ⅲ期）で出土している（図35-1・3~6）。津軽以外では東山遺跡環状列石2（C2類；渡島半島南部；Ⅲ期）で出土している（図35-2）。ミニチュア土器は一ノ渡遺跡（1例；Ⅲ期）三内丸山遺跡（2

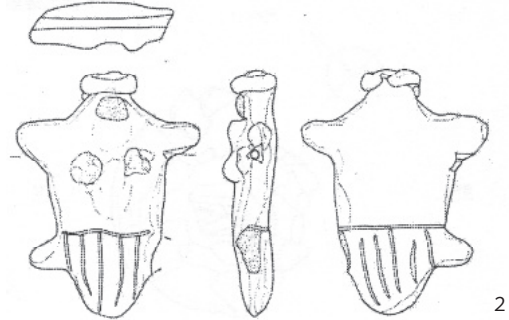
例；Ⅰ期）・西平内Ⅰ遺跡（4例；Ⅲ期）・栄浜1遺跡（1例；Ⅰ期）・鷲ノ木4遺跡（1例；Ⅲ期）で出土している（図36-1~8）。土製品は、円盤形・三角形・方形・鐸形・キノコ形が出土している。円盤状・三角形・方形土製品は、水上（2）遺跡（4例）・一ノ渡遺跡（15例）・三角形土製品は・三内丸山遺跡（1例）・伊勢堂岱遺跡（3例）・大湯環状列石（1例）・西平内Ⅰ遺跡（7例）・糠森遺跡（1例）館野遺跡（7例）で出土している（図37-1~13・15~21, 図38-1~13・15, 図39-1~6・8・9・11）。円盤状・三角形・方形土製品には土器片加工品を含む。鐸形土製品は一ノ渡遺跡・西平内Ⅰ遺跡・東山遺跡・倉知川右岸遺跡（いずれもⅢ期）で1例ずつ出土している（図37-14, 図40-7・10・11）。環状・キノコ形土製品¹⁰⁾は三内丸山遺跡（Ⅰ期）で1例出土している（図41-14・16）。土製品は、水上（2）遺跡（4例；Ⅱ期）・三内丸山遺跡（2例；Ⅰ期）を除くと、すべてⅢ期の配石墓から出土している。また、土製品はまとめて出土する機会が多い。

異形石器¹¹⁾は、漆下遺跡SKQ212（D1類；Ⅳ期）・西平内Ⅰ遺跡40号配石（B1類）・57号配石（D1

小金森遺跡
Pit No. 8

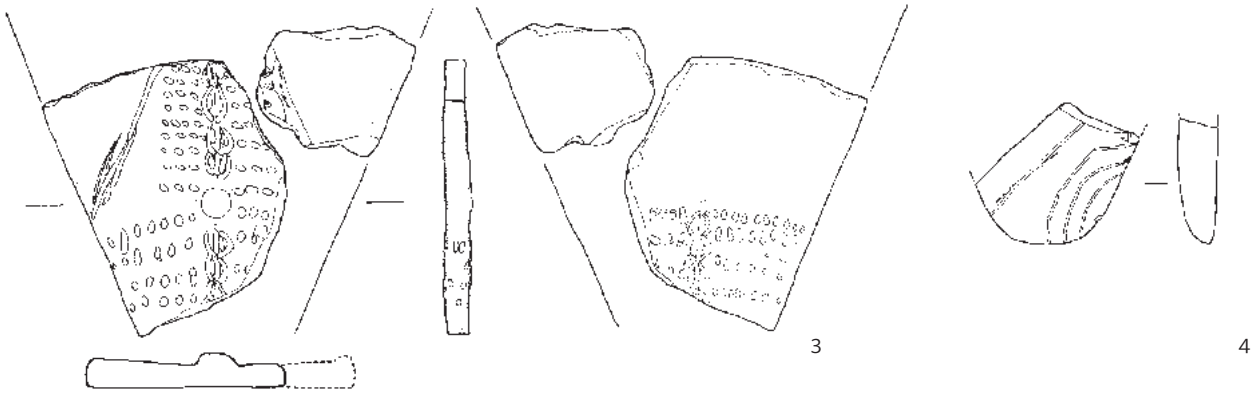


東山遺跡
環状列石 2



一ノ渡遺跡
H18・19 組石

J・K13・14 組石



三内丸山遺跡
第 13 号環状配石墓

第 39 号環状配石墓

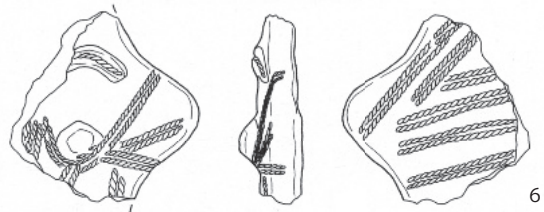
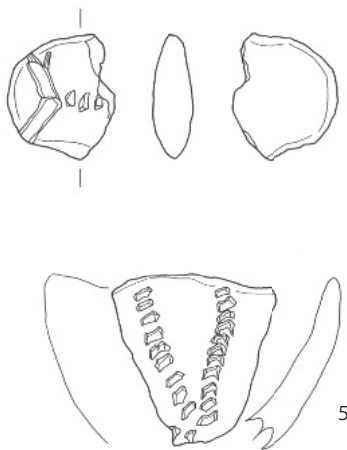


図 35 配石墓出土の土偶

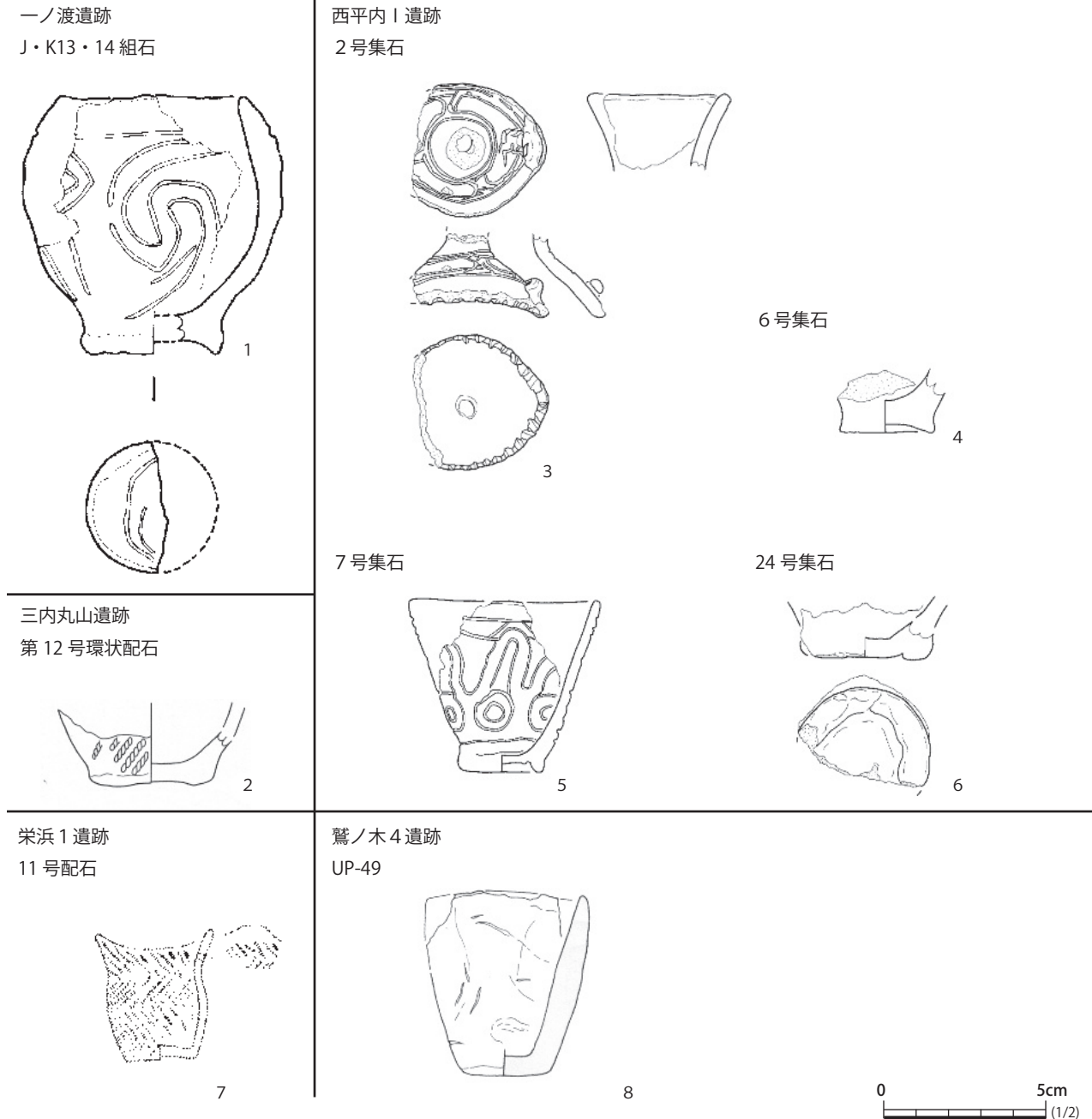


図36 配石墓出土のミニチュア土器

類；いずれもⅢ期）で出土している（図40-1～3）。板状石製品・岩板は水上（2）遺跡（2例）・一ノ渡遺跡（5例）・小牧野遺跡（1例）・伊勢堂岱遺跡（1例）・漆下遺跡（1例）・館町Ⅱ遺跡（1例）・西平内Ⅰ遺跡（1例）・糠森遺跡（1例）・東山遺跡（1例）・倉知川右岸遺跡（1例）で出土している（図41-1・2・7，図42-1～11・13・14・16，図43-1～6・8，図44-5・6・8・9）。水上（2）遺跡（Ⅱ期）・漆下遺跡（Ⅳ期）以外はⅢ期の事例であり、土製品と同様にⅢ期に偏る傾向がある。石冠は水上（2）遺跡（Ⅱ期）・糠森遺跡（Ⅲ期）で各1例出土してい

る（図41-3）。水上（2）遺跡・一ノ渡遺跡・三内丸山遺跡・小牧野遺跡・漆下遺跡・西平内Ⅰ遺跡・東山遺跡・浜松5遺跡・館野遺跡・鷺ノ木4遺跡ではその他の石製品が出土している（図41-4～6，図42-12・15，図43-7，図44-1～4・7）。「刀剣形石製品¹²⁾」は6例出土している。三内丸山遺跡の「刀剣形石製品」は自然礫をそのまま利用したものである（図45-2・3）。富ノ沢（2）遺跡でも出土している（図45-4）。湯の里1遺跡では配石に組み込まれている（図45-6）。また、一ノ渡遺跡（Ⅲ期）・西平内Ⅰ遺

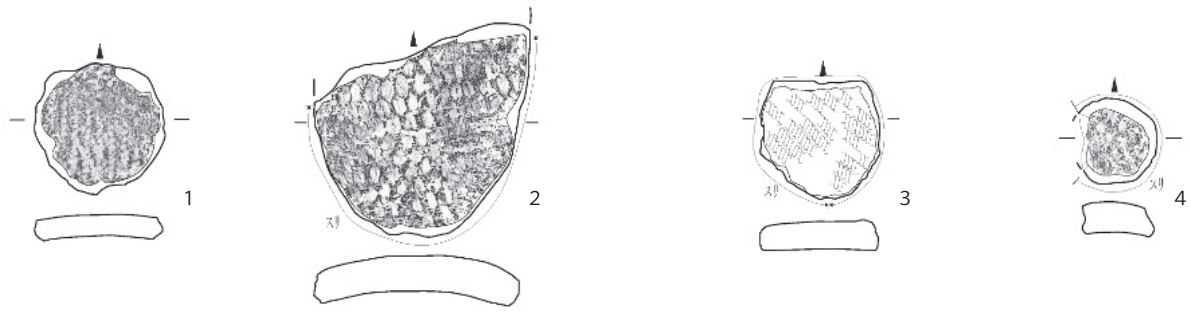
水上（2）遺跡

2号墓

3号墓

7号墓

8号墓

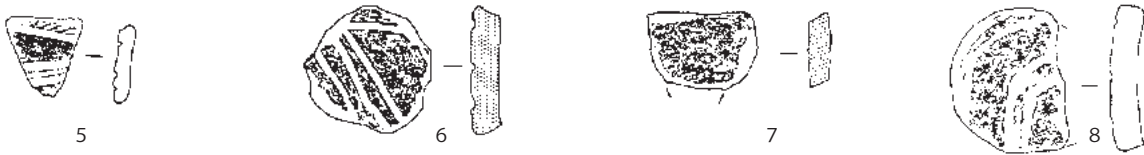


一ノ渡遺跡

J・K14 組石

J・K13・14 組石

O22 組石

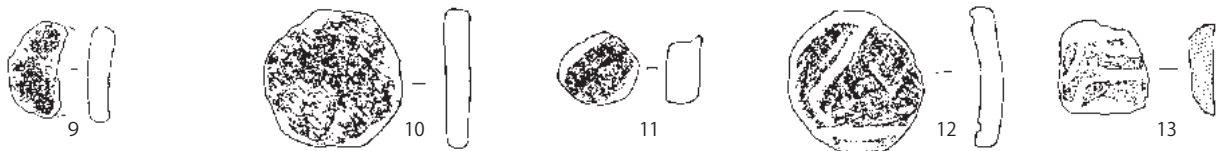


Q18 組石

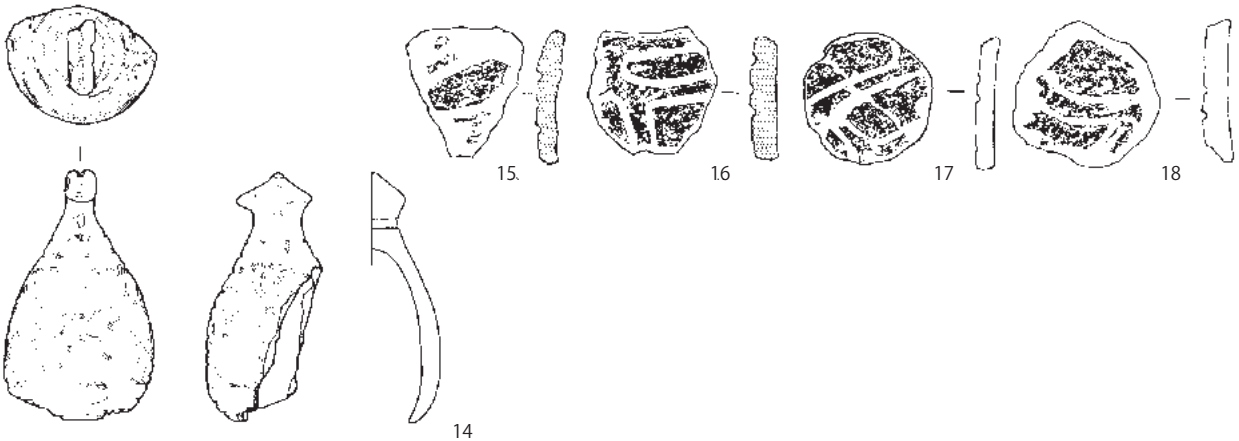
Q19（2）組石

T26 立石遺構

T・U31 土抔



S・T15 土抔



T27 集石

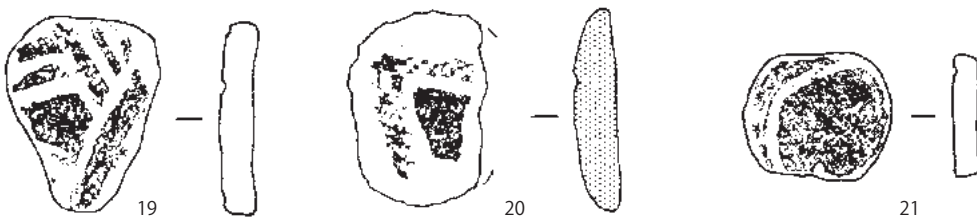
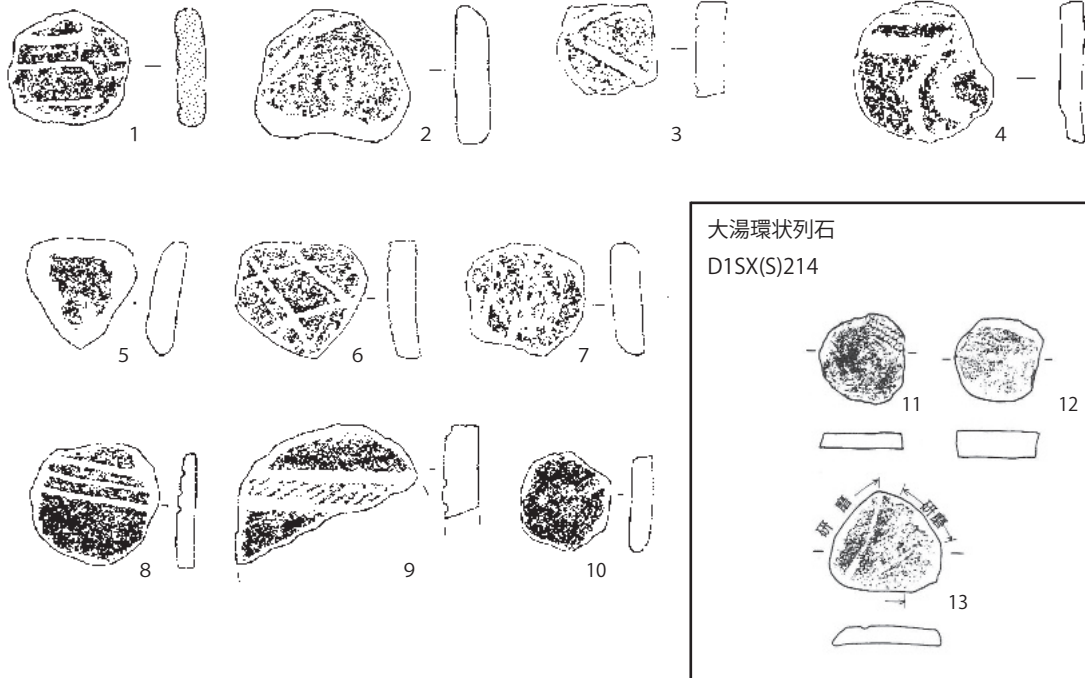


図37 配石墓出土の土製品 1

一ノ渡遺跡

W29 組石

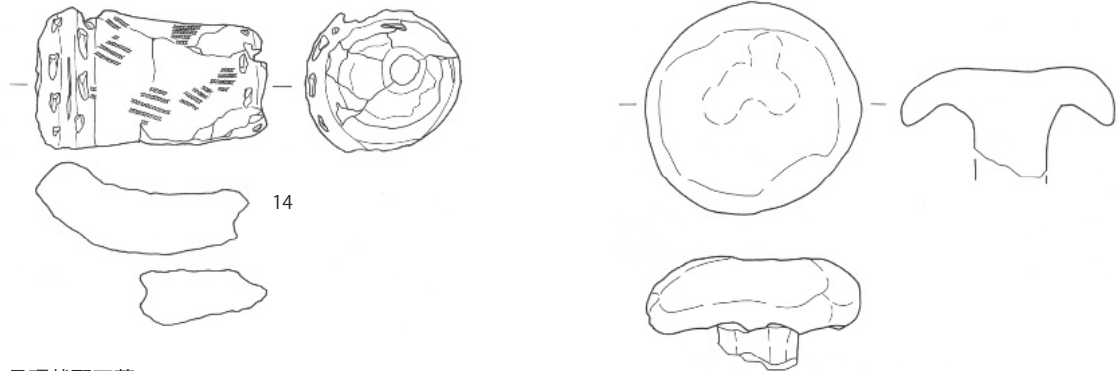
V26・27 土拵



三内丸山遺跡

第 11 号環状配石墓

第 41 号環状配石墓



第 39 号環状配石墓

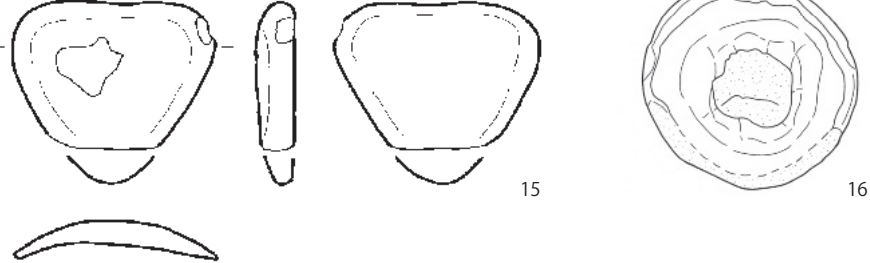
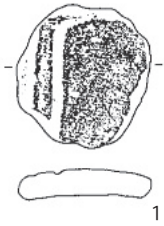


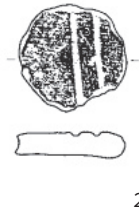
図38 配石墓出土の土製品2

西平内Ⅰ遺跡

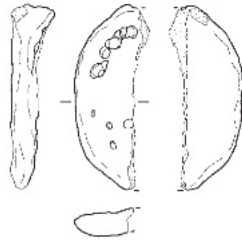
2号集石



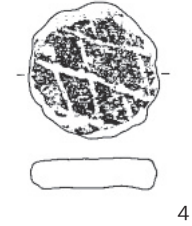
6号集石



7号集石



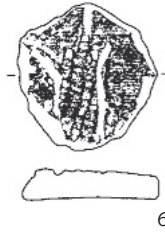
11号集石



27号集石



58号集石

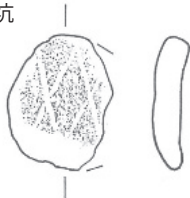


59号集石



糠森遺跡

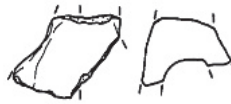
4号土坑



9

倉知川右岸遺跡

P-21



10

館野遺跡

P-227



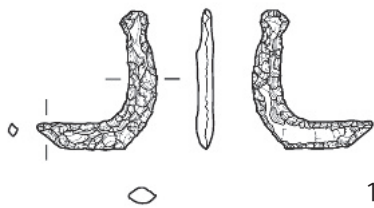
11



図39 配石墓出土の土製品3

漆下遺跡

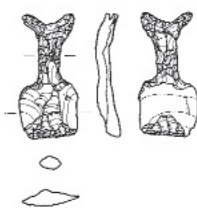
SKQ212



1

西平内Ⅰ遺跡

40号集石



2

57号集石



3



図40 配石墓出土の異形石器

跡(Ⅲ期)で1例ずつ出土している(図45-1・5)。線刻礫は水上(2)遺跡(Ⅱ期)・大湯環状列石(Ⅲ期)で1例ずつ出土している。

漆塗木製品は大湯環状列石(Ⅲ期)で出土している。赤色顔料・ベンガラは大湯環状列石(Ⅲ期)での検出例が多いのが特徴的である。津軽・渡島半島南部でも検出されており、倉知川右岸遺跡P-21では、埋土

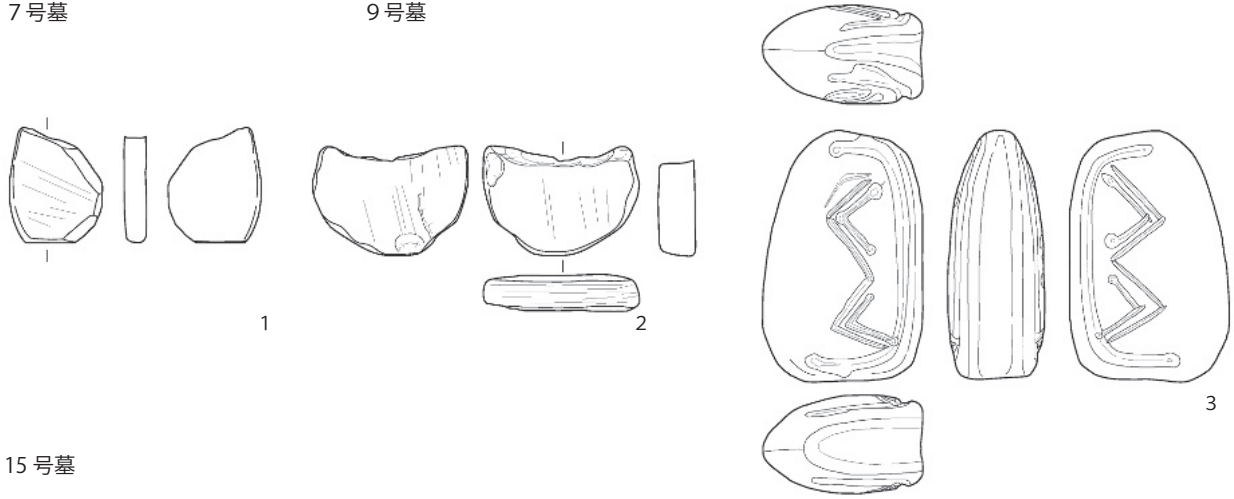
に赤色顔料が含まれた層がある。

装身具以外の非日常的な遺物は、Ⅲ期に大幅に増加し、Ⅳ期にはほとんど見られなくなる。特に、土偶・ミニチュア土器以外の各種土製品・板状石製品・岩板は、Ⅰ～Ⅱ期に出現し、Ⅲ期には津軽海峡域全体の配石墓から出土する。Ⅳ期にはほとんどみられなくなり、代わって渡島半島南部では装身具類が目立つよう

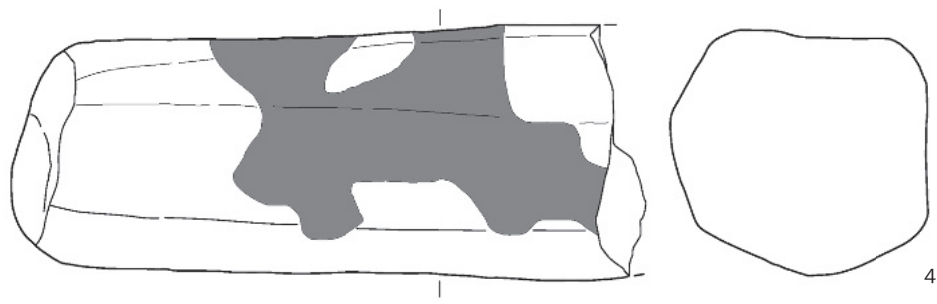
水上(2)遺跡

7号墓

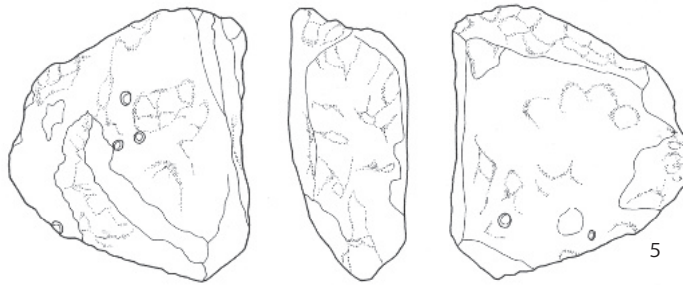
9号墓



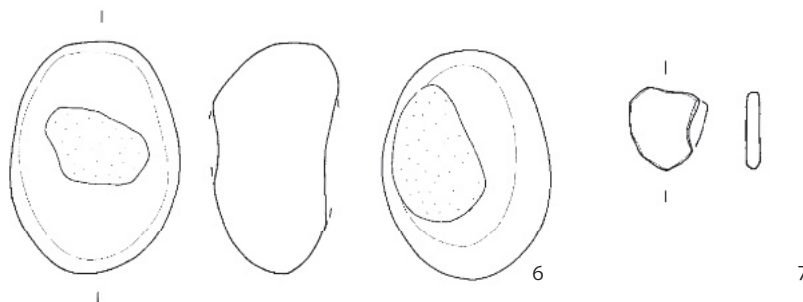
15号墓



三内丸山遺跡第13号環状配石墓



小牧野遺跡 SK61



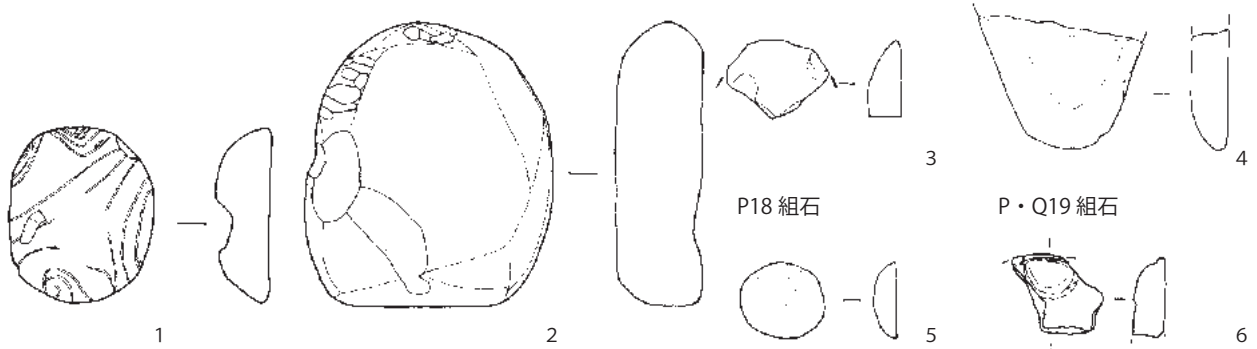
0 1・2・5・6・7 5cm
(1/2)

0 3・4 10cm
(1/3)

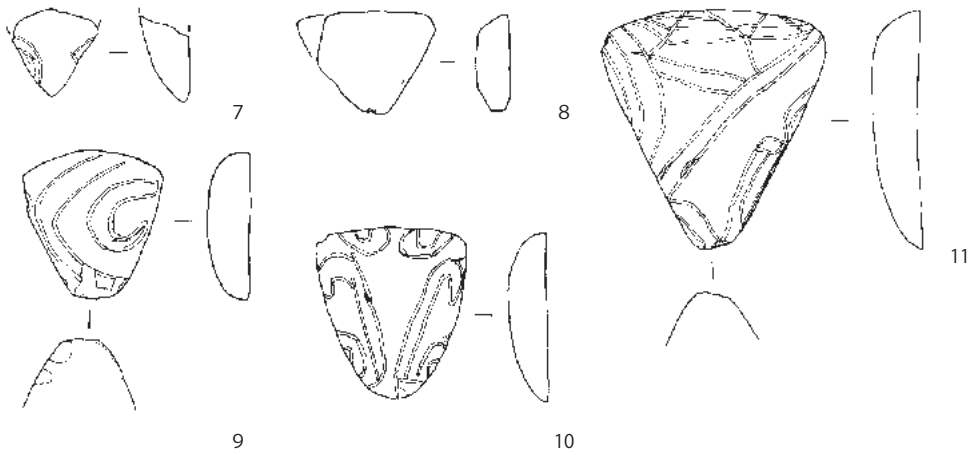
図41 配石墓出土の石製品1

一ノ渡遺跡

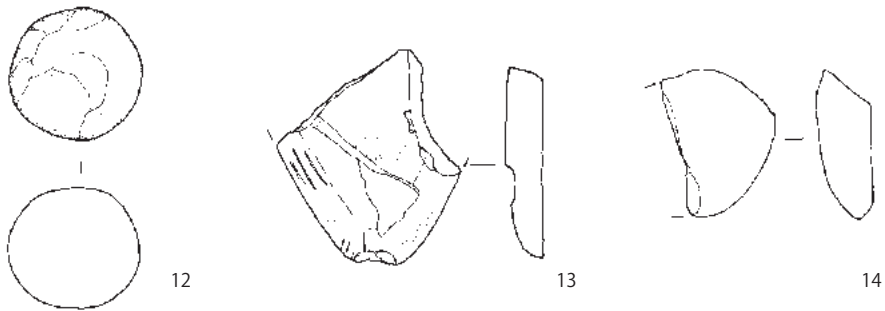
J・K13・14 組石



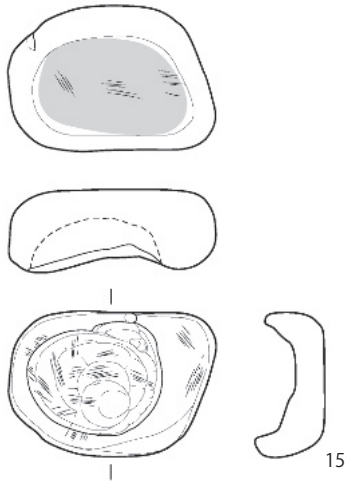
S・T15 土抔



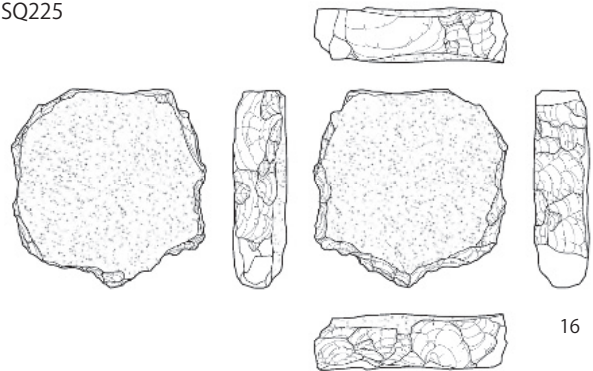
W29 組石



漆下遺跡 SKQ10036



SQ225

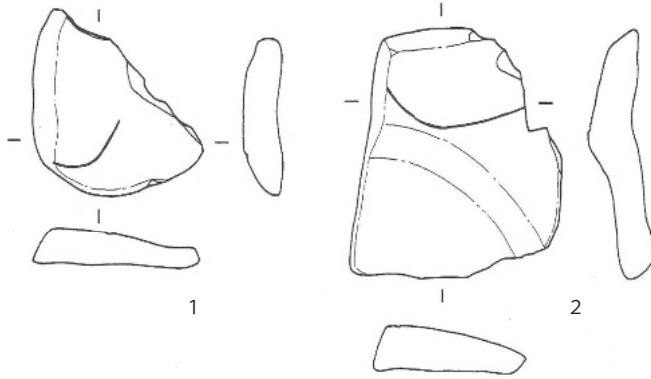


0 1~15 5cm (1/2)

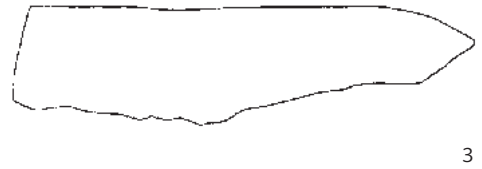
0 16 10cm (1/3)

図42 配石墓出土の石製品2

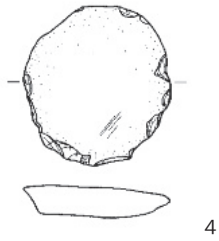
大湯環状列石
D1SX(S)221



館町II遺跡
土器棺墓



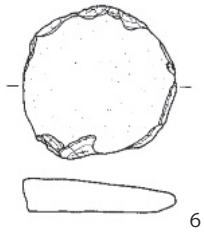
西平内I遺跡
2号集石



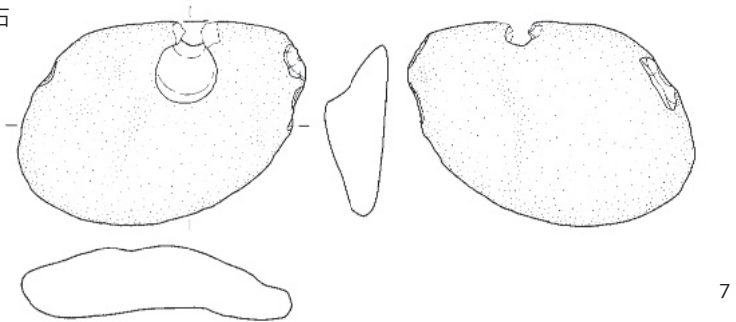
12号集石



13号集石



59号集石



糠森遺跡
38号土坑

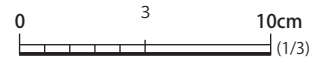
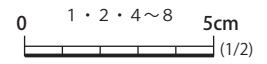
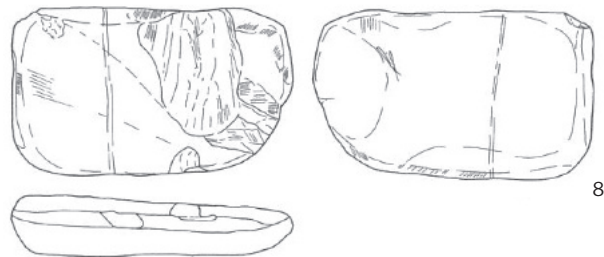
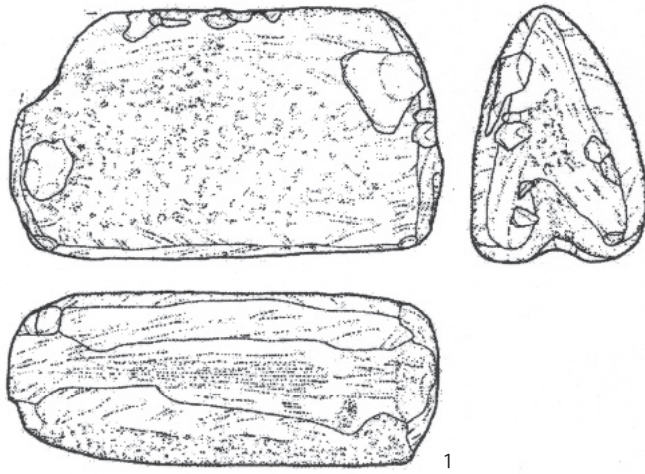
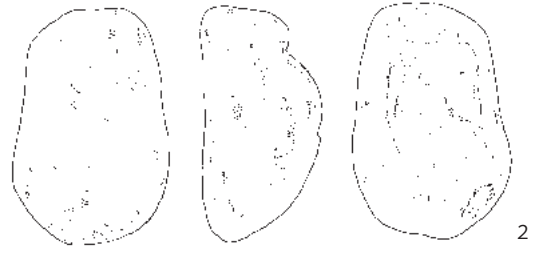


図43 配石墓出土の石製品3

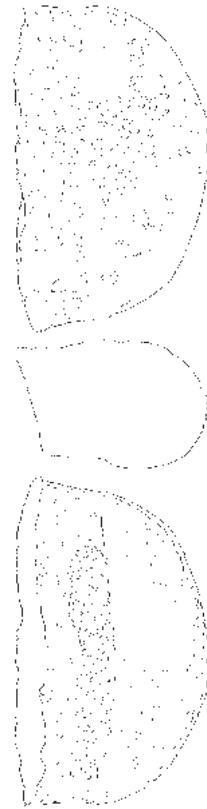
東山遺跡
環状列石 1



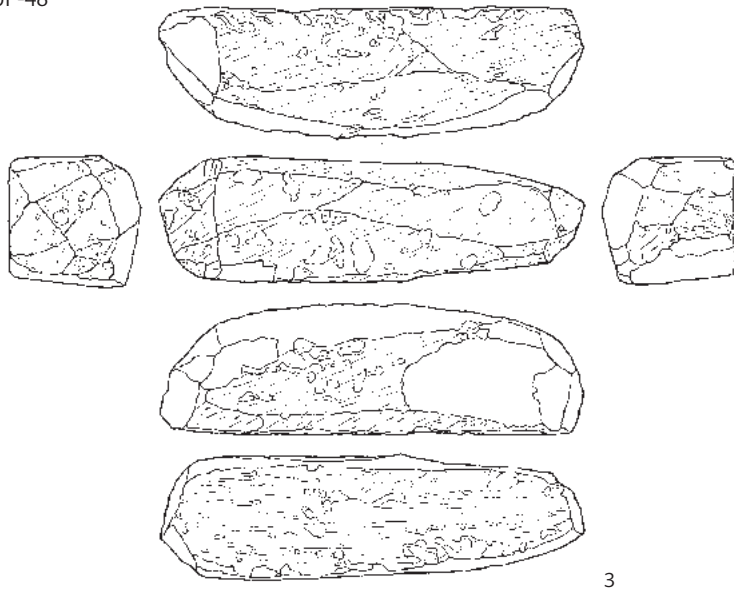
浜松5遺跡
40号配石遺構



館野遺跡
P-226



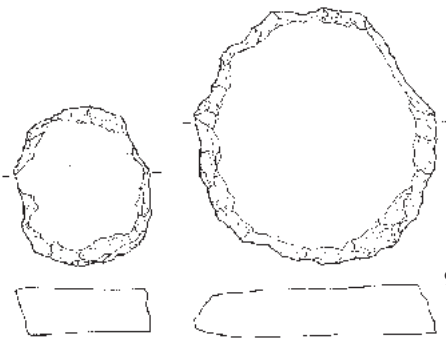
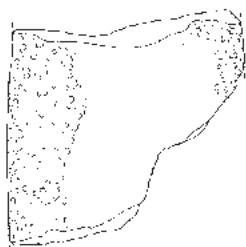
鷺ノ木4遺跡
UP-48



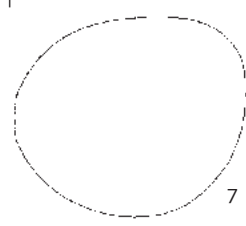
P-95

P-137

P-120



P-178

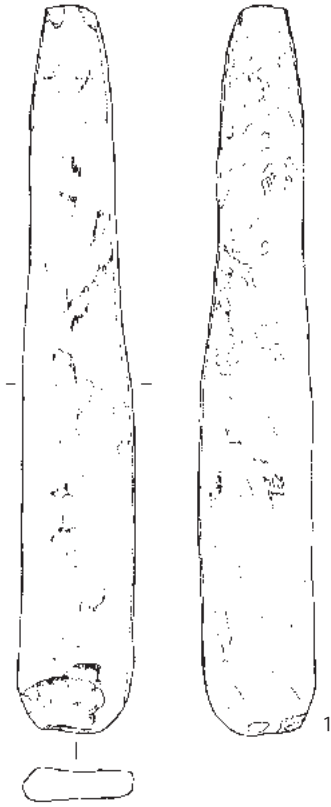


0 1~3 5~9 5cm (1/2)

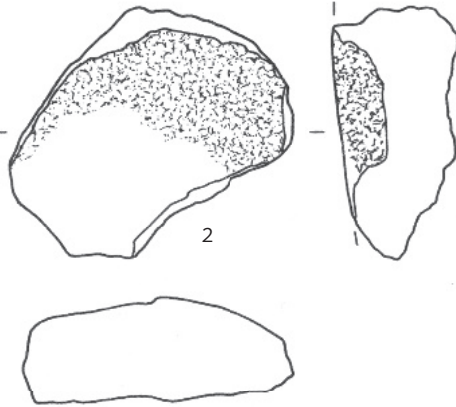
0 4 10cm (1/5)

図44 配石墓出土の石製品 4

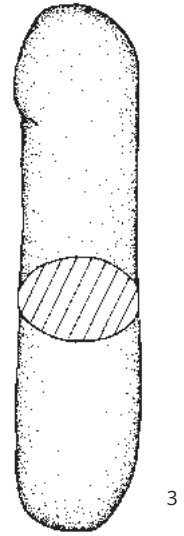
一ノ渡遺跡
W29 組石



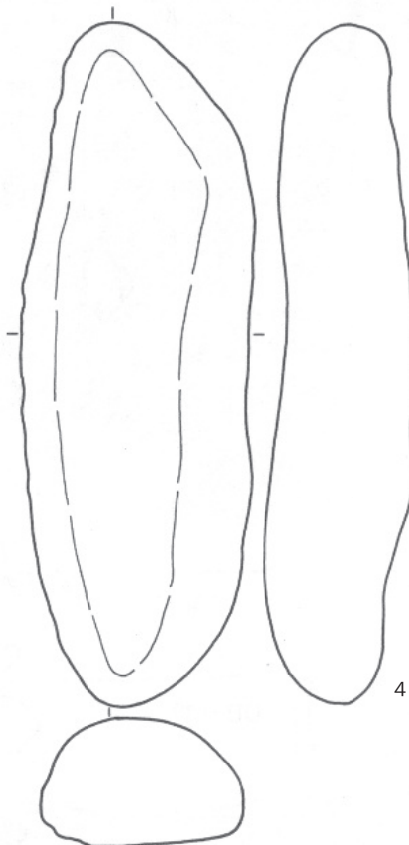
三内丸山遺跡
12号環状配石



山野峠遺跡
'83 第1号石棺墓



富ノ沢(2)遺跡
第2号環状配石墓



西平内I遺跡
15号集石



湯の里1遺跡
土壙57

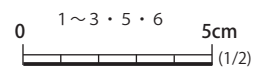
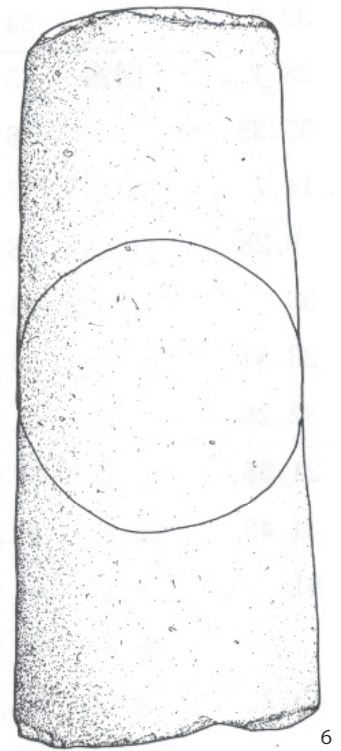


図45 配石墓出土の「刀剣形石製品」

になる。

3-3-5. 副葬品のセット関係

同時に出土する傾向があるのは、石鏃・石斧と、土製品・石製品である。

石鏃・石斧は、5基の配石墓から同時に出土している。石斧が出土した配石墓は17基であり、そのうちに占める割合は約3割である。堀合I遺跡第2号配石遺構(Ⅱ期)以外はⅢ期の配石墓である。堀合I遺跡第2号配石遺構(D3類;Ⅱ期)は、D3類の配石の下部から土器棺(壺形;図22)が検出されている。他には、石錘・石錐・筒状石器・凹石が出土している。土器棺以外は配石中からの出土である。したがって、後世の混入の可能性もある。一ノ渡遺跡W29(1)・(2)組石(C3類;Ⅲ期)では、石鏃・磨製石斧の他に複数個体の土器片(朱塗り含む)・石刀・たたき石・不定形石器・フレイク・球状磨石・方形板状土製品・三角形岩板が出土している。土器片の一部を除くと同じレベルからの出土であり、まとめて埋納された可能性がある。西平内I遺跡(Ⅲ期)では、2基の配石墓から石鏃・打製石斧(未製品)が同時に出土している。6号集石(C3類)からは、石鏃・石斧の他にミニチュア土器・円盤状土製品が出土している。11号集石からは石鏃・石斧の他に円盤状土製品が出土している。これら2基の配石墓の遺物は、埋土からの出土が多い。ただ、西平内I遺跡においては、石斧の未製品が、意図的に埋土に埋納されている可能性が高いため、石鏃や土製品も意図的に埋納されている可能性がある。浜松5遺跡22号配石遺構(C1類;Ⅲ期)では、無茎石鏃が坑底から、磨製石斧が埋土から出土している。22号配石遺構はC1類であり、土坑内にも礫が配されることから、石鏃・磨製石斧ともに副葬品の可能性が高い。

土製品・石製品は、10基の配石墓から同時に出土している。Ⅱ期には、水上(2)遺跡7号墓(A1類)からは板状土製品・板状石製品が同時に出土しており、板状土製品は、土坑内堆積土下層からの出土である。堆積土下層は、土器片の出土状況から、配石墓の造営と同時期に堆積した可能性が高い。板状石製品は、土坑内堆積土上層からの出土である。堆積土上層は後世の流入の可能性もある。したがって、セットで埋納された可能性は低い。水上(2)遺跡の1例以外はⅢ期の配石墓である。一ノ渡遺跡では、3基の配石墓から土製品・石製品が同時に出土している。J・K13・14組石(C3類)では、三角形土製品・岩板(三角形・円形)のほかに、土偶・耳飾りが出土している。いずれも埋土からの出土である。土坑内にも礫が配さ

れることから、意図的に埋納された可能性がある。W29(1)・(2)組石からは方形板状土製品・三角形岩板が同時に出土している。先に述べたように、同じレベルからの出土であり、まとめて埋納された可能性がある。S・T15土拵(C3類)からは、深鉢形土器・土製品(円盤状・三角形[朱塗り]・鐸形)・三角形岩板が同時に出土している。報告者によれば、これらの遺物と土坑内の配石は、深鉢形土器を中心に分布する。したがって、意図的に埋納されている可能性が高い。伊勢堂岱遺跡SKS-d213(B4類)からは、土製品(円盤状・三角形)・三角形岩板が同時に出土している。他には、削器・Rフレイク・石皿・石錘・凹石が出土している。西平内I遺跡では、2基の配石墓から土製品・石製品が同時に出土している。2号集石(D3類)からはミニチュア土器・円盤状土製品・円盤状石製品の他に、砥石・ミニチュア土器が出土している。59号集石(B1類)からは、円盤状土製品・有孔石製品の他に石皿転用品が出土している。倉知川右岸遺跡では、P-21(D3類)から鐸型土製品・板状石製品が同時に出土している。他には焼成粘土塊・魚類・小動物の骨片が出土している。遺物はいずれも埋土からの出土である。P-21の埋土からは、赤色顔料を含む層が検出されていることから、埋土出土遺物も意図的に埋納された可能性が高い。館野遺跡では、2基の配石墓から土製品・石製品が同時に出土している。P-120(C4類)からは、土製品(円盤状・三角形)・石製品(花崗岩・砂岩)の他、石鏃(頁岩)・スクレイパー・フレイク・両面調整石器・石核・炭化材が出土している。いずれも埋土からの出土であるが、出土したレベルにはばらつきがある。したがって、すべて遺物が意図的に埋納されたわけではない可能性がある。P-137(B4類)からは、土製品(円盤状ほか)・石製品が出土しており、他にはスクレイパー・フレイク・石核・炭化物が出土している。石製品は埋土中位からの出土である。出土状況が不明な遺物が多いが、出土した土器片には縄文時代早期のものも混じっており、すべてが意図的に埋納されたわけではない可能性がある。

以上の分析から、セット関係が明確な副葬品は、Ⅲ期に出現し、Ⅳ期にはみられなくなる。石鏃・石斧と石製品・土製品のセットが特徴的であり、Ⅲ期の津軽海峡域全体に分布する。Ⅲ期に遺物の出土割合が高くなることと関連する変化と評価できる。

4. 分析結果と考察

4-1. 分析結果：津軽海峡域における配石墓の動態

津軽海峡域の配石墓は、時期ごとに主体となる形

態・分布の偏りが変化する(図4)。I期の配石墓はD2・D3類が主体である。II期の配石墓はA類が主体である。I・II期の配石墓は津軽に偏って分布する。III期の配石墓はC4・D3類が主体である。III期の配石墓は半数近くが渡島半島南部に分布し、C4・D3類が多い。米代川流域でもC4・D3類が多い。また、B類が他の時期に比べて多いという特徴がある。特に、B1類は馬淵川流域で主体的である。IV期の配石墓はC4・D3類が主体である。分布の中心は米代川流域で、約7割が集中する。渡島半島南部ではC4類が主体である。米代川流域・渡島半島南部以外の地域にはほとんど分布しない。

また、各時期において、配石墓が多く検出される遺跡があることも特徴である(図5, 図6)。さらに、その遺跡内で、配石墓の形態が偏る傾向がある。I期に配石墓が集中する遺跡は、三内丸山遺跡・天戸森遺跡・田代IV遺跡・栄浜1遺跡である。三内丸山遺跡・天戸森遺跡では、D2・3類が多く、田代IV遺跡ではD3類が多い。栄浜1遺跡ではばらつきがある。II期に配石墓が集中するのは、水上(2)遺跡・堀合I遺跡・山野峠遺跡・日廻岱B遺跡・御所野遺跡である。水上(2)遺跡・堀合I遺跡・山野峠遺跡では、A類が多い。日廻岱B遺跡では、C4・D3類が多く、御所野遺跡ではD1～3類が多い。III期に配石墓が集中する遺跡は、一ノ渡遺跡・大湯環状列石・西平内I遺跡・糠森遺跡・湯の里1遺跡・浜松5遺跡・濁川左岸遺跡・鷲ノ木遺跡・鷲ノ木4遺跡・上台1遺跡・倉知川右岸遺跡・館野遺跡である。一ノ渡遺跡・西平内I遺跡・浜松5遺跡は形態にばらつきがある。糠森遺跡は、C3・4類とD3類が主体である。大湯環状列石・湯の里1遺跡はD1～3類が主体である。濁川左岸遺跡はほとんどが、鷲ノ木4遺跡ではすべてがC4類である。鷲ノ木遺跡はすべてD3類である。倉知川右岸遺跡はC2・D3類が多い。館野遺跡はC4・D3類が主体である。IV期に配石墓が集中するのは、漆下遺跡で、C2・C4・D3類が多い。

長軸方向については、I・II期には、米代川流域以外の地域では、長軸が揃う傾向がある。特に、II期の津軽では、A類の主体とする遺跡で長軸が1～2方向に集中する傾向が強い。I・II期の米代川流域では、長軸が揃う傾向は強くない。III期には、渡島半島南部以外で長軸が揃う傾向が弱い。渡島半島南部では、長軸が揃う傾向に遺跡差がある。IV期は、分析できる遺跡が少なく、全体的な傾向はつかめない。米代川流域では長軸が揃う傾向は弱い。ただ、長軸を判別できない円形土坑が主体的であり、むしろ土坑の形態に特徴がある可能性がある。

遺物に関しては、III期以降に出土割合が増加する。出土遺物の内容も変化し、III期にはI・II期に津軽で出現した、土製品(円盤状・三角形など)・板状石製品・岩板といった遺物の出土が津軽海峡域全体で目立つようになる。IV期には米代川流域・渡島半島南部で遺物の出土割合が増加する。特に渡島半島南部では、装身具が目立つ。セット関係では、III期に石鎌・石斧のセット・土製品・石製品のセットが目立つ。遺物の出土割合の増加傾向と関連する変化の可能性が高い。

以上のように、津軽海峡域の配石墓の動態は、I～IV期のいずれにも画期がある。特に大きな画期はIII期にあり、数の増大・分布の変化・主体となる形態の変化・長軸方向の分散化・非日常的な遺物の増加といった多くの変化が起こる。IV期には、配石墓に減少するとともに、土製品・石製品の出土例がほとんどなくなる。代わって装身具類の出土が増加する。

4-2. 考察①：環状配石墓の特徴

環状配石墓は、本稿の分類ではB2・C2・D2類のうち、土坑直上配石が環状を呈すものが該当する。三内丸山遺跡(I期)のほか、I～III期の米代川流域・馬淵川流域・III～IV期の渡島半島南部でみられる。ただ、土坑の形状や配石方法が三内丸山遺跡の事例と異なるものも多い。三内丸山遺跡の特徴は、土坑が長方形・楕円形である事例(図46-1～3・5～7・9, 図47-5・6・10)、土坑に対し土坑直上配石が大きい事例(図46-1～3・5～7・9, 図47-5・6)、礫の長軸を揃えて配置する事例(図46-1～9, 図47-1・2・4～6・8・9)が検出されていることである。天戸森遺跡第10号配石遺構(I期)は土坑が円形を呈す(図48-1)。配石方法は類似するが、埋葬方法には差がある可能性がある。大湯環状列石A2SX(S)14(III期)は、土坑直上配石が土坑に対して大きく、配石方法は三内丸山遺跡の事例と類似する(図48-2)。ただ、時期差があることから、三内丸山遺跡の事例と直接関係しない可能性が高い。また、中央に礫を丸く敷きつめた箇所があるという差異がある。西張平遺跡第55号土坑(I期)は、礫の長軸を揃えて配置されるが、土坑直上配石は土坑とほぼ変わらない大きさである(図48-3)。御所野遺跡(II期)の事例は、土坑直上配石が三内丸山遺跡における環状配石墓と同程度の大きさである。ただ、下部が未調査であるため、土坑の有無・形状・大きさは不明である(図48-4～9)。田代IV遺跡配石2・5号(I期)は、西張平遺跡第55号土坑同様、土坑と土坑直上配石の大きさがほぼ変わらない(図49-1)。富ノ沢(2)遺跡第2号配石遺構(I期)は、三内丸山遺跡に最も

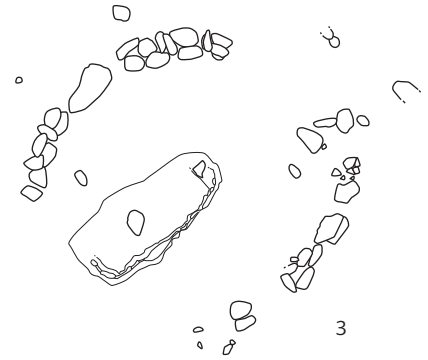
第 11 号環状配石墓



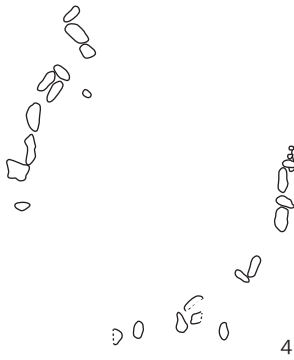
第 13 号環状配石墓



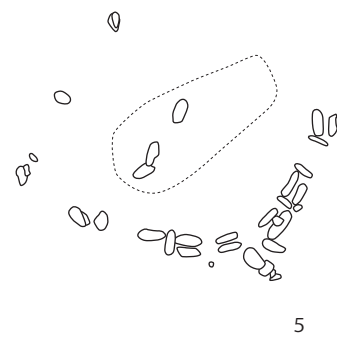
第 17 号環状配石墓



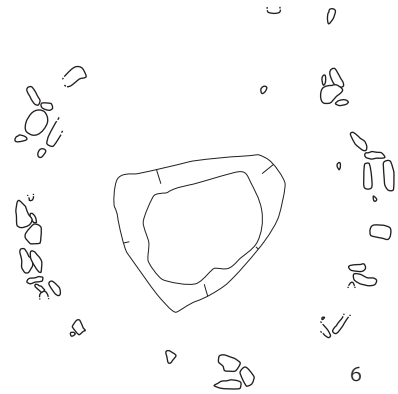
第 24 号環状配石墓



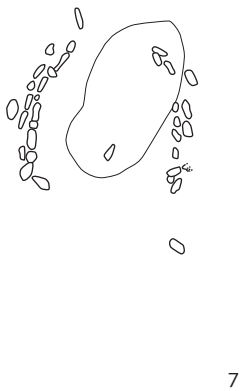
第 25 号環状配石墓



第 29 号配石遺構



第 952 号土坑



第 30 号配石遺構



第 31 号配石遺構



土坑内配石

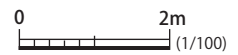


図46 三内丸山遺跡の環状配石墓 1

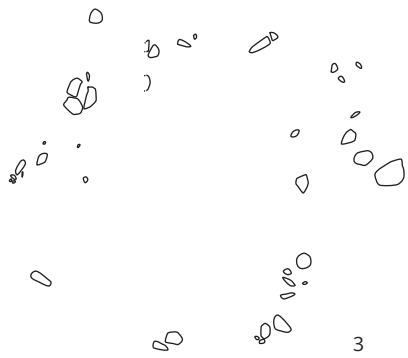
第32号配石遺構



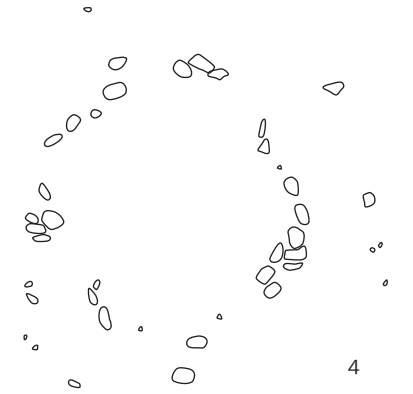
第34号配石遺構



第36号配石遺構



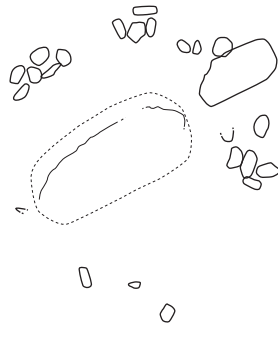
第37号配石遺構



第38号環状配石墓



第39号配石遺構



第40号配石遺構



第41号環状配石墓



青森市第3・4号配石



第3号配石

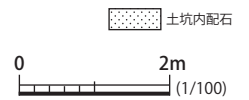


図47 三内丸山遺跡の環状配石墓2

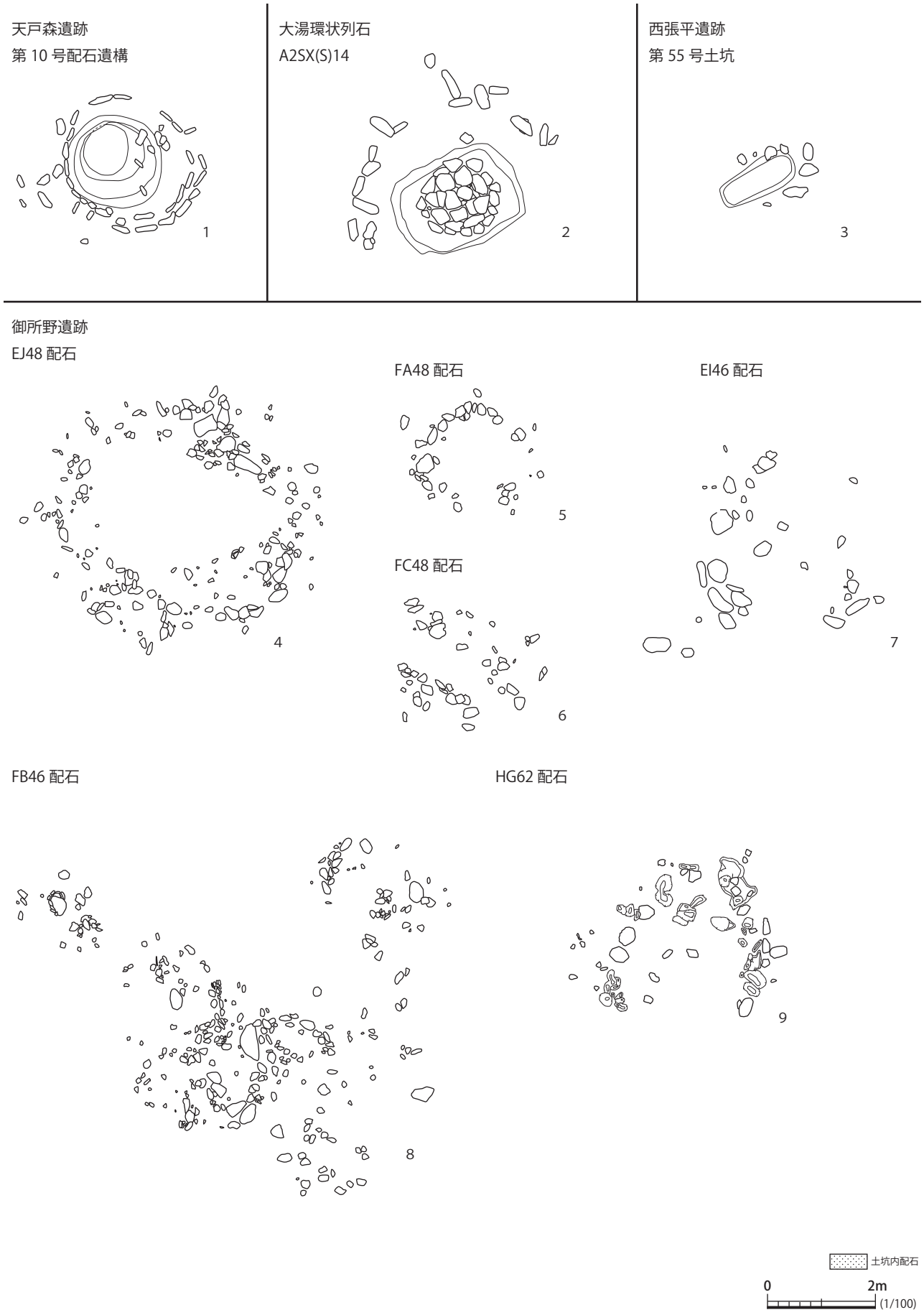


図48 三内丸山遺跡以外の環状配石墓 1

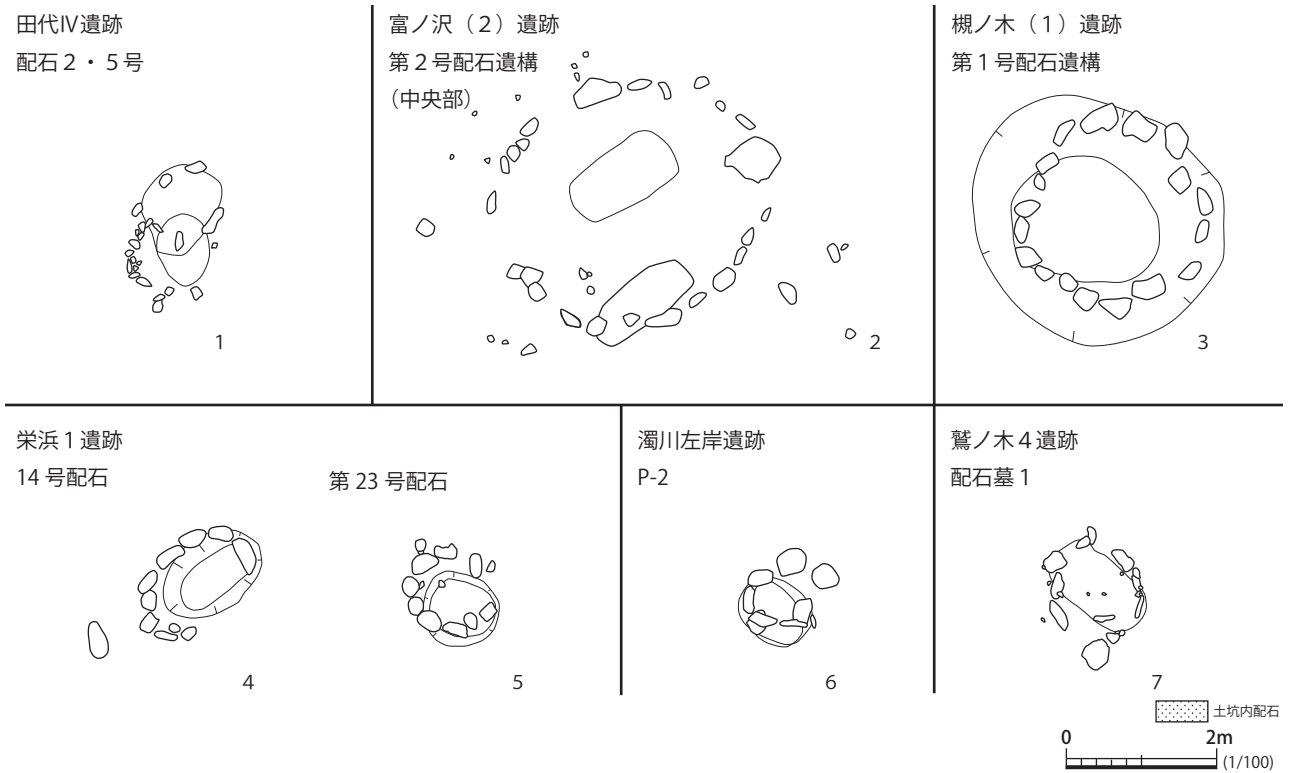


図49 三内丸山遺跡以外の環状配石墓2

近い事例である(図49-2)。下部土坑が長方形で、礫の長軸を揃えて配置される箇所があるためである。槻ノ木(1)遺跡第1号配石遺構(I期)は、土坑は円形に近く、配石も土坑と同程度の大きさである。東山遺跡環状列石1・2(Ⅲ期)は、掘り込みの一部に沿って礫が配される(図10)。ただ、掘り込みが土坑に対し非常に大きいため、「家屋墓」「廃屋墓」として捉える方が適切である。栄浜1遺跡14号配石(中期~後期)・第23号配石(中期)・濁川左岸遺跡P-2(Ⅲ期)・鷺ノ木4遺跡配石墓1(Ⅳ期)は、土坑と土坑直上配石の大きさがほぼ変わらない(図49-4~7)。日吉遺跡ストーン・サークル(後期)・白尻小学校遺跡GP-13・14(Ⅳ期)は、土坑直上配石が大きく、土坑は方形に近い(図11-2)。三内丸山遺跡の事例とは時期が離れており、形態も類似することを踏まえると、三内丸山遺跡の環状配石墓ではなく、Ⅳ期の道央における環状列石墓の類例として扱うのが適切である。

以上の特徴を踏まえると、三内丸山遺跡の環状配石墓に分類される事例は、土坑直上配石の大きさにより、2つに分類することができる。土坑に対し土坑直上配石が大きいものを1類、ほぼ変わらないものを2類とする。環状配石墓1類には、三内丸山遺跡(第3号配石以外)・天戸森遺跡・大湯環状列石・御所野遺

跡・富ノ沢(2)遺跡の事例が該当する。2類には、三内丸山遺跡(第3号配石)・西張平遺跡・田代IV遺跡・栄浜1遺跡・濁川左岸遺跡・鷺ノ木4遺跡の事例が該当する。環状配石墓1類と2類は、三内丸山遺跡以外では同遺跡から検出されておらず、1類は比較的大規模な集落に分布する傾向がある。したがって、環状配石墓1類と2類の性格(埋葬行為や被葬者など)には差異がある可能性が高い。配石の大きさに差があり、構築にかかる労力が異なることから、1類に2類よりも有力な人間が埋葬された可能性が想定できる。しかし、環状配石墓1類と2類の出土遺物に有意な差は認められず、確実に被葬者に階層差があったと断定はできない。

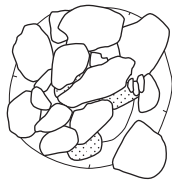
また、三内丸山遺跡では、道路に沿って土坑墓・環状配石墓が配置されている。そのため、各墓域において長軸が揃っている。三内丸山遺跡の墓域の構造は、長軸が揃った事例が多い石棺墓との関係を示唆する。

4-3. 考察②：石棺墓の特徴と成立

石棺墓は、本稿の分類ではA類が該当する。A類はⅡ期の津軽に分布の中心がある(図4)。Ⅱ期の津軽におけるA類は、板状の礫が土坑の壁に沿って立てられることが特徴である(図50-1~17, 図51-1~11・13, 図52-1~3・6~9, 図53-1~12・14

砂子瀬遺跡

'09 第1号配石遺構



1

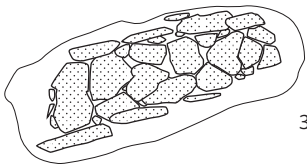
'09 第3号配石遺構



2

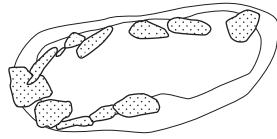
水上(2)遺跡

1号墓



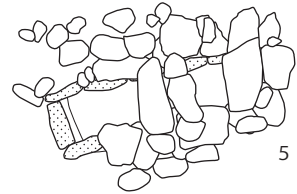
3

2号墓



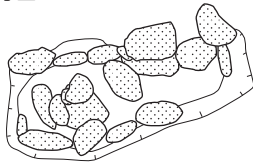
4

3号墓



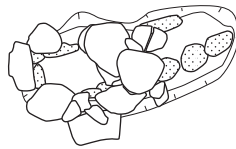
5

4号墓



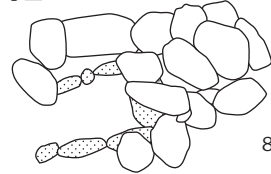
6

5号墓



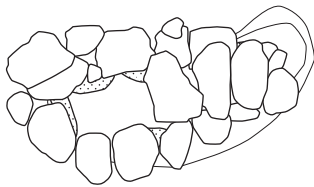
7

6号墓



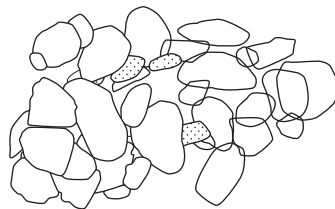
8

7号墓



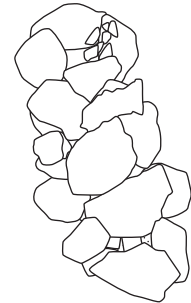
9

8号墓



10

9号墓



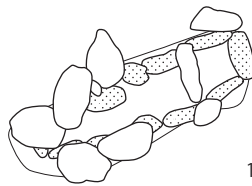
11

11号墓



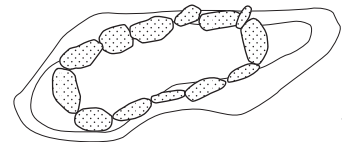
12

12号墓



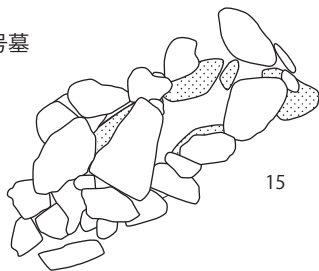
13

13号墓



14

14号墓



15

15号墓



16

16号墓



17

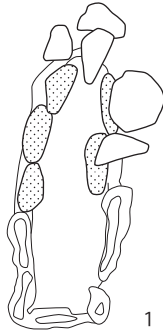
土坑内配石



図50 津軽のA類1 (図面上が北)

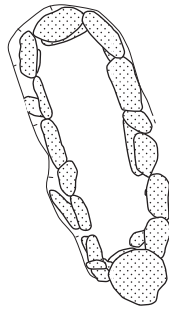
水上(2)遺跡

17号墓



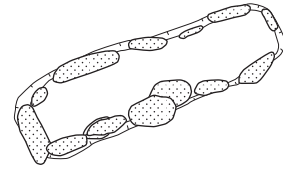
1

18号墓



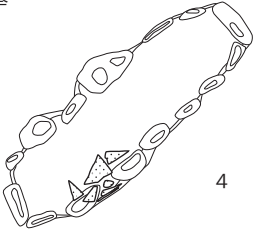
2

19号墓



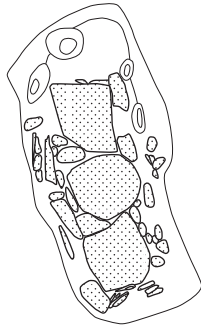
3

20号墓



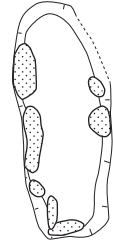
4

21号墓



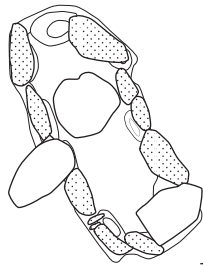
5

22号墓



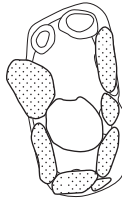
6

23号墓



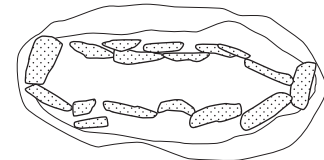
7

24号墓



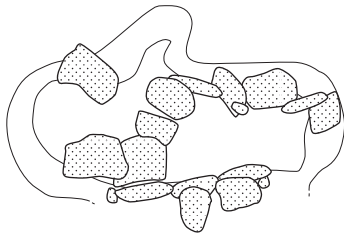
8

25号墓



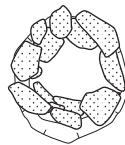
9

26号墓



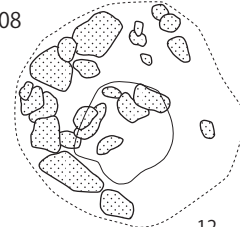
10

扇田(2)遺跡
SK49



11

小金森遺跡
Pit No.08



12

平野遺跡
SX04



13

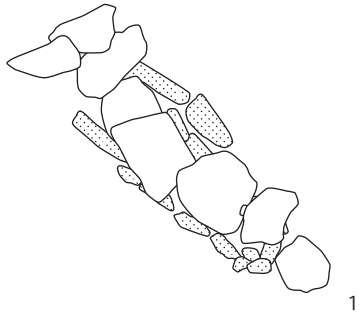
土坑内配石



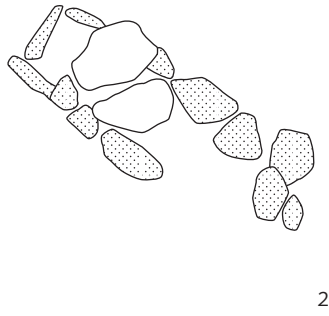
図51 津軽のA類2 (図面上が北)

餅ノ沢遺跡

'00 第1号石棺墓



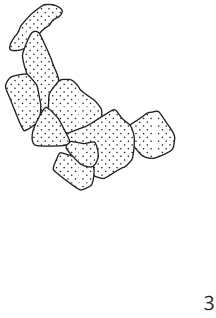
'00 第2号石棺墓



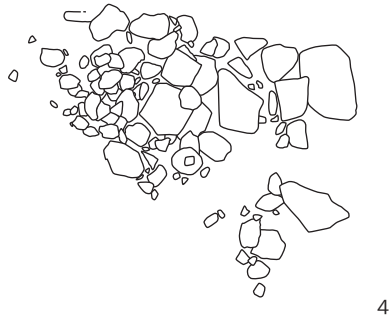
'00 第4号石棺墓



'00 第3号石棺墓

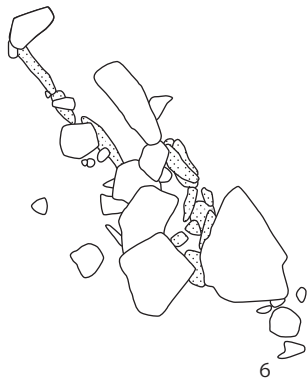


'02 第1号配石遺構

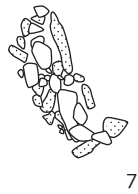


堀合川遺跡

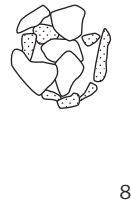
1号組石棺



2号組石棺



3号組石棺



4号組石棺

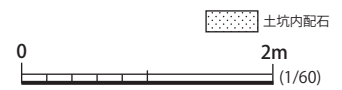
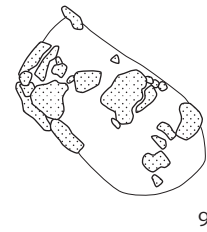
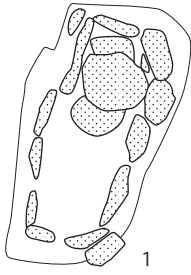


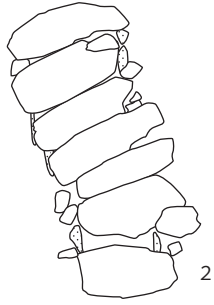
図52 津軽のA類3 (図面上が北)

堀合 I 遺跡

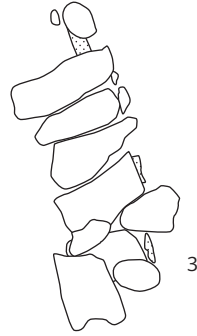
第 1 号石棺墓



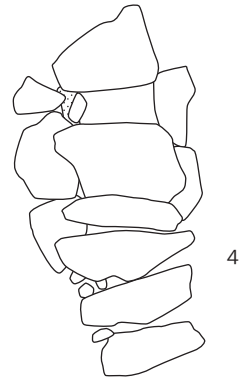
第 2 号石棺墓



第 3 号石棺墓



第 4 号石棺墓



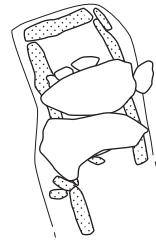
第 5 号石棺墓



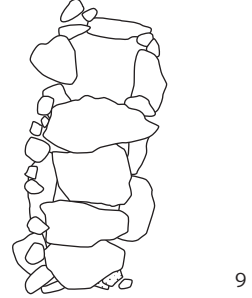
第 7 号石棺墓



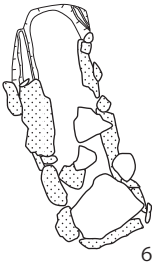
第 8 号石棺墓



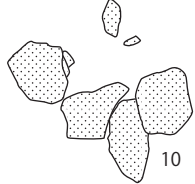
第 9 号石棺墓



第 6 号石棺墓



第 10 号石棺墓



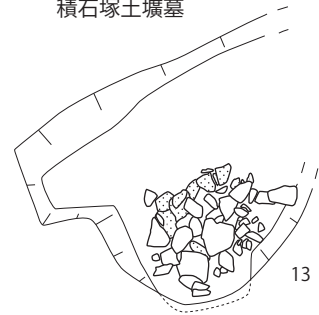
第 11 号石棺墓



第 12 号石棺墓



積石塚土墳墓



太師森遺跡

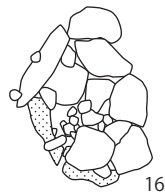
第 1 号石棺墓



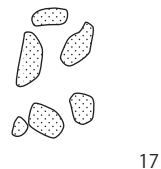
第 2 号石棺墓



第 3 号石棺墓



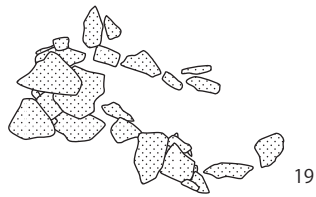
第 4 号石棺墓



第 5 号石棺墓



第 6 号石棺墓



第 7 号石棺墓

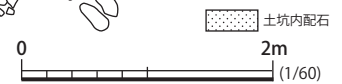
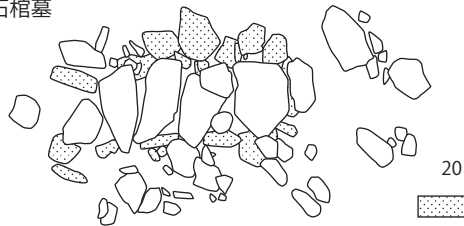
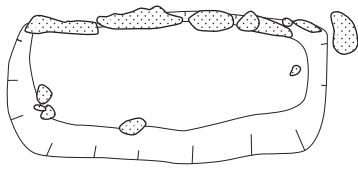


図 53 津軽の A 類 4 (図面上が北)

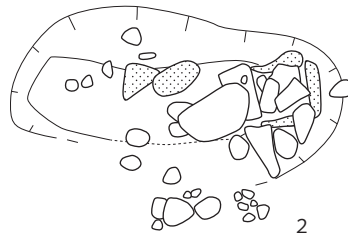
花巻遺跡

第1号組石棺墓



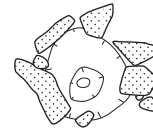
1

第2号組石棺墓



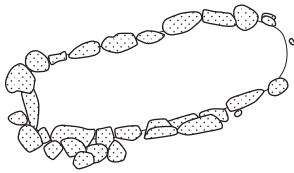
2

第3号組石棺墓



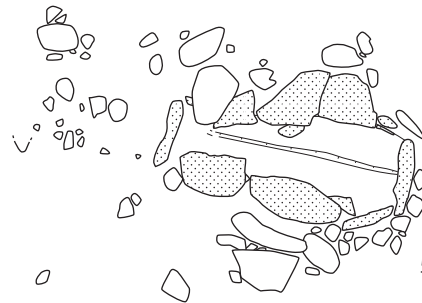
3

第4号組石棺墓



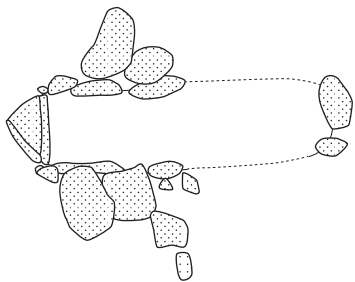
4

第5号組石棺墓



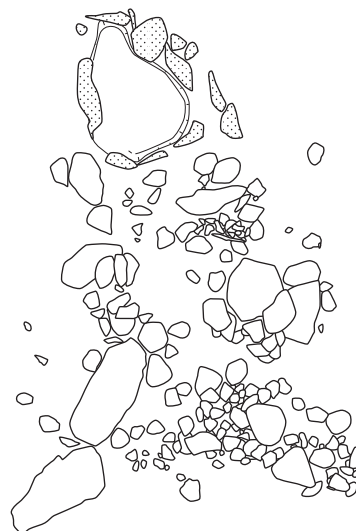
5

第6号組石棺墓



6

配石遺構



7

土坑内配石



図54 津軽のA類5 (図面上が北)

山野峠遺跡

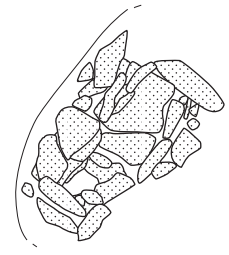
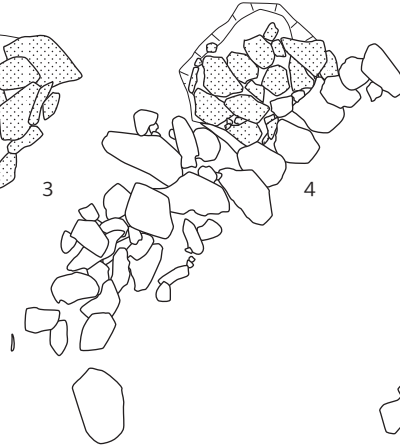
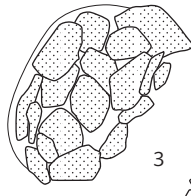
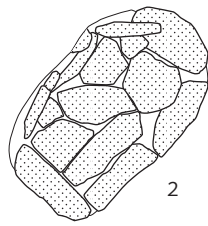
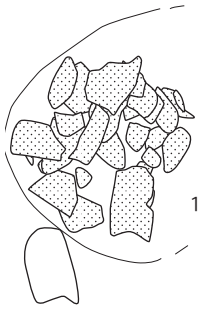
第1号石棺墓

第2号石棺墓

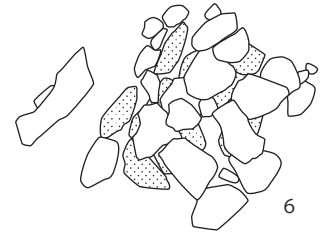
第3号石棺墓

第4・5号石棺墓

第6号石棺墓



第7号石棺墓



一ノ渡遺跡

P18・19組石

P19・20組石

P19組石

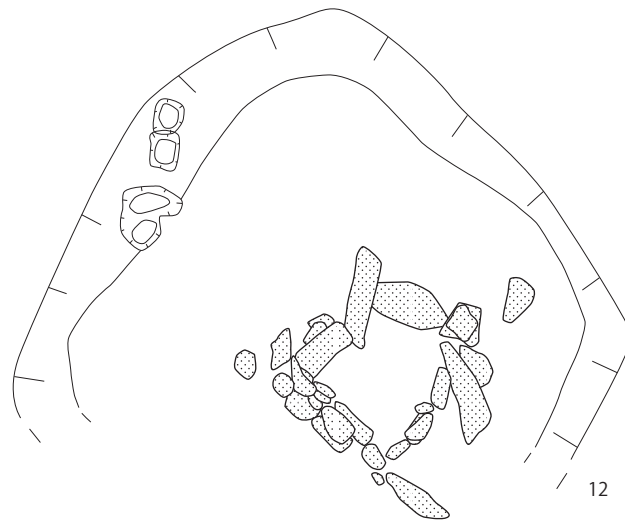
P20組石

Q18組石



高長根山遺跡

石棺墓



土坑内配石

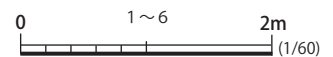
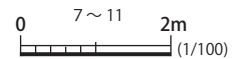


図55 津軽のA類6 (図面上が北)

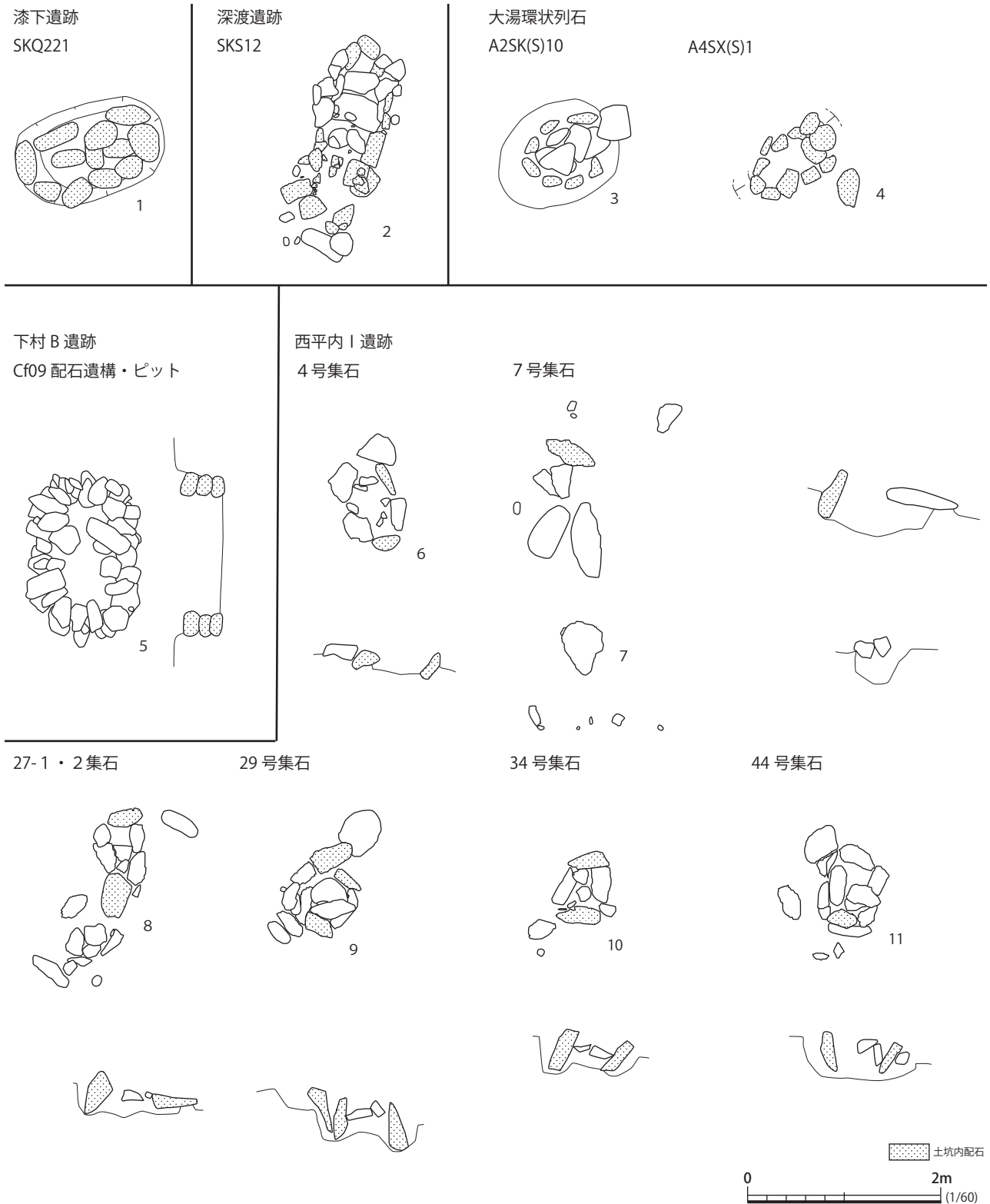


図56 津軽のA類7 (図面上が北)

～20, 図54-1～7, 図55-1～6)。II期以外には、一ノ渡遺跡(III期)・高長根山遺跡(IV期)で検出されている。一ノ渡遺跡の5例は、壁に沿って礫が積み上げられる(図55-7～11)。高長根山遺跡の事例は、II期にみられるものと類似する(図55-12)。また、

水上(2)遺跡石棺墓C群は、I期に遡る可能性もある(國木田・永瀬2024; 図51-6～10)。津軽以外の地域では、漆下遺跡(IV期)・深渡遺跡(中期～後期)・大湯環状列石(III期)・下村B遺跡(II期)・西平内I遺跡(III期)・弥栄平(4)遺跡(III期)・湯の里1遺

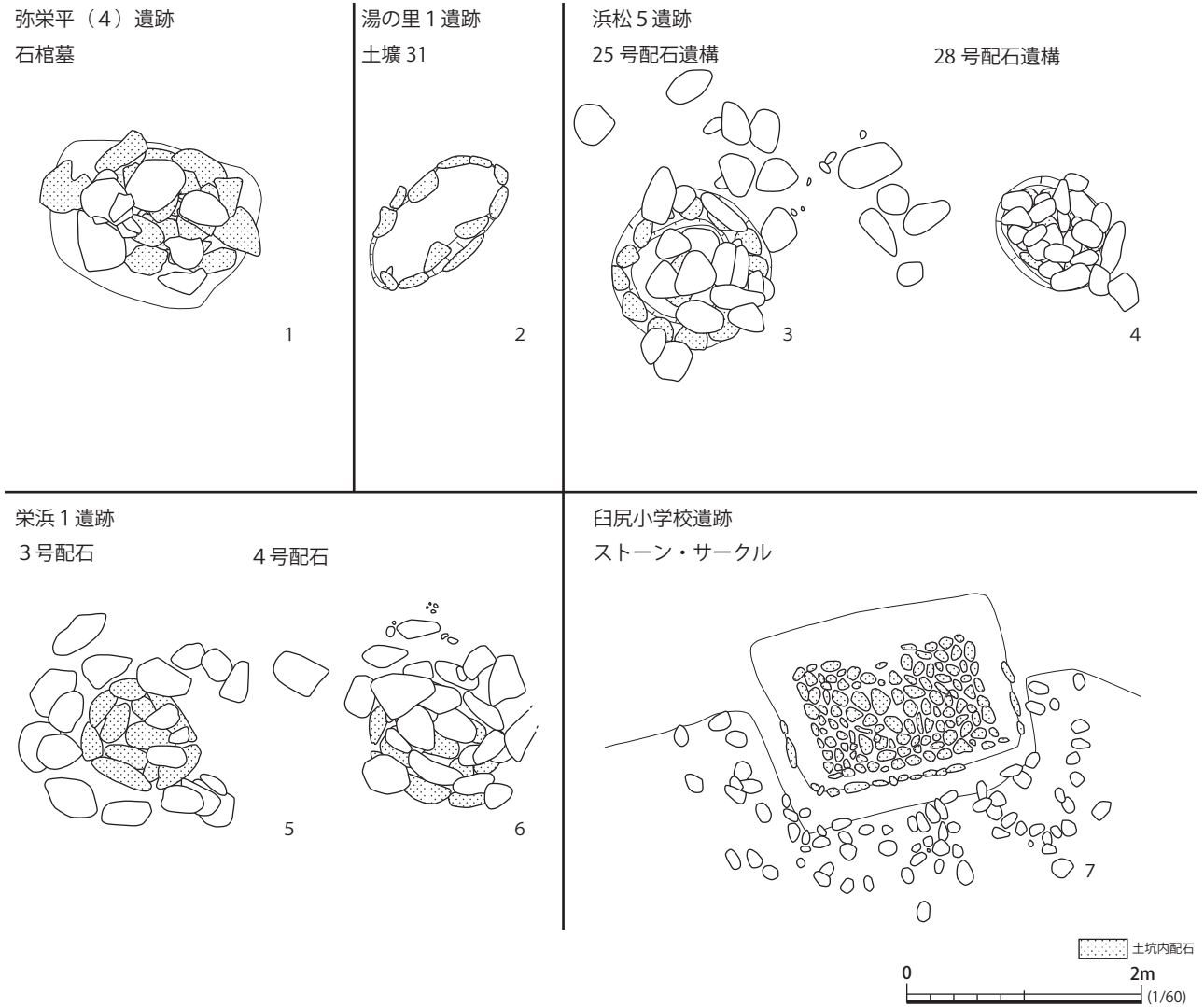


図57 津軽以外のA類1 (図面上が北)

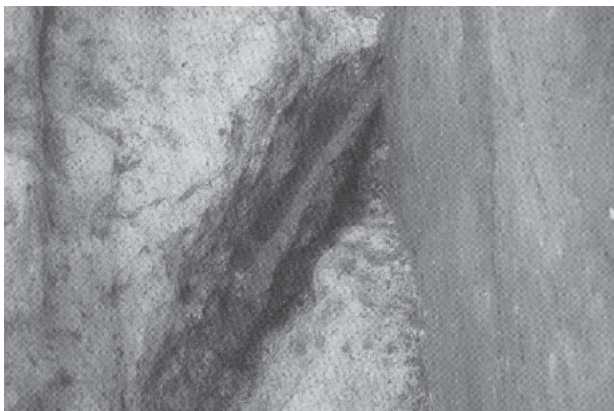


図58 津軽以外のA類2 (図面上が北)

跡(Ⅲ期)・浜松5遺跡・栄浜1遺跡(Ⅰ期)・白尻小学校遺跡(Ⅳ期)で検出されている(図56, 図57)。西平内Ⅰ遺跡以外は、1～2基のみの検出である。津軽のⅡ期の事例に類似するのは、深渡遺跡SQS12・弥栄平(4)遺跡石棺墓・湯の里1遺跡土壇31である

(図56-2, 図57-1・2)。他の事例は、津軽のⅡ期の石棺墓とは形態差がある。漆下遺跡SKQ221は、丸みを帯びた礫が土坑の壁・底に沿って配される(図56-1)。大湯環状列石A2SX(S)10・A4SX(S)1は、土坑の壁から離れた位置に礫が立てられている。いわゆる「日時計形」の配石に類似し、津軽の石棺墓とは関係が薄いと考えられる(図56-3・4)。下村B遺跡Cf9配石遺構・ピットは、土坑の壁に沿って礫が積み上げられている(図56-5)。壁石を同じ方法で配置した事例は、他には一ノ渡遺跡で見られる。石棺墓の典型例とは言えないものの、津軽の石棺墓と関係する事例と評価できる。土坑の壁に沿って礫が配されるという点では津軽の石棺墓に類似するためである。西平内Ⅰ遺跡では、A類が6基検出されている(図56-6～11)。津軽以外の地域でまとめて検出された唯一の事例である。西平内Ⅰ遺跡のA類は、扁平な礫が壁石に用いられるという点で、津軽の石棺墓に近い。しかし、壁石が巡りきらない事例が多い。浜松5

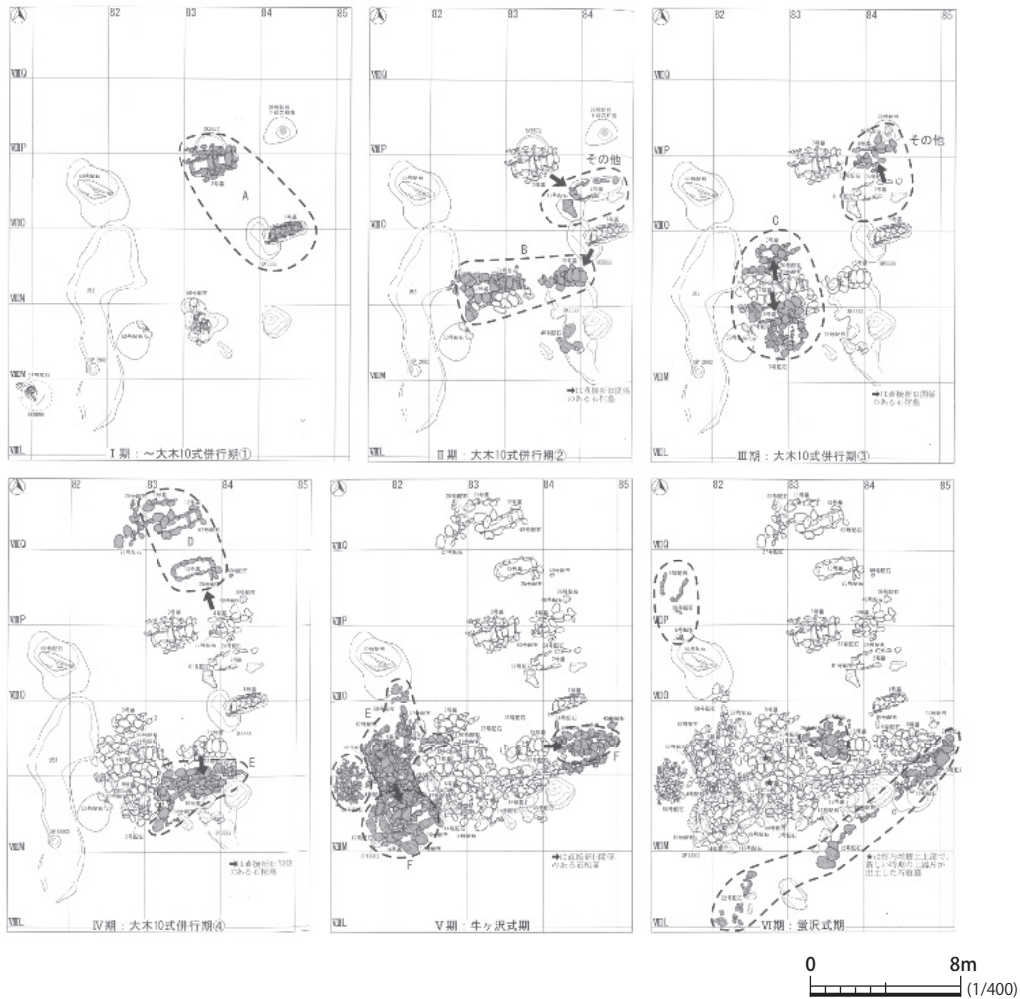


図59 三内丸山遺跡第13号環状配石墓における炭化材出土状況

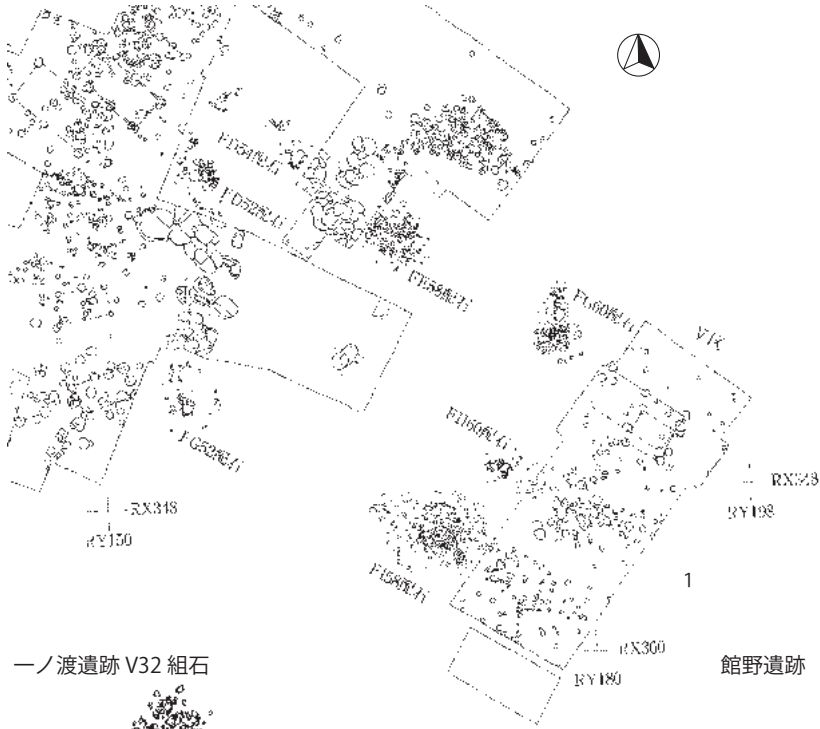
遺跡25号配石遺構・28号配石遺構は、土坑の壁に沿って角礫・丸みを帯びた礫が並べられる(図57-3・4)。大湯環状列石の「日時計形」の配石や、漆下遺跡SKQ221に類似する事例と評価できる。栄浜1遺跡3号配石・4号配石は、礫が花卉状に配される(図57-5・6)。渡辺清志の「立石型」に類似する事例である(渡辺1997a・b)。白尻小学校遺跡ストーン・サークルは、土坑の南壁の一部に礫が立てられている(図57-7)。IV期の道央における環状列石墓と類似し、時期も併行することから、道央の環状列石墓との関係が深いと考えられる。

他方、II期の津軽における石棺墓は、長軸が1~2方向に揃えられる・非日常的な遺物の出土という特徴もある。配石墓の長軸が1~2方向に揃う事例は、堀合I遺跡・山野峠遺跡・水上(2)遺跡などでみられ、ほとんどが石棺墓主体の墓域である(図15~19)。したがって、長軸が揃えられる傾向は、A類が採用された墓域でみられると評価できる。非日常的な遺物は、II期においては、津軽のA類で多く出土する。II期の

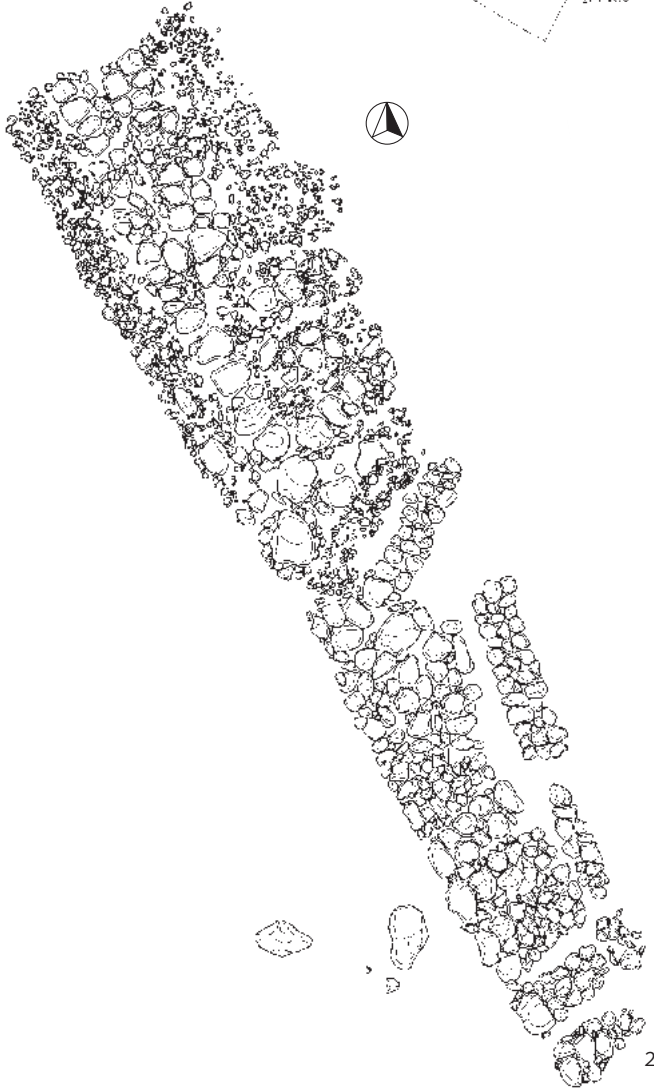
水上(2)遺跡では、土製品・石製品が出土している(図37-1~4, 図41-1~4)。土製品・石製品は、III期に出土例が大幅に増加する遺物である。したがって、水上(2)遺跡の配石墓の出土品は、III期に先行する傾向を持つと評価できる。

また、II期の津軽においては、岩木山麓と、南黒地域、青森平野で時期差がある。岩木山麓では、水上(2)遺跡で、大木10式併行期に遡る石棺墓が確実に存在し、一部は最花式期まで遡る可能性がある、また、餅ノ沢遺跡においては、1997~1998年度調査で確認された石棺墓も、大木10式併行期に位置づけられている。1997~1998年度調査においては、石棺墓の時期比定の根拠となる遺物は出土していないものの、1978、1984年実施の調査において、後期初頭の遺物が確認できない一方、一番古い遺物が最花式期の遺物であったことが記録されていたためである(大田原・野村編2000)。南黒地域においては、花巻遺跡において大木10式併行期の可能性がある石棺墓が検出されているが、それ以外の遺跡においては後期1~2

御所野遺跡 弧状配置の配石墓群



一ノ渡遺跡 V32 組石



館野遺跡 中央広場を囲う列石

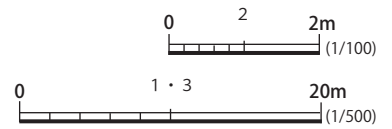
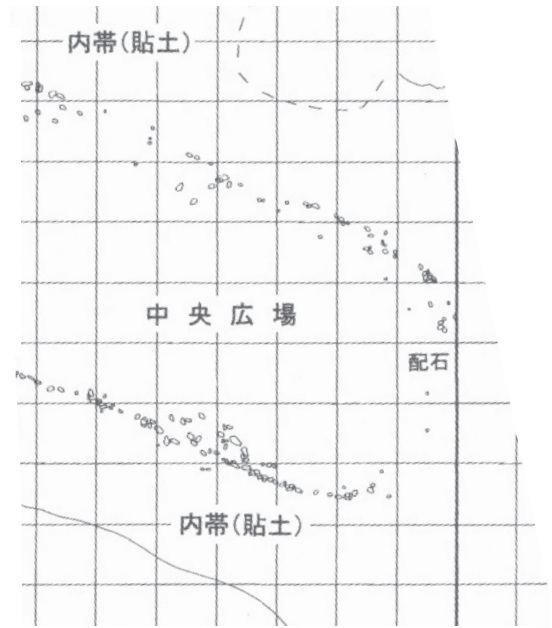


図60 水上(2)遺跡石棺墓A群の構築過程

期の事例が多い。青森平野においても、後期1～2期が主体的である可能性が高い。

以上の特徴を踏まえると、石棺墓は、津軽の在地の要素の影響を強く受け、最花式期～大木10式併行期に、岩木山麓で出現した可能性が高い。南黒地域には大木10式併行期以降に、青森平野には後期1～2期に広がった可能性がある。津軽以外の地域ではⅢ期以降の事例が多い。石棺墓の出現プロセスには、環状配石墓の影響を強くしている可能性がある。Ⅱ期までの配石墓は、津軽における環状配石墓（Ⅰ期）と、それに後続する石棺墓（Ⅱ期）が多くを占めるためである。また、環状配石墓と石棺墓は、長軸を揃えて配置される傾向・Ⅲ期以降に増加する非日常的な遺物が先行して出土することも共通する。石棺墓の棺様の配石は、「木柵墓」の壁材が石に転換されたことで成立した可能性が高い。「木柵墓」は、土坑の壁に沿って板状の木材が立てられた土坑墓である。三内丸山遺跡では、第11・13・17号環状配石墓で、土坑の壁に沿って周溝を持つ土坑が検出されている。さらに、第11・13号環状配石墓からは、周溝の直上から立った状態の炭化材が出土している（図58）。使用する材に違いはあるものの、「木柵墓」と石棺墓は、土坑の壁に沿って材を並べるといふ点で共通している。葛西勲は、三内丸山遺跡や富ノ沢（2）遺跡で検出された、壁に沿って周溝を持つ土坑墓が「木柵墓」である可能性を提示し、石棺墓の原型である可能性を指摘している（葛西2002）。

一方、南方からの影響も否定できない。水上（2）遺跡の遺構配置の変容が、南方でみられる遺構配置の変容と類似するためである（永瀬2017, 2025）。水上（2）遺跡においては、大木10式併行期から後期1期以降にかけて、遺構配置が中央広場を指向するものに変化し、石棺墓が中央広場に集中するようになる。ただし、これまでに石棺墓の母体があると指摘されてきた北上川中流域では（鈴木2010）、樺山遺跡（大木10式併行期）・湯舟沢Ⅱ遺跡（Ⅲ期）において石棺墓1基ずつ検出される程度で、一部Ⅰ期に遡る可能性がある水上（2）遺跡以前に、母体の可能性がある配石墓は管見に触れていない。そのため石棺墓は、南方の影響よりも、津軽の在地的要素の影響を強く受けている可能性が高い。

以上のことから、石棺墓は、南方の影響を受けている可能性はあるが、津軽における在地の要素である環状配石墓・「木柵墓」の影響を強く受けて成立した可能性が高い。津軽以外の地域において散発的にみられる石棺墓は、津軽からモザイク状に広がったと考えられる。

4-4. 考察③：環状列石との関連

配石墓と環状列石は、密接に関係していた可能性がある。環状列石が出現するⅢ期には、配石墓が大幅に増加し、配石墓が集中する遺跡は、環状列石を伴う遺跡が多いためである。配石墓が集中し、環状列石・大型配石遺構を伴う遺跡としては、太師森遺跡・西平内Ⅰ遺跡・大湯環状列石・館野遺跡がある。これらの遺跡では、配石墓群が環状列石に隣接する位置に配置されている。太師森遺跡では、環状列石の東側に石棺墓群が配置されている。石棺墓はⅡ期の遺構であるため、環状列石が石棺墓群の西側に意図的に配置された可能性がある。西平内Ⅰ遺跡では、配石墓群は環状列石の南側に位置し、いずれもⅢ期に造営されている（図20）。大湯の野中堂・万座環状列石は、それ自体が配石墓群である。周囲にも配石墓群があり、いずれもⅢ期に造営されている。また、小牧野遺跡・伊勢堂岱遺跡・鷲ノ木遺跡でも、環状列石の隣接地から配石墓が少数検出されている。

また、環状列石以外の大型配石遺構を伴う遺跡にも、配石墓が集中する遺跡がある。水上（2）遺跡石棺墓A群は、Ⅱ期の間、継続的に配石墓と配石遺構が造営される（図18, 図59）。同時期に構築された掘立柱環状集落の中央に位置することから、意図的に一体の大型配石遺構として構築された可能性がある。御所野遺跡（Ⅱ期）の配石遺構群は、配石墓の可能性が高いとともに、全体として弧状に配置される（図60-1）。先行研究で環状列石と認定されたことはないものの、大型配石遺構として捉えることができる。一ノ渡遺跡では、Ⅲ期に53基の配石墓と大型配石遺構（V32組石）が造営される（図60-2）。館野遺跡ではⅢ期の前半に土地造成・中央広場を囲う列石の造営が始まる（図60-3）。

また、環状列石・大型配石遺構を伴う遺跡の配石墓からは、土製品・石製品の出土が多いという特徴がある。先に挙げた、配石墓が集中し、かつ環状列石・大型配石遺構が検出されている遺跡のうち、大湯環状列石以外の遺跡では、土製品・石製品が出土する配石墓が、大型配石遺構がない遺跡に比べ多い。このような、土製品・石製品の出土例が、環状列石・大型配石遺構を伴う遺跡において多い傾向は、配石墓以外でも確認されている（児玉2001；佐賀2023）。以上のことから、環状列石・大型配石遺構と配石墓、土製品・石製品の動態は、相互に関係しながら変化している可能性が高い。小杉康は、環状列石を中心とする埋葬行為と、それに伴う行動意識を「葬墓祭制」と命名している（小杉2014）。氏の指摘する「葬墓祭制」とは、環状列石・大型配石遺構を中心に、配石墓・土製品・石製品が重

要な役割を果たし、成立する埋葬行為と、それに伴う行動意識であった可能性がある。

環状列石が衰退するⅣ期には、配石墓・土製品・石製品が減少する。このことも、それらと環状列石の三者が密接に関係していることを示す。

配石墓は、環状列石の成立にも大きな影響を与えた可能性が高い。Ⅱ期の配石墓群には、継続して造営されることで成立したものがあつたためである。水上(2)遺跡石棺墓A群は、Ⅱ期の間継続的に造営されて成立する(図59)。同じくⅡ期の御所野遺跡でも、弧状の配石墓群が出現する。詳細な構築過程は不明だが、Ⅱ期以前から占地が始まっていることから(菅野・久保田編2015)、継続的に造営された可能性がある。Ⅱ期に、水上(2)遺跡・御所野遺跡の事例のような、継続して造営されることで成立する配石墓群が存在することは、環状列石成立以前から、大規模遺構を造営できる組織が存在したこと可能性を示唆する。その組織は、配石墓群の造営を通して構成されたと考えられる。また、Ⅱ期に土製品・石製品が出土する配石墓は、水上(2)遺跡石棺墓A群でのみみられる。先に述べたように、土製品・石製品は、環状列石と密接に関わっている可能性が高い。したがって、水上(2)遺跡石棺墓A群では、環状列石出現に先立って、環状列石を中心とする埋葬行為と、それに伴う行動意識と同様のものが成立していた可能性がある。水上(2)遺跡石棺墓A群における埋葬行為と、それに伴う行動意識は、環状列石の出現とともに、津軽海峡域に広がったと考えられる。

5. 結論

津軽海峡域の配石墓は、Ⅰ期には、津軽を中心に、D2・D3類が主体となる。D2類は土坑直上配石が環状を呈する環状配石墓が多い。Ⅱ期の配石墓はA類(石棺墓)が主体であり、Ⅰ期に続き津軽で多い。Ⅲ期には配石墓が大幅に増加し、主体となる形態はC4類・D3類に変化する。配石墓からの遺物出土割合が高くなり、土製品・石製品等の非日常的な遺物が大きく増加する。Ⅳ期には配石墓が減少し、米代川流域・渡島半島南部以外ではほとんどみられなくなる。それと同時に土製品・石製品の出土がほとんどなくなる。渡島半島南部では代わって装身具類の出土が増加する。

環状配石墓は、これまでは三内丸山遺跡の環状配石墓の類例として、富ノ沢(2)遺跡・西張平遺跡の事例が挙げられる程度であった。しかし集成の結果、Ⅰ期の三内丸山遺跡を中心に、Ⅰ～Ⅲ期に渡って10遺跡から検出されており、土坑直上配石の大きさにより

2種類に分類できることがわかつた。2種類の環状配石墓は、構築に必要な労力に差があると考えられるため、性格(被葬者や埋葬行為など)が異なる可能性がある。

石棺墓の成立に関しては、これまでは南方からの影響を重視されてきた。しかし、津軽の一部の環状配石墓でみられる、土坑の壁に沿って板状の木材を立てて並べる構造と、石棺墓の土坑内配石が類似するため、在地の要素の影響が強い可能性が高い。また、土坑の長軸が揃う傾向が強いという特徴も類似する。

配石墓と環状列石は、これまでに指摘されたように、密接に関係している可能性が高い。配石墓が集中する遺跡の多くで、環状列石・大型配石遺構が伴うためである。また、環状列石・大型配石遺構が伴う遺跡では、土製品・石製品が出土する配石墓が多い。以上のような状況は、環状列石・大型配石遺構と配石墓、土製品・石製品が密接に関係することを示す。環状列石と配石墓の密接な関係とは、土製品・石製品とともに環状列石・大型配石遺構を中心とする埋葬行為と、それに伴う行動意識を構成することであつた可能性がある。また、配石墓は、環状列石の出現とも密接に関係する。Ⅱ期の水上(2)遺跡・御所野遺跡では、配石墓群が継続的に造営される。継続的に造営される配石墓群の存在は、環状列石出現以前の津軽海峡域において、環状列石のような大規模遺構を造営することができる組織がすでに存在したことを示す。また、環状列石・大規模配石遺構を中心とした埋葬行為と、それに伴う行動意識は、Ⅱ期に出現した可能性が高い。水上(2)遺跡で、Ⅲ期に津軽海峡域全体で増加する土製品・石製品が出現するためである。

ここまで述べたように、縄文時代中期後半から後期前半の津軽海峡域における配石墓・環状列石は、在地の要素をベースに、他地域の影響を受けつつ変容する。これは、阿部昭典の指摘するように、当該期の社会変動が気候冷涼化に伴うドラスティックな変化ではないことを示している可能性がある(阿部2008)。むしろ津軽海峡域における縄文時代中期後半から後期前半の社会変動は、在地の要素を活かした穏やかな変化であつたのではないか。ただし、こういった評価の妥当性については、今後配石墓・環状列石以外の要素についても分析を行い、検討する必要がある。

6. 今後の展望と課題

本稿では、津軽海峡域の配石墓について、形態・長軸方向・出土遺物の分析を行った¹³⁾。今後は、以下の三つの議論が必要である。一つ目は、非配石墓を含めた議論である。縄文時代中期から後期の津軽海峡域に

は、配石墓以外にも特徴的な埋葬形態が存在する。その代表は土器棺墓である。土器棺墓は、当該時期に再葬が行われていた可能性を示し、石棺墓は一次葬に用いられた可能性がある（葛西 2002 ほか）。土器棺墓との関連を分析することで、配石墓の葬制に迫ることができる。また、多くの遺跡では配石を伴わない土坑墓も検出されている。土坑墓と配石墓の基礎的分析を比較することで、本稿では明らかにできなかった、墓への配石の意義が明らかになる可能性がある。

二つ目は、他地域との関係についての議論である。特に、道央との関係は重要である。IV期の渡島半島南部の集団は、道央と交流していた可能性がある（坂口 2020）。坑底に小礫を敷きつめる配石墓が共通するためである。また、IV期に装身具類の服装が増加するという現象は、道央でも指摘されている（柳瀬 2005）。坂口や柳瀬の研究を発展的に継承し、道央の配石墓についても分析を深め、津軽海峡域と比較する必要がある。

三つ目は、4.2ka イベントとの関連である。縄文時代中期後半～後期前半における社会変動は、従来、寒冷化に伴って大規模集落が限界を迎えたことに起因すると考えられてきた。一方、世界的にみると、4.2ka イベントの様相には地域差がある可能性が高く（Nicholas et al. 2024）、寒冷化・乾燥化と社会変動の直接的な関係に懐疑的な見方もある（阿部 2025；工藤 2026；佐々木 2023）。したがって、津軽海峡域における当該期の考古学的現象を、フラットな目線から再検討する必要がある。

謝辞

本稿は、2024 年度に東京大学大学院人文社会系研究科に提出した修士論文に、令和 6 年度三内丸山遺跡特別研究「青森県域の縄文時代中期後半～後期前半の配石墓の研究：三内丸山遺跡の環状配石墓を中心に」の研究内容を統合して再構築したものである。執筆に際しては、指導教員の福田正宏先生をはじめ、考古学研究室の根岸洋先生、森先一貴先生、新井才二先生、常呂実習施設の太田圭先生のご指導を賜った。また、三内丸山遺跡特別研究の推進に際しては、岡田康博氏、小笠原雅行氏をはじめとする三内丸山遺跡センターの皆様から多大なご助力を得た。さらに、以下の個人・機関のご指導・ご協力を得た。末筆ではありますが、お礼申し上げます。

成田滋彦（青森県考古学会）、岡本洋、折登亮子、佐々木雅裕、茅野嘉雄、長谷川大旗（青森県埋蔵文化財調査センター）、児玉大成（青森市教育委員会）、大

田原潤（神奈川大学日本常民文化研究所）、榎本剛治（北秋田市観光文化スポーツ部）、岩田貴之、小原芽衣（北上市埋蔵文化財センター）、中村耕作、山下優介（国立歴史民俗博物館）、菅野紀子、畠山美友（御所野縄文博物館）、中澤寛将、加藤渉（三内丸山遺跡センター）、竹田聡（知内町郷土資料館）、井上雅孝（滝沢市教育委員会）、阿部昭典（千葉大学）、小久保竜也（東京大学人文社会系研究科）、鹿又喜隆、菅野智則（東北大学）、宮島龍志（新潟県埋蔵文化財センター）、永瀬史人（新潟県立歴史博物館）、福田裕二（函館市教育委員会）、田中美穂（八幡平市博物館）、三河茉依（平川市郷土資料館）、上條信彦（弘前大学）、本間宏（福島県文化財センター白河館）、算用子眞充（北海道教育庁）、國木田大、高瀬克範、夏木大吾（北海道大学）、倉橋直孝、福井淳一（北海道埋蔵文化財センター）、西村広経（松戸市教育委員会）、工藤司（三沢市教育委員会）、高橋毅（森町教育委員会）、菅野剛志（元六ヶ所村郷土館）、中門亮太（早稲田大学）

（敬称略、所属機関の 50 音順）

註

- 1) 葛西は当初、「山野峠式」を「山王峠式」としていたが（葛西編 1981）、のちに「山野峠式」に修正している（葛西 2002）。
- 2) 餅ノ沢遺跡では、1 号棺の脂肪酸分析とベンガラが付着した管玉状石製品の出土状況から、再葬がなされなかった可能性があるとは指摘されている（大田原・野村編 2000）。
- 3) 鈴木克彦は、「大木系文化」を縄文時代中期の「円筒文化（東北地方北部の文化）」と「大木文化（東北地方南部の文化）」が融合した文化、という意味で用いている。「大木系文化」は、十腰内文化のベースであると指摘している（鈴木 2010）。また、石棺墓の分布が津軽に偏っていることについては、津軽と馬淵川流域で部族集団が異なり、選択した墓制が異なったためとしている。
- 4) 鈴木克彦は、馬立式に後続する過渡的な型式として、薬師前式を設定している（鈴木 2001）。青森県史においては後期 2 期後半に配置されている（児玉・関根 2013）。しかし、後期 2 期に併行する可能性もあり（長谷川 2025）、位置づけが明確でないことから、本稿では薬師前式は用いない。
- 5) 本稿における墓の基準は、南北海道考古学情報交換会による基準を参考にした（南北海道考古学情報交換会 20 周年記念シンポジウム実行委員会編 1999）。また、土坑・下部施設に直上の配石が伴わない可能性が、これまでも指摘されている（阿部 2003；鈴木 2010；戸田 1971；渡辺 1991）。しかし、発掘時に時期差が明らかになっていない事例に関しては、報告書の情報から再検討を行うのは難しい。したがって本稿では、発掘時に時期差が明らかになっている事例を除き、土坑・下部施設と上部配石に時期差がある可能性には立ち入らないこととする。
- 6) 津軽海峡域における環状列石は、「多数の礫により構築され、ある程度の広さの遺構・遺物の検出が周囲に比べて疎な空間を囲う意図がみられる遺構」と定義できる（高屋

2024)。環状列石に配石墓が組み込まれている事例は、配石墓群としても捉えられる大湯環状列石（野中堂・万座環状列石）のほか、稲山遺跡（青森県青森市）などで検出されている。

- 7) 墓の副葬品という観点からは、配石下部土坑の底部付近出土の遺物のみを分析対象とするのが適当である。しかし、埋土や土坑直上配石周辺の出土遺物にも、墓と関係する遺物が含まれる可能性が高い。津軽海峡域の配石墓には、埋土に礫が集積されるものや、環状配石墓のような、土坑直上の広範囲に礫が配されるものがあるためである。本稿ではこれを考慮し、埋土や土坑直上配石周辺の出土遺物も配石墓出土遺物として扱うこととする。ただ、土坑直上の配石と下部土坑の時期差を考慮する必要があることから、配石墓出土遺物を副葬品としては扱わず、あくまで出土遺物として分析を行う。
- 8) 完形土器について、埋葬行為における役割が推定できるものは記載した。完形土器の出土パターンと埋葬行為における役割の関係については、中村耕作による分類に基づく（中村2013）。
- 9) 本稿における非日常的な遺物は、用途・機能の不明瞭な遺物を指し、小林達雄の「第二の道具」にあたる（小林1997）。縄文時代の石器の用途・機能に基づく分類には、消極的な意見もある（大工原・長田・建石編2020）。本稿では、遺物の具体的な用途には立ち入らず、小林の分類を便宜的に用いる。
- 10) これまでキノコ形土製品とされてきたものについて、キノコを模したとすることに慎重な意見もある（成田2016）。本稿では、出土遺物の具体的な機能・用途には踏み込まないため、形がキノコに類似する土製品を便宜的にキノコ形土製品と呼称する。
- 11) 本稿では、異形石器を非日常的な遺物として扱う。異形石器は実際には実用的な石器であった可能性もあるが（大工原・長田・建石編2020）、津軽海峡域では非日常的な用途である可能性が高いためである。非日常的な異形石器の代表として、三脚石器が挙げられる（榎本2012）。
- 12) 「刀剣形石製品」は、後藤信祐の定義に基づき、小型石棒・石刀・石剣を総称する（後藤2007）。
- 13) 本稿では、配石墓の大きさに関する分析を行わなかった。集成の時点で、有意な差が見いだせず、優先度が低いと判断したためである。大きさに関する定量的な分析については今後の課題としたい。

引用文献

- 阿部昭典 2008 『縄文時代の社会変動論』アム・プロモーション
- 阿部昭典 2021a 「環状列石の出現に関する研究（3）」『縄文時代』32：23-52
- 阿部昭典 2021b 「東北地方北部の環状列石成立について」『岩手県考古学会第52回研究大会資料集：環状列石の誕生』岩手県考古学会、1-12
- 阿部昭典 2024 「聖域の結界表象としての環状列石」浜田弘明ほか編『日本石造文化事典』朝倉書店、180-186
- 阿部昭典 2025 「縄文時代における人口変動研究序論」『千葉大学人文研究』54：143-161
- 阿部義平 1968 「配石墓の成立」『考古学雑誌』54（1）：77-

- 96
- 阿部正巳 1919 「石狩圏の環状石籬」『人類学雑誌』33（1）：1-4
- 阿部正巳 1920 「北海道に於けるツングース種族の遺蹟遺物」『人類学雑誌』34（2）：43-50
- 阿部友寿 2003 「縄文後晩期における遺構更新と「記憶」：後晩期遺構と配石の重複関係について」『神奈川考古』39：93-130
- 上野佳也 1984 「配石遺構についての一考察」『東京大学文学部考古学研究室研究紀要』3：27-40
- 江坂輝彌 1967 「青森市久栗坂山野峠遺跡調査略報」『月刊考古学ジャーナル』13：12-13
- 江坂輝彌 1971 「縄文時代の配石遺構について」『北奥古代文化』3：9-13
- 江坂輝彌 1985 「配石遺構とは」『月刊考古学ジャーナル』254：7-10
- 榎本剛治 2012 「三脚石器」『季刊考古学』119：25-27
- 大泰司統 2025 「北海道の十腰内Ⅰ式」成田滋彦編『十腰内Ⅰ式シンポジウム 資料集』十腰内文化研究会、75-94
- 大山 柏 1941 「史前巨石建造物」『史前学雑誌』13（1・2）：1-78
- 岡田康博 2014 『三内丸山遺跡』同成社
- 奥山 潤 1954 「縄文晩期の組石棺：秋田県北秋田郡早口町矢石館遺蹟」『考古学雑誌』40（2）：35-52
- 小保内裕之 2008 「陸奥大木系土器（榎林式・最花式・大木10式併行土器）」小林達夫編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション、368-375
- 笠井新也 1918 「陸奥國発見の石器時代の墳墓に就いて」『考古学雑誌』9（2）：1-21
- 葛西 励 1986 「青森県における縄文時代の組石棺墓」『北奥古代文化』17：39-47
- 葛西 励 2002 『再葬土器棺墓の研究：縄文時代の洗骨墓』「再葬土器棺墓の研究」刊行会
- 鹿又喜隆・青木飛楠子・永瀬史人・澤田純明・佐伯史子・児玉大成 2024 「青森県山野峠遺跡出土の土器棺等の再検討」『Bulletin of the Tohoku University Museum』23：35-52
- 菅野修広 2004 「北海道噴火湾沿岸における縄文時代の生業と集落の関係について」『北海道考古学』40：157-165
- 喜田貞吉 1934 「青森懸出土洗骨入土器」『歴史地理』63（6）：84-88
- 工藤雄一郎 2026 「4.2 ka イベントは縄文時代中期の人々の活動に影響を与えたか：年代学的視点からの再検討」『植生史研究』34（1-2）：23-31
- 國木田 大・吉田邦夫・辻 誠一郎 2008 「東北地方北部におけるトチノキ利用の変遷」『環境文化史研究』1：7-26
- 國木田 大・吉田邦夫 2011 「三内丸山遺跡第32次発掘調査資料（環状配石墓・盛土状遺構）の¹⁴C年代測定」青森県教育庁文化財保護課編『特別史跡三内丸山遺跡年報』14：27-34
- 熊谷仁志 2008 「北海道地方」小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編『縄文時代の考古学2：歴史のものさし』同成社、123-144
- 小杉 康 1995 「縄文時代後半期における大規模配石記念物の成立：「葬墓祭制」の構造と機能」『駿台史学』93：101-149

- 小杉 康 2014 「葬墓祭祀と大規模記念物」泉 拓良・今村啓爾編『講座日本の考古学4 縄文時代 下』青木書店, 439-483
- 児玉大成 2001 「縄文時代後期前半の岩板類と大型配石遺構」『渡島半島の考古学』79-108頁、南北海道考古学情報交換会20周年記念論集作成実行委員会
- 児玉大成 2015 「北東北の環状列石」安田喜憲・阿部千春編『津軽海峡圏の縄文文化』雄山閣, 145-164
- 児玉大成・関根達人 2013 「土器の編年」青森県史編さん考古部会編『青森県史 資料編 考古2』: 8-21, 青森県
- 小林達雄 1997 「第一の道具・第二の道具」佐原 真編『縄文と弥生』クバプロ, 80-83
- 小林 克 2007 「環状列石（東北・北海道地方）」小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編『縄文時代の考古学11: 心と信仰』同成社, 145-157
- 駒井和愛 1952 「日本における巨石記念物 續々々」『考古学雑誌』38 (5・6): 22-34
- 駒井和愛 1959 『音江: 北海道の環状列石の研究』慶友社
- 後藤信祐 2007 「刀剣形石製品」小杉 康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編『縄文時代の考古学11: 心と信仰』同成社, 96-100
- 斎藤 忠 1971 「大湯環状列石と日本の縄文時代の類似遺跡について」『北奥古代文化』3: 2-7
- 斎藤 忠 1985 「配石遺構: 特に環状列石について」『月刊考古学ジャーナル』No.254: 2-6
- 坂口 隆 2020 『周堤墓の出現に関する考古学的研究』平成29年度～令和元年度 科学研究費助成事業 (基盤研究 (C)) 研究成果報告書 課題番号17K03201
- 佐賀桃子 2023 「儀器から見た環状列石」阿部昭典編『考古調査ハンドブック24: 環状列石』ニュー・サイエンス社, 284-293
- 佐々木藤雄 2002 「環状列石と縄文式階層社会」安斎正人編『縄文社会論 (下)』同成社, 3-50
- 佐々木藤雄 2007 「海峡を渡った環状列石: 重環状構造をもつ「葬祭型環状列石」の系譜と環状周堤墓」安斎正人・高橋龍三郎編『縄文時代の社会考古学』同成社, 163-187
- 佐々木由香 2023 「環状列石が造営された時期の環境と植物利用」阿部昭典編『考古調査ハンドブック24: 環状列石』ニュー・サイエンス社, 260-271
- 鈴木克彦 2000 「東北地方北半部の中期・後期区分に関する編年学的研究 (上): 大曲 I 式などの中期末葉の土器群」『縄文時代』11: 41-68
- 鈴木克彦 2001 『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 鈴木克彦 2008 「青森県の縄文時代配石遺構集成抄」『青森県埋蔵文化財調査センター研究紀要』13: 15-26
- 鈴木克彦 2010 「東北地方北部の縄文集落の葬墓制」雄山閣編集部編『縄文集落の多様性II 葬墓制』雄山閣, 85-124
- 鈴木保彦 1980 「関東・中部地方を中心とする配石墓の研究」『神奈川考古』: 91-63
- 鈴木保彦 1986 「続・配石墓の研究」『神奈川考古』22: 103-158
- 鈴木保彦 2015 「配石墓研究 追録と再考 (1): その分布と形態」『縄文時代』26: 1-30
- 鈴木保彦 2016 「配石墓研究 追録と再考 (2): 形態別事例・葬法・出土遺物・配石墓と縄文集落」『縄文時代』27: 1-34
- 大工原 豊 2017 「関東地方北部における配石墓 (石棺墓) の出現と展開」『月刊考古学ジャーナル』702: 13-17
- 大工原 豊 2022 「群馬県域における配石墓 (石棺墓) の形態と変遷」『利根川』44: 57-90
- 大工原 豊・長田友也・建石 徹編 2020 『縄文石器提要』ニューサイエンス社
- 大工原 豊・林 克彦 1995 「配石墓と環状列石: 群馬県天神原遺跡の事例を中心として」『信濃』47 (4): 32-54
- 滝本 学 2005 「青森県における縄文時代の組石石棺墓について: 太師森遺跡を中心として」『北奥の考古学』葛西励先生還暦記念論文集刊行会, 43-62
- 谷口康浩 2017 『縄文時代の社会複雑化と儀礼祭祀』同成社
- 谷口康浩 2019 「縄文時代における葬墓制の変遷と社会複雑化」縄文時代文化研究会編『縄文時代葬墓制研究の現段階』縄文時代文化研究会, 109-116
- 高屋昂平 2024 「青森県域における縄文時代後期前半の環状列石の展開」『東京大学考古学研究室研究紀要』37: 65-90
- 千葉 毅・高山理美 2014 「東北地方北部における縄文時代後期初頭から前葉土器編年研究の現状と課題: 青森県安部遺跡出土土器の理解のために」『縄文時代』25: 91-114
- 千葉 豊 1993 「配石墓小考 (上): 辰野町樋口五反田遺跡の配石址を中心に」『伊那路』37 (11): 11-16
- 千葉 豊 1993 「配石墓小考 (下): 辰野町樋口五反田遺跡の配石址を中心に」『伊那路』37 (12): 1-9
- 塚原正典 1987 『考古学ライブラリー49: 配石遺構』ニュー・サイエンス社
- 戸田哲也 1971 「縄文時代における宗教意識について: 田端環状積石遺構を中心として」『下総考古学』4: 8-17
- 永瀬史人 2017 「東北地方北部における配石墓の展開」『月刊考古学ジャーナル』702: 7-11
- 永瀬史人 2025 「円筒土器文化期における集落形態と変遷に関する比較考古学的研究」『特別史跡三内丸山遺跡研究紀要』6: 52-75
- 中村耕作 2013 『縄文土器の儀礼利用と象徴操作』アム・プロモーション
- 成田滋彦 2007 「十腰内文化概説」三浦圭介氏華甲記念考古論集刊行委員会編『三浦圭介氏華甲記念考古論集』三浦圭介氏華甲記念考古論集刊行委員会, 27-54
- 成田滋彦 2016 「縄文時代の土製品・石製品」上條信彦編『一般社団法人日本考古学協会2016年度弘前大会第I分科会「津軽海峡圏の縄文文化」研究報告資料集』日本考古学協会2016年度弘前大会実行委員会, 245-250
- 成田滋彦 2019 「十腰内文化: 石と呪術の世界」『三県合同シンポジウム—十腰内文化とは—』青森県考古学会・秋田県考古学会・岩手県考古学会・弘前市教育委員会, 53-80
- 西村広経 2018 「十腰内II式土器の再検討」『東京大学考古学研究室研究紀要』31: 17-46
- 西村広経 2021 「北海道島における縄文時代後期中葉の土器編年」『古代』148: 29-59
- 長谷川大旗 2025 「小牧野3式と十腰内I式第1段階の構造とその変遷」成田滋彦編『十腰内I式シンポジウム 資料集』十腰内文化研究会, 95-114
- 長谷部言人 1919 「陸前國細浦上の山貝塚の環状列石」『人類学雑誌』34 (5): 159-161

- 福田友之 2014 『津軽海峡域の先史文化研究』六一書房
- 福田友之 2015 「ヒスイの流通にみる津軽海峡圏の交流」安田喜憲・阿部千春編『津軽海峡圏の縄文文化』雄山閣、98-109
- 福田友之 2016 「広域分布の装身具」上條信彦編『一般社団法人日本考古学協会2016年度弘前大会第I分科会「津軽海峡圏の縄文文化」研究報告資料集』日本考古学協会2016年度弘前大会実行委員会、211-222
- 福田裕二 1999 「渡島半島における縄文時代の墓制について」南北海道考古学情報交換会20周年記念シンポジウム実行委員会編『第20回記念シンポジウム発表要旨：北日本における縄文時代の墓制』南北海道考古学情報交換会20周年記念シンポジウム実行委員会、31-35
- 藤原秀樹 2014 「北海道における縄文墓制の沿革：環状列石以前」日本考古学会2014年度伊達大会実行委員会編『日本考古学会2014年度伊達大会研究発表資料集』日本考古学会2014年度伊達大会実行委員会、453-512
- 藤原秀樹 2019 「北海道地方における葬墓制研究の現状」縄文時代文化研究会編『縄文時代葬墓制研究の現段階』縄文時代文化研究会、5-12
- 水野正好 1968 「環状配石墓群の意味するもの」『信濃』20(4)：23-31
- 南北海道考古学情報交換会20周年記念シンポジウム実行委員会編 1999 『北日本における縄文時代の墓制 資料集』南北海道考古学情報交換会
- 三宅徹也・川口 潤・小笠原雅行・長尾正義 2017 「土器の変遷」青森県史編さん考古部会編『青森県史 資料編 考古1』青森県、50-71
- 森 幸彦 2008 「大木9・10式土器」小林達夫編『総覧 縄文土器』アム・プロモーション、360-367
- 柳瀬由佳 2005 「北海道中部美沢川流域遺跡群出土の縄文ヒスイ玉集成」『玉文化』21：18-145
- 矢吹俊男 1988 「配石遺構」『北海道考古学』24：65-73
- 渡瀬莊三郎 1886 「北海道後志國に存する環状石籬の遺跡」『人類学会報告』2：30-33
- 渡辺清志 1991 「墓標考・配石墓について」『遡航』9：65-98
- 渡辺清志 1997 「東北地方北半における配石墓の成立と展開(上)」『古代文化』49(3)：41-53
- 渡辺清志 1997 「東北地方北半における配石墓の成立と展開(下)」『古代文化』49(4)：25-34
- McKay, N. P., D. S. Kaufman, S. H. Arcusa, H. R. Kolus, D. C. Edge, M. P. Erb, C. L. Hancock, C. C. Routson et al. 2024 The 4.2 ka event is not remarkable in the context of Holocene climate variability. *Nature Communications* 15: 1-12.
- 発掘調査報告書**
- 北海道**
- 阿部千春・山口 敬編 1992 『八木B遺跡』南茅部町文化財調査団
- 荒木恵吾編 1973 『北海道南茅部町の先史』南茅部町教育委員会
- 大島直行編 1979 『知内川中流域の縄文時代遺跡』知内町教育委員会
- 大森司 統・中山昭大・村田 大・影浦 覚・袖岡淳子・熊谷 仁志・鎌田 望編 2004 『森町 濁川左岸遺跡：A地区』北海道埋蔵文化財センター調査報告書208
- 大沼忠春編 1977 『元和(統)』乙部町教育委員会
- 影浦 覚・柳瀬由佳編 2005 『森町 上台1遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書217
- 鎌田 望・新家水奈・立川トマス・村田 大・影浦 覚・柳瀬由佳編 2007 『森町 濁川左岸遺跡(3)：C～E地区』北海道埋蔵文化財センター調査報告書246
- 小柳リラコ編 2004 『豊浜遺跡』福島町教育委員会
- 佐川俊一・中山昭大・富永勝也・福井淳一・山中文雄・立川トマス編 2012 『北斗市 館野遺跡(2)』北海道埋蔵文化財センター調査報告書282
- 佐藤忠雄編 1981 『奥尻島東風泊遺跡』函館土木現業所・奥尻町教育委員会
- 柴田信一・三浦孝一編 1991 『浜松2遺跡』八雲町教育委員会
- 高杉博章・高橋 毅・加藤孝幸編 2008 『鷲ノ木遺跡』茅部郡森町文化財調査報告書15
- 種市幸生・菊池慈人・藤井 浩・坂本尚史・福井淳一編 2003 『八雲町 野田生1遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書183
- 種市幸生・菊池慈人・藤井 浩・新家水奈・坂本尚史・福井淳一・柳瀬由佳編 2004 『森町 倉知川右岸遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書196
- 千代 肇編 1971 『函館市日吉遺跡発掘調査報告書』市立函館博物館
- 坪井睦美・輪島慎二編 2006 『函館市 白尻小学校遺跡』函館市教育委員会 特定非営利法人函館市埋蔵文化財事業団発掘調査報告書1
- 藤田 登・荻野幸男・八重柏誠・山田あや子・渡辺明美・加藤孝幸・高橋 理編 2006 『鷲ノ木4遺跡』茅部郡森町文化財調査報告書
- 前田正憲編 2005 『東山遺跡』松前町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一編 1983 『栄浜』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一編 1987 『栄浜1遺跡』八雲町教育委員会
- 三浦孝一・柴田信一・山田悟郎編 1995 『浜松5遺跡』八雲町教育委員会
- 皆川洋一・佐川俊一・立川トマス・佐藤 剛編 2014 『北斗市 館野2遺跡C地区』北海道埋蔵文化財センター調査報告書303
- 皆川洋一・鈴木宏行・坂本尚史・谷島由貴編 2018 『木古内町 幸連3遺跡』北海道埋蔵文化財センター調査報告書343
- 青森県**
- 市川金丸・北林八洲晴・岡田康博・相馬信吉編 1987 『弥栄平(4)(5)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書106
- 一町田 工・畠山 昇編 1984 『一ノ渡遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書79
- 今井二三男編 1981 『高長根山遺跡』弘前市教育委員会
- 大田原 潤・野村信生編 2000 『餅ノ沢遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書278
- 小笠原雅行・浅田智晴・永嶋 豊・齋藤慶史編 2010 『三内丸山遺跡36』青森県埋蔵文化財調査報告書494

岡田康博・中村美杉・小笠原雅行・齋藤 岳・茅野嘉雄・永嶋豊・岩田安之・佐藤真弓・斉藤慶史・濱松優介・藤原有希・高橋 哲・折登亮子・神昌樹編 2017 『三内丸山遺跡44 青森県埋蔵文化財調査報告書588』

小田桐勝昭ほか編 2002 『平成13年度 浪岡町文化財紀要Ⅱ』浪岡町文化財紀要2

葛西 励編 1974 『青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書：甕棺墓・石棺墓・土壙墓』平賀町教育委員会

葛西 励編 1981 『堀合Ⅰ遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書9

葛西 励編 1983 『山野峠遺跡』青森市の埋蔵文化財11

北林八洲晴・成田滋彦・畠山 昇・坂本洋一・岡田康博・長崎勝巳・三浦孝仁・中嶋友文・成田 悟・羽柴直人編 1992 『富ノ沢(1)・(2)遺跡Ⅴ』青森県埋蔵文化財調査報告書143

児玉大成編 2006 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅸ』青森市埋蔵文化財調査報告書85

児玉大成・姥名純編 2002 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅶ』青森市埋蔵文化財調査報告書60

齋藤 岳・秦光次郎・佐々木雅裕編 2003 『三内丸山遺跡22』青森県埋蔵文化財調査報告書362

佐々木雅裕・田中珠美編 2004 『三内丸山遺跡23』青森県埋蔵文化財調査報告書381

白鳥文雄編 1995 『槻ノ木(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書169

神 康夫編 2002 『餅ノ沢遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書333

鈴木克彦編 1986 『花巻遺跡』黒石市埋蔵文化財調査報告4

鈴木克彦編 1988 『花巻遺跡』石市埋蔵文化財調査報告7

瀧澤幸長編 1998 『館町Ⅱ遺跡』青森県三戸郡倉石村埋蔵文化財調査報告書4

滝本 学編 2005 『太師森遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書37

中嶋友文・岩田安之・工藤大編 2006 『西張平遺跡：遺構編』青森県埋蔵文化財調査報告書416

中嶋友文・佐藤純子・神 昌樹・菅原優太編 2009 『砂子瀬遺跡・水上(3)遺跡・水上(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書466

永嶋 豊・岩田安之・藤原有希・濱松優介・折登亮子編 2016 『三内丸山遺跡43』青森県埋蔵文化財調査報告書570

成田滋彦・浅田智晴・斉藤慶史編 2010 『扇田(2)遺跡 扇田(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書492

秦 光次郎・茅野嘉雄・荒谷伸郎・加藤隆則編 2017 『水上(2)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書575

三浦圭介・沢田庄一郎・杉山 武・成田滋彦・畠山 昇・新戸部隆編 1977 『近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ) 三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書』青森県埋蔵文化財調査報告書33

村木 淳編 2008 『風張(1)遺跡Ⅵ』八戸市埋蔵文化財報告書119

山城日登美編 2004 『糠森遺跡』佐井村教育委員会

岩手県

菅野紀子・久保田滋子編 2015 『御所野遺跡Ⅴ』一戸町文化財調査報告書70

斎藤 實編 1995 『田代Ⅳ・田代Ⅵ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書223

嶋 千秋・四井謙吉・鈴木優子・高橋与右エ門・遠藤勝博・吉田努・昆野 靖編 1983 『上村遺跡・下村A遺跡・下村B遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書56

高木 晃・金子昭彦・米田 寛・濱田 宏・熊谷常正編 2024 『岩手における環状列石関連遺跡調査報告書』岩手県立博物館調査研究報告書37

高田和徳編 1993 『御所野遺跡Ⅰ一戸町文化財調査報告書32』

高田和徳・中村明央編 2006 『御所野遺跡Ⅲ』一戸町文化財調査報告書53

中川重紀・工藤徹編 2001 『米沢遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書376

濱田 宏・宮内勝巳・藤田崇志・川村 均編 2017 『西平内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財調査報告書4

秋田県

秋元信夫・佐藤 樹・藤井富久子・馬淵正弘・藤井安正・三辻利一・赤沼英男・成田典彦編 1988 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書4』鹿角市文化財調査資料33

斎藤 忠・三宅敏之・後藤守一・八幡一郎・駒井和愛・黒板昌夫編 1953 『大湯町環状列石』埋蔵文化財調査報告2

菅野美香子編 2011 『漆下遺跡』秋田県文化財調査報告書464

菅野美香子・栄 一郎・菅原一彦・石川和良編 2005 『日廻岱B遺跡』秋田県文化財調査報告書394

杉淵 馨編 1999 『深渡遺跡』秋田県文化財調査報告書286

藤井安正編 1984 『天戸森遺跡』鹿角市文化財調査資料26

藤井安正編 2005 『特別史跡大湯環状列石(1)』鹿角市文化財調査資料77

藤井安正・赤坂朋美・工藤 海編 2017 『特別史跡 大湯環状列石 総括報告書』鹿角市文化財調査資料110

藤井安正・鎌田健一・秋元信夫・藤井富久子・佐藤 樹・中野益男・中岡利泰・成田典彦・三ヶ田俊明編 1986 『大湯環状列石周辺遺跡発掘調査報告書2』鹿角市文化財調査資料31

山本起嗣・菅原一彦・宇田川浩一・山田祐子・徳 辰實・山田徳道・小林 克編 2006 『森吉家ノ前A遺跡』秋田県文化財調査報告書409

長野県

平林喜夫編 1957 『上原』長野県教育委員会

*配石墓の集成に使用した発掘調査報告書・論文は省略した。

図版出典

図1・2：国土地理院地図をもとに筆者作成

図3-A1：(秦ほか編2017)、A2：(荒木編1973)、A3：(滝本編2005)、A4：(葛西編1981)、B1：(菅野編2011)、B2：(三浦・柴田・山田編1995)、B3：(三浦・柴田編1983)、B4：(影浦・柳瀬編2005)、C1：(藤田ほか編2006)、C2：(藤井編1984)、C3：(小田桐ほか編2002)、C4：(中川・工藤編2001)、D1：(高田編1993)、D2：(岡田ほか編2017)、D3：(菅野ほか編2005)をいずれも再トレース

図4：筆者作成

図5・6：国土地理院地図を用いて筆者作成

- 図7：(嶋ほか編1983)を再トレース
 図8：(児玉編2006)を再トレース
 図9：(三浦・柴田・山田編1995)を再トレース
 図10-1・2：(前田編2005)を再トレース
 図11-1：(荒木編1973)を再トレース、2：(坪井・輪島編2006)を再トレース
 図12-1：(柴田・三浦編1991)を再トレース、2～4：(阿部・山口編1992)を再トレース
 図13：(奥山1954)を再トレース
 図14～16：筆者作成
 図17：(岡田ほか編2017)
 図18：(秦ほか編2017)に加筆
 図19-1：(葛西編1981)に加筆、2：(大田原・野村編2000)に加筆
 図20：(高木ほか編2024)に加筆
 図21：(三浦・柴田・山田編1995)に加筆
 図22-1：(中嶋・岩田・工藤2006)を再トレース、2：(皆川編2014)を再トレース、3：(葛西編1974)を再トレース、4：(鹿又ほか2024)を改変
 図23-1・2：(一丁田・畠山編1984)を再トレース、3：(藤井ほか編1986)を再トレース
 図24-1・2：(瀧澤編1998)を再トレース
 図25-1：(小柳編2004)、2：(三浦・柴田・山田編1995)を再トレース、3：(大泰司ほか2004)を再トレース、4：(佐藤編1981)、5：(三浦・柴田・山田編1995)を再トレース
 図26-1～5：(葛西編1974)を改変、6：(笠井1918)を再トレース、7：(大沼編1977)を改変
 図27-1：(中嶋ほか編2009)、2：(小田桐ほか編2002)、3～7：(秦ほか編2017)、8：筆者撮影、9・10：(葛西編1981)、11～13：(葛西編1974)、14：(一丁田・畠山編1984)、15～18：(齋藤・秦・佐々木編2003)、19～32：(藤井ほか編1986)、33：(秋元ほか編1988)、34：(山本ほか編2006)、35：(藤井編1984)、36：(濱田ほか編2017)
 図28-1～11：(菅野編2011)、12：(小柳編2004)、12～14：(山城編2004)、15～22：(柴田・三浦編1991)、23：(小柳編2004)、24：(三浦・柴田・山田編1995)、25：(種市ほか編2003)、26：(皆川ほか編2018)、27：(高杉・高橋・加藤編2008)
 図29-1～4：(藤田ほか編2006)、5・6：(影浦・柳瀬編2005)、7：(種市ほか編2004)、8：(佐川ほか編2012)、9：(阿部・山口編1992)、10～25：(坪井・輪島編1992)
 図30-1：(葛西編1974)、2：(一丁田・畠山編1984)、3：(三浦・柴田・山田編1995)、4：(北林ほか編1992)、5・6：(山城編2004)(高杉・高橋・加藤編2008)
 図31-1～5：(濱田ほか編2017)
 図32-1・2：(高杉・高橋・加藤編2008)、3・4：(藤田ほか編2006)
 図33-1：(大田原・野村編2000)、2・3：(一丁田・畠山編1984)、4：(齋藤・秦・佐々木編2003)、5～9：(菅野編2011)、10：(斎藤編1995)、11：(濱田ほか編2017)、12・13：(村木編2008)、14：(三浦・柴田・山田編1995)、15・16：(山城編2004)
 図34-1～18：(柴田・三浦編1991)、19～21：(千代編1971)、22～24：(阿部・山口編1992)
 図35-1：(葛西編1974)、2：(前田編2005)、3・4：(一丁田・畠山編1984)、5：(齋藤・秦・佐々木編2003)、6：(佐々木・田中編2004)
 図36-1：(一丁田・畠山編1984)、2：(佐々木・田中編2004)、3～6：(濱田ほか編2017)7：(三浦・柴田編1983)、8：(藤田ほか編2006)
 図37-1～4：(秦ほか編2017)、5～21：(一丁田・畠山編1984)
 図38-1～10：(一丁田・畠山編1984)、11～13：(秋元ほか編1988)、14：(齋藤・秦・佐々木編2003)、15：(小笠原ほか編2010)、16：(永嶋ほか編2016)
 図39-1～8：(濱田ほか編2017)、9：(山城編2004)、10：(種市ほか2004)、11：(佐川ほか編2012)
 図40-1：(菅野編2011)、2・3：(濱田ほか編2017)
 図41-1～4：(秦ほか編2017)、5：(齋藤・秦・佐々木編2003)、6・7：(児玉・姥名編2002)
 図42-1～14：(一丁田・畠山編1984)、15・16：(菅野編2011)
 図43-1・2：(秋元ほか編1988)、3：(瀧澤編1998)、4～7：(濱田ほか編2017)、8：(山城編2004)
 図44-1：(前田編2005)、2：(三浦・柴田・山田編1995)、3：(藤田ほか編2006)、4～9：(佐川ほか編2012)
 図45-1：(一丁田・畠山編1984)、2：(齋藤・秦・佐々木編2003)、3：(葛西編1983)、4：(北林ほか編1992)、5：(濱田編2017)、6：(大島編1979)
 図46-1～9：(岡田ほか編2017)を再トレース
 図47-1～10：(岡田ほか編2017)を再トレース
 図48-1：(藤井編1984)、2：(藤井編2005)、3：(中嶋・岩田・工藤編2006)、4～8：(高田編1993)、9：(高田・中村編2006)
 図49-1：(斎藤編1995)、2：(北林ほか編1992)、3：(白鳥編1995)、4：(三浦・柴田編1983)、5：(三浦・柴田編1987)、6：(鎌田ほか編2007)、7：(藤田ほか編2006)
 図50-1・2：(中嶋ほか編2009)、3～17：(秦ほか編2017)
 図51-1～10：(秦ほか編2017)、11：(成田・浅田・斉藤編2010)、12：(葛西編1974)、13：(小田桐ほか編2002)
 図52-1～3・5：(大田原・野村編2000)、4：(神編2002)、6～9：(葛西編1974)
 図53-1～13：(葛西編1981)、14～20：(滝本編2005)
 図54-1～6：(鈴木編1986)、7：(鈴木編1988)
 図55-1～6：(葛西編1983)、7～11：(一丁田・畠山編1984)、12：(今井編1981)
 図56-1：(菅野編2011)、2：(杉渕編1999)、3：(藤井編2005)、4：(藤井・赤坂・工藤編2017)、5：(嶋ほか編1983)、6～11：(濱田ほか編2017)
 図57-1：(市川ほか編1987)、2：(大島編1979)、3・4：(三浦・柴田・山田編1995)、5・6：(三浦・柴田編1983)、7：(荒木編1973)
 図58：(小笠原ほか編2010)
 図59：(秦ほか編2017)を改変
 図60-1：(菅野・久保田編2015)を改変、2：(一丁田・畠山編1984)、3：(佐川ほか編2012)を改変
 表1・2：筆者作成

The Development of Stone Graves in the Tsugaru Strait region from the Late Middle to Mid-Late Jomon Period

Kouhei TAKAYA

From the late Middle to mid-Late Jomon period, numerous graves with stones arranged inside or directly on which (stone graves) distribute in the Tsugaru Strait region (southern Oshima Peninsula - northern Akita and Iwate Prefectures). While there is a long research history on the Jomon stone graves, the positioning of Jomon stone coffin burials and Jomon Circular Stone Burials in the region remains unclear, as their structural classification, temporal frequency, and regional characteristics have not been analyzed quantitatively yet. In this situation, this paper attempts to solve the problem by analyzing the structural classification, long-axis orientation of stone graves as well as the artifacts found in the graves. The analysis reveals that the distribution of stone graves changed by period and by regions. In terms of number, a significant increase in the early Late Jomon, then decrease in the mid-Late Jomon was observed. More stone graves were found in the sites with large-scale stone monument than those without them. Long-axis orientation of the stone graves, particularly for the stone coffin burials, tend to be align in the late Middle to the initial Late Jomon, while the pattern breaks down during early Late Jomon period. The proportion of stone graves with artifacts increases from the early Late Jomon. Clay or stone objects are more frequently found in the early Late Jomon, whereas accessories are more common in southern part of the Oshima Peninsula in the mid-Late Jomon. In addition, the result shows that the Circular Stone Burials can be classified into two types based on the size of circular-lined stones compared to the pits, the stone coffin burials emerged around Mt. Iwaki, evolving from pit burials with wood frames, stone graves as well as clay or stone objects played a crucial role in burial ritual centered on Jomon stone circles or large-scale stone monuments. The result also pointed out that organizations capable of constructing large-scale structures had already existed in the Tsugaru Strait region, and burial rituals centered on Jomon stone circles or large-scale stone monuments possibly have been established prior to the appearance of Jomon stone circles. Based on the above, it is suggested that the stone graves and Jomon stone circles in the Tsugaru Strait region evolved based on local elements from the late Middle to mid-Late Jomon period, indicating the social changes in the time and space would have been a gradual evolution rooted in the local traditions.